

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2021年6月24日

【事業年度】 第201期(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

【会社名】 大日本住友製薬株式会社

【英訳名】 Sumitomo Dainippon Pharma Co.,Ltd.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 野村 博

【本店の所在の場所】 大阪市中央区道修町二丁目6番8号

【電話番号】 06 - 6203 - 5708

【事務連絡者氏名】 経理部長 加島 久宜

【最寄りの連絡場所】 大阪市中央区道修町二丁目6番8号

【電話番号】 06 - 6203 - 5708

【事務連絡者氏名】 経理部長 加島 久宜

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所

(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	国際会計基準				
	第197期	第198期	第199期	第200期	第201期
決算年月	2017年3月	2018年3月	2019年3月	2020年3月	2021年3月
売上収益 (百万円)	408,357	466,838	459,267	482,732	515,952
税引前当期利益 (百万円)	42,781	84,866	65,046	83,947	77,851
親会社の所有者に帰属する当期利益 (百万円)	31,316	53,448	48,627	40,753	56,219
親会社の所有者に帰属する当期包括利益 (百万円)	29,829	48,402	56,195	45,670	61,008
親会社の所有者に帰属する持分 (百万円)	412,268	452,723	498,138	532,670	580,570
資産合計 (百万円)	779,072	809,684	834,717	1,256,534	1,308,127
1株当たり親会社所有者帰属持分 (円)	1,037.68	1,139.50	1,253.82	1,340.74	1,461.31
基本的1株当たり当期利益 (円)	78.82	134.53	122.39	102.58	141.50
希薄化後1株当たり当期利益 (円)	-	-	-	-	-
親会社所有者帰属持分比率 (%)	52.9	55.9	59.7	42.4	44.4
親会社所有者帰属持分当期利益率 (%)	7.8	12.4	10.2	7.9	10.1
株価収益率 (倍)	23.3	13.3	22.4	13.7	13.6
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	19,143	93,420	48,711	46,128	135,601
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	56,129	16,523	35,049	312,684	8,875
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	8,764	29,610	28,645	231,081	57,215
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	105,603	147,775	137,296	101,708	193,698
従業員数 (人)	6,492	6,268	6,140	6,457	6,822

(注) 1 売上収益には消費税等は含まれておりません。

2 第199期までの希薄化後1株当たり当期利益については、希薄化効果を有する株式が存在しないため記載しておりません。第200期および第201期の希薄化後1株当たり当期利益については、潜在株式は存在するものの逆希薄化効果を有するため記載しておりません。

3 百万円未満を四捨五入して記載しております。

4 第198期より国際会計基準(以下「IFRS」)に基づいて連結財務諸表を作成しております。

5 第200期における当社とロイバント・サイエンシズ・リミテッドとの間の戦略的提携に伴い取得したスミトバント・バイオフィーマ・リミテッドに係る企業結合の会計処理について、第200期末において暫定的な会計処理を行っていましたが、第201期において確定したため、第200期の関連する主要な経営指標等について遡及修正しております。

回次	日本基準	
	第197期	第198期
決算年月	2017年 3月	2018年 3月
売上高 (百万円)	411,639	477,966
経常利益 (百万円)	54,083	60,887
親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	28,733	37,525
包括利益 (百万円)	20,880	30,609
純資産額 (百万円)	460,389	483,050
総資産額 (百万円)	783,640	801,425
1株当たり純資産額 (円)	1,158.80	1,215.84
1株当たり当期純利益 金額 (円)	72.32	94.45
潜在株式調整後1株当 たり当期純利益金額 (円)	-	-
自己資本比率 (%)	58.8	60.3
自己資本利益率 (%)	6.3	8.0
株価収益率 (倍)	25.4	18.9
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	21,624	96,326
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	59,729	20,493
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	9,881	28,546
現金及び現金同等物 の期末残高 (百万円)	105,603	147,775
従業員数 (人)	6,492	6,268

- (注) 1 第198期の日本基準に基づく連結財務諸表については、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査を受けておりません。
- 2 売上高には消費税等は含まれておりません。
- 3 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
- 4 第197期におけるトレロ・ファーマシューティカルズ・インク（現：スミトモダイニッポンファーマ オンコロジー・インク）の買収に関する企業結合の会計処理について、第197期末において暫定的な会計処理を行っていましたが、第198期において確定したため、第197期の関連する主要な経営指標等について遡及修正しております。
- 5 百万円未満を四捨五入して記載しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第197期	第198期	第199期	第200期	第201期
決算年月	2017年 3月	2018年 3月	2019年 3月	2020年 3月	2021年 3月
売上高 (百万円)	256,532	251,101	264,462	311,994	313,890
経常利益 (百万円)	92,099	71,320	95,834	140,758	135,928
当期純利益 (百万円)	63,902	42,364	68,470	100,771	116,499
資本金 (百万円)	22,400	22,400	22,400	22,400	22,400
発行済株式総数 (千株)	397,900	397,900	397,900	397,900	397,900
純資産額 (百万円)	515,585	561,109	619,106	697,163	810,181
総資産額 (百万円)	642,112	675,891	718,798	1,073,627	1,172,584
1株当たり純資産額 (円)	1,297.72	1,412.31	1,558.30	1,754.77	2,039.25
1株当たり配当額 (うち1株当たり 中間配当額) (円)	20.00 (9.00)	28.00 (9.00)	28.00 (9.00)	28.00 (14.00)	28.00 (14.00)
1株当たり当期純利益 金額 (円)	160.84	106.63	172.34	253.64	293.23
潜在株式調整後1株当 たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	80.3	83.0	86.1	64.9	69.1
自己資本利益率 (%)	13.0	7.9	11.6	15.3	15.5
株価収益率 (倍)	11.4	16.7	15.9	5.5	6.6
配当性向 (%)	12.4	26.3	16.2	11.0	9.5
従業員数 (人)	3,572	3,402	3,067	3,023	3,067
株主総利回り (比較指標：配当込み TOPIX) (%) (%)	143.4 (114.7)	141.5 (132.9)	217.1 (126.2)	116.3 (114.2)	158.9 (162.3)
最高株価 (円)	2,134	1,898	4,135	2,806	2,107
最低株価 (円)	1,246	1,397	1,770	1,166	1,180

(注) 1 売上高には消費税等は含まれておりません。

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3 百万円未満を四捨五入して記載しております。

4 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

5 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)等を第199期の期首から適用しており、第198期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

2 【沿革】

1897年 5月	大阪市道修町の有力薬業家21名により、当社の前身大阪製薬株式会社を設立
1898年 9月	大阪工場設置
1898年11月	大日本製薬合資会社を買収し、社名を大日本製薬株式会社に改める
1908年 7月	大阪薬品試験株式会社を吸収合併
1947年10月	五協産業株式会社（現 D S P五協フード&ケミカル株式会社）を設立
1949年 5月	大阪、東京両証券取引所に株式上場（1961年10月両証券取引所市場第一部に指定）
1968年10月	鈴鹿工場設置
1971年 2月	総合研究所設置
1993年 1月	米国に現地法人 大日本製薬 U S A（後のダイニッポンスミトモファーマ アメリカ・インク）を設立
2003年 4月	大阪工場を閉鎖し、生産拠点を鈴鹿工場に統合
2005年10月	住友製薬株式会社と合併し、大日本住友製薬株式会社に商号変更
2005年10月	合併により茨木工場、愛媛工場、大分工場および大阪研究所他を承継 また主な子会社として、住友制薬(蘇州)有限公司 他を承継
2009年 7月	米国に持株会社 ダイニッポンスミトモファーマ アメリカホールディングス・インク（現 スミトモダイニッポンファーマ アメリカ・インク）を設立
2009年10月	米国セブラコール・インク（現 サノピオン・ファーマシューティカルズ・インク）を買収
2010年 4月	セブラコール・インクがダイニッポンスミトモファーマ アメリカ・インクを吸収合併
2010年 7月	会社分割により、当社のアニマルサイエンス事業を新設した D S ファーマアニマルヘルス株式会社に承継 また当社のフード&スペシャリティ・プロダクツ事業を D S P五協フード&ケミカル株式会社（五協産業株式会社から商号変更）に承継
2012年 4月	米国ボストン・バイオメディカル・インクを買収
2012年 9月	サノピオン・ファーマシューティカルズ・インクが米国エレベーション・ファーマシューティカルズ・インク（現 サノピオン・レスピラトリー・ディベロップメント・インク）を買収
2013年 1月	シンガポールにサノピオン・ファーマシューティカルズ・アジア・パシフィック・プライベート・リミテッド（現 スミトモ・ファーマシューティカルズ・アジア・パシフィック・プライベート・リミテッド）を設立
2013年 7月	東京支社を東京本社に改称し、東西両本社制に移行
2016年10月	サノピオン・ファーマシューティカルズ・インクがカナダのシナプサス・セラピューティクス・インク（現 サノピオン・シーエヌエス・ディベロップメント・カナダ・ユーエルシー）を買収
2017年 1月	米国トレロ・ファーマシューティカルズ・インクを買収
2019年 4月	茨木工場および愛媛工場を廃止し、鈴鹿工場と大分工場の2生産拠点体制に再編
2019年12月	ロイバント・サイエンシズ・リミテッドとの戦略的提携により、スミトバント・バイオファーマ・リミテッドおよびその傘下のマイオバント・サイエンシズ・リミテッド、ユーロバント・サイエンシズ・リミテッド、エンジバント・セラピューティクス・リミテッド、アルタバント・サイエンシズ・リミテッドおよびスピロバント・サイエンシズ・リミテッドを子会社化
2020年 7月	ボストン・バイオメディカル・インクがトレロ・ファーマシューティカルズ・インクを吸収合併し、スミトモダイニッポンファーマ オンコロジー・インクに商号変更

3 【事業の内容】

当社グループは、2021年3月31日現在、当社、親会社、子会社57社および関連会社5社で構成されております。

当社グループが営んでいる主な事業内容と当社グループを構成している各会社の当該事業に係る位置付けの概要およびセグメントとの関連は次のとおりであります。

<医薬品>

(1) 日本

当社が医療用医薬品の製造、仕入および販売を行っております。

D S ファーマプロモ株式会社、医療用医薬品（オーソライズド・ジェネリック品（A G 品））の製造および販売を行っております。

株式会社サイレジェンは、当社と株式会社ヘリオスが設立した合弁会社であり、両社による再生医療に関する共同開発により製品化された医薬品、医療機器および再生医療等製品の製造を実施します。

S - R A C M O 株式会社は、当社と親会社である住友化学株式会社が2020年9月に設立した合弁会社であり、再生・細胞医薬分野の開発受託および製造受託を行っております。

(2) 北米

持株会社であるスミトモダイニッポンファーマ アメリカ・インクのもと、サノピオン・ファーマシューティカルズ・インク他4社が、医療用医薬品の製造、仕入および販売を行っており、スミトモダイニッポンファーマ オンコロジー・インクが、がん領域の研究開発を行っております。

また、スミトモダイニッポンファーマ アメリカ・インクは、北米子会社（サノピオン・ファーマシューティカルズ・インク、スミトモダイニッポンファーマ オンコロジー・インク、スミトバントグループ）の一般管理業務の一部についても行っております。

スミトバントグループは、スミトバント・バイオフーマ・リミテッドを持株会社として、スミトバント・バイオフーマ・インク、マイオバント・サイエンシズ・リミテッド、ユーロバント・サイエンシズ・リミテッド、エンジバント・セラピューティクス・リミテッド、アルタバント・サイエンシズ・リミテッドおよびスピロバント・サイエンシズ・リミテッドで構成されております。

また、持株会社であるスミトバント・バイオフーマ・リミテッドおよびスミトバント・バイオフーマ・インクがスミトバントグループの事業戦略、販売戦略の策定推進を行うとともに、当社グループにおけるヘルスケアテクノロジープラットフォームの活用推進等を行っております。また、マイオバント・サイエンシズ・リミテッドとその子会社6社が婦人科領域・前立腺がんの研究開発および製造・販売を、ユーロバント・サイエンシズ・リミテッドとその子会社5社が泌尿器科領域の研究開発および販売準備を、エンジバント・セラピューティクス・リミテッドとその子会社8社が希少疾病に対する再生細胞医薬品の研究開発と販売準備を、アルタバント・サイエンシズ・リミテッドとその子会社5社が呼吸器疾患領域の研究開発を、スピロバント・サイエンシズ・リミテッドとその子会社3社が嚢胞性繊維症治療薬の研究開発を行っております。

(3) 中国

住友製薬（蘇州）有限公司が、医療用医薬品の製造（小分包装）および販売を行っております。

(4) 海外その他

欧州では、サノピオン・ファーマシューティカルズ・ヨーロッパ・リミテッド他1社が、医療用医薬品の製造および販売を行っております。

スミトモ・ファーマシューティカルズ・アジア・パシフィック・プライベート・リミテッド他2社が、東南アジア、台湾において、医療用医薬品の仕入、販売および当社製品の情報提供・収集活動を行っております。

<その他>

D S P 五協フード&ケミカル株式会社は、食品素材・食品添加物および化学製品材料等の製造、仕入、販売を行っており、このうちの一部を当社にも供給しております。

D S ファーマアニマルヘルス株式会社は、動物用医薬品等の製造、仕入および販売を行っております。

サンテグレ株式会社は、骨・肉エキス、飼料、肥料等を製造し、D S P 五協フード&ケミカル株式会社に供給しております。

体外診断用医薬品の製造、仕入および販売を行っていたS B バイオサイエンス株式会社については、同社株式を2021年3月31日付で住友ベークライト株式会社に譲渡いたしました。

また、上記の他に子会社5社および関連会社3社があり、医薬品等の保管・配送等の各種サービス業務を行っております。

- 1: マイオバント・サイエンシズ・リミテッド、ユーロバント・サイエンシズ・リミテッド、エンジバント・セラピューティクス・リミテッド、アルタバント・サイエンシズ・リミテッドおよびスピロバント・サイエンシズ・リミテッドは、スミトバント・バイオフーマ・リミテッドの子会社であります。
- 2: サノビオン・ファーマシューティカルズ・ヨーロッパ・リミテッドは、サノビオン・ファーマシューティカルズ・インクの子会社であります。
- 3: マルビー・ライフテック(株)は、D S ファーマアニマルヘルス(株)の子会社であります
- 4: サンテグレ(株)およびベタグロダイニッポン テクノ・エクスカンパニー・リミテッドは、D S P 五協フード&ケミカル(株)の関連会社であります。
- 5: ゴキョウ・アメリカ・インクは、D S P 五協フード&ケミカル(株)の子会社であります。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 又は 出資金	主要な事業 の内容	議決権の 所有(被所有)割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割 合(%)	
(親会社)						
住友化学株式会社	東京都 中央区	89,699 百万円	化学製品の製造、 販売		51.78	原料の販売仕入、土地等 の賃借、工場用役の購入 等および資金の貸付をし ております。 役員の兼任等...無
(連結子会社)						
スミトダイニッポン ファーマ アメリカ・イン ク	米国 マサチュー セッツ州 マールボロ	1千 米ドル	持株会社 一般管理業務の受 託〔北米〕	100		役員の兼任等...無
サノピオン・ファーマ シューティカルズ・イン ク(注)4、5	米国 マサチュー セッツ州 マールボロ	0千 米ドル	医療用医薬品の製 造、販売〔北米〕	100 (100)		当社中間製品の仕入、包 装、販売および当社製品 の開発業務を受託しており ます。 役員の兼任等...有
スミトダイニッポン ファーマ オンコロ ジー・インク(注)4	米国 マサチュー セッツ州 ケンブリッジ	0千 米ドル	がん領域の研究開 発〔北米〕	100 (100)		役員の兼任等...有
スミトバント・バイオ ファーマ・リミテッド (注)4	英国 ロンドン	0千 米ドル	スミトバントグ ループ会社の管理 および事業戦略等 の策定推進〔北 米〕	100		役員の兼任等...有
マイオバント・サイエ ンシズ・リミテッド (注)4	英国 ロンドン	2千 米ドル	医療用医薬品(婦 人科および前立腺 がん)の研究開発 および製造・販売 〔北米〕	53.45 (53.45)		役員の兼任等...有
ユーロバント・サイエ ンシズ・リミテッド (注)4、6	英国 ロンドン	1千 米ドル	医療用医薬品(泌 尿器科疾患)の研 究開発〔北米〕	100 (100)		役員の兼任等...無
エンジバント・セラ ピューティクス・リミ テッド(注)4	英国 ロンドン	0千 米ドル	医療用医薬品(小 児希少疾患)の研 究開発〔北米〕	100 (100)		役員の兼任等...有
アルタバント・サイエ ンシズ・リミテッド (注)4	英国 ロンドン	1千 米ドル	医療用医薬品(呼 吸器系希少疾患) の研究開発 〔北米〕	100 (100)		役員の兼任等...無
スピロバント・サイエ ンシズ・リミテッド (注)4	バミューダ	0千 米ドル	医療用医薬品(嚢 胞性繊維症)の研 究開発〔北米〕	100 (100)		役員の兼任等...無
住友製薬(蘇州)有限 公司(注)4	中国 江蘇省 蘇州市	35,000千 米ドル	医療用医薬品の製 造、販売〔中国〕	100		当社中間製品の仕入、包 装、販売および当社製品 の開発業務を受託しており ます。 役員の兼任等...無
DSファーマアニマル ヘルス株式会社	大阪市 中央区	100 百万円	動物用医薬品等の 製造、販売 〔その他〕	100		当社が製品の製造等を受 託しております。 役員の兼任等...無
DSP五協フード&ケ ミカル株式会社	大阪市 北区	100 百万円	食品素材・食品添 加物および化学製 品材料等の製造、 販売〔その他〕	100		原料の購入等をしており ます。 役員の兼任等...無
DSファーマプロモ株 式会社	大阪府 吹田市	480 百万円	医療用医薬品等の 製造、販売 〔日本〕	100		製品の仕入販売等をして おります。 役員の兼任等...有
その他44社(注)4						

名称	住所	資本金 又は 出資金	主要な事業 の内容	議決権の 所有(被所有)割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割 合(%)	
(持分法適用関連会社) その他2社						
(その他の関係会社) 該当する会社はありません。						

- (注) 1 上記の親会社は有価証券報告書を提出しております。
- 2 上記の連結子会社の主要な事業の内容の[]内は、セグメント情報の名称を記載しております。
- 3 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合を内数で示しております。
- 4 特定子会社に該当しております。なお、その他に含まれる会社のうち、特定子会社に該当する会社は次のとおりです。
 スミトバント・バイオフィーマ・インク、マイオバント・サイエンシズ・インク、マイオバント・サイエンシズ・ゲーエムベーハー、ユーロバント・ホールディングス・リミテッド、ユーロバント・サイエンシズ・ゲーエムベーハー、エンジバント・セラピューティクス・ゼネラル・リミテッド、エンジバント・セラピューティクス・ホールディングス・リミテッド、エンジバント・セラピューティクス・ゲーエムベーハー、エンジバント・ファーバー・リミテッド、アルタバント・サイエンシズ・ホールディングス・リミテッド、アルタバント・サイエンシズ・ゲーエムベーハー、オンスピラ・セラピューティクス・インク、スピロバント・サイエンシズ・インク
- 5 サノピオン・ファーマシューティカルズ・インクについては、売上収益(連結会社相互間の内部売上収益を除く)の連結売上収益に占める割合が10%を超えております。
- | | | |
|----------|-----------|------------|
| 主要な損益情報等 | (1) 売上収益 | 274,972百万円 |
| | (2) 営業利益 | 13,026百万円 |
| | (3) 当期純利益 | 15,516百万円 |
| | (4) 資本合計 | 160,130百万円 |
| | (5) 資産合計 | 378,278百万円 |
- 6 当期においてユーロバント・サイエンシズ・リミテッドを完全子会社化するために設立したTitan Ltd.は、ユーロバント・サイエンシズ・リミテッドを存続会社とする吸収合併により消滅しております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2021年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
日本	2,140
北米	1,704
中国	701
海外その他	66
その他	260
全社(共通)	1,951
合計	6,822

(注) 1 従業員数は就業人員数であります。

2 全社(共通)として記載されている従業員数は、管理部門、研究開発部門等に所属している人員であります。

(2) 提出会社の状況

2021年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
3,067	43.1	17.8	8,966,757

2021年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
日本	2,046
北米	5
中国	2
海外その他	5
その他	
全社(共通)	1,009
合計	3,067

(注) 1 従業員数は就業人員数であります。

2 平均年間給与は、賞与および基準外賃金を含んでおります。

3 平均勤続年数および平均年間給与は出向受入者を除いて算出しております。

4 全社(共通)として記載されている従業員数は、管理部門、研究開発部門等に所属している人員であります。

(3) 労働組合の状況

当社および子会社の労働組合は、ユニオンショップ制をとっており、組合員数は当連結会計年度末現在2,098人です。

なお、会社と労働組合は、円満な関係を持続しております。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

当社は、人々の健康で豊かな生活のために、研究開発を基盤とした新たな価値の創造により、広く社会に貢献することを企業理念とし、以下の経営理念を掲げております。

- 顧客視点の経営と革新的な研究を旨とし、これからの医療と健やかな生活に貢献する
- たゆまぬ事業の発展を通して企業価値を持続的に拡大し、株主の信頼に応える
- 社員が自らの可能性と創造性を伸ばし、その能力を発揮することができる機会を提供していく
- 企業市民として社会からの信用・信頼を堅持し、よりよい地球環境の実現に貢献する

当社は、この企業理念の実践を「CSR経営」と定義し、事業活動を通してSDGs（持続可能な開発目標）の達成にも貢献していきます。

高齢化社会の進展や医療財政のさらなるひっ迫が想定されるなか、製薬業界は、デジタル技術を活用した創薬や治療方法の創出、予防医療の普及など「変革の時」を迎えています。かかる環境において、当社は、企業理念のもと、ヘルスケア領域での課題解決に貢献するため、新たなビジョン「もっと、ずっと、健やかに。最先端の技術と英知で、未来を切り拓く企業」と、2018年度を起点とした2022年度までの5か年の「中期経営計画2022」を2019年4月に発表しました。

「中期経営計画2022」の基本方針は、次のとおりです。

中期経営計画2022

<基本方針>

ポスト・ラツェダ、すなわち、2023年2月20日以降に米国において非定型抗精神病薬「ラツェダ」の後発医薬品の市場参入が可能となる将来の事業環境を見据えつつ、「変革の時」に対応するため、「成長エンジンの確立」と「柔軟で効率的な組織基盤づくり」により、事業基盤の再構築に取り組む。

この方針に則り、当社は、2019年12月からロイバント・サイエンシズ・リミテッド（以下「ロイバント社」）との戦略的提携を開始するとともに、新設子会社であるスミトバント・バイオフーマ・リミテッド（以下「スミトバント社」）の傘下に5社の子会社を迎えました。この戦略的提携では、米国における「ラツェダ」の独占販売期間終了後の持続的成長に向けて、大型化を期待するレルゴリクス（ゴナドトロピン放出ホルモン受容体アンタゴニスト）およびピベグロン（3アドレナリン受容体アゴニスト）を含む多数のパイプラインならびに当社のデジタル革新を加速するヘルスケアテクノロジープラットフォームであるDrugOMEおよびDigital Innovationとそれらに関わる人材を獲得しました。他方で、ポスト・ラツェダの成長ドライバーとして期待していたナバパカシンの開発を2021年3月に中止しました。

ナバパカシンの開発中止による影響は、売上収益の減少はスミトバント社新製品の売上増加により補えるものの、スミトバント社新製品の販売関連費用および特許権償却費の計上の影響もあり、コア営業利益は減少すると見込んでいます。これを踏まえて、「中期経営計画2022」で掲げた2022年度の経営目標について、次のとおり修正しました。

2022年度の経営目標

	従来目標	修正目標
売上収益	6,000億円	6,000億円
コア営業利益	1,200億円	600億円
ROIC 1	10%	3%
ROE 2	12%	3%

1 ROIC = (コア営業利益 - 法人所得税) / (資本合計 + 有利子負債)

2 ROE = 親会社の所有者に帰属する当期利益 / 親会社の所有者に帰属する持分

当社グループは、レゴリクスおよびピベグロンの製品価値最大化を追求すると同時に、中長期的な事業拡大に向け、精神神経領域、がん領域および再生・細胞医薬分野において大型化が期待できる製品の開発に最大限注力してまいります。また、フロンティア事業の展開も推進してまいります。事業運営においては、各事業ユニットおよび地域での基盤強化などの経営体質の強化を進めるとともに、変革を加速する企業文化の醸成と人材の育成にも継続して取り組みます。

また、DrugOMEの解析担当者およびDigital Innovationの活用を推進する専任技術者を日米で合わせて約35名擁し、生産性の向上と業務課題の解決を進めていますが、今後もデジタル技術を積極的に活用し、データ駆動型企業への変革を加速してまいります。

当社グループは、これらの取組を通じて持続的に成長することにより、2020年代の後半にROE10%以上となることを目指してまいります。

2021年度活動方針

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行により、当社グループが事業を展開する各国・地域において、情報提供活動の制限や臨床試験の遅延が生じるなど、事業活動への様々な影響が続いています。当社グループは、引き続き、患者さんに確実に医薬品をお届けするため、原材料の確保から製品の製造および販売に至る各段階の活動が停滞しないよう細心の注意を払い、医薬品の安定供給に努めるとともに、医療関係者、取引先、従業員等の安全を最優先に事業活動を進めてまいります。また、オンラインコミュニケーションツールの活用など、テレワークにより対面での意思疎通ができないことを補う取組を推進してまいります。

当社グループの2021年度の事業活動方針は、次のとおりです。

CSR経営

当社グループは、CSR経営を実践していくための重要課題をマテリアリティとして特定しています。マテリアリティでは、革新的な医薬品と医療ソリューションの創出、サイエンス発展への貢献などの持続的成長のために重要な独自性の高い「価値創造につながるマテリアリティ」と、コーポレートガバナンス、コンプライアンスなどの事業活動継続のために不可欠である「事業継続の基盤となるマテリアリティ」に分類して取り組んでいます。今後も様々なステークホルダーからのご意見を踏まえ、定量目標の設定も含め、当社の企業理念に整合する適切な目標となるよう継続的な見直しを行い、また、これを実践することを通じて、企業価値の向上に取り組んでまいります。

価値創造につながるマテリアリティ — 課題解決が当社の持続的成長にとって重要



事業継続の基盤となるマテリアリティ — 課題解決が当社の持続的成長にとって不可欠

<ul style="list-style-type: none"> ● 人権の尊重 ● コーポレートガバナンス ● コンプライアンス 	<ul style="list-style-type: none"> ● リスクマネジメント ● 公正・透明な企業活動 ● 信頼性保証、安定供給 	<ul style="list-style-type: none"> ● CSR調達 ● 従業員の健康・安全衛生 ● 環境への取組
--	---	--

研究開発活動

当社グループは、「グローバル・スペシャライズド・プレーヤー」を2033年の目指す姿として掲げています。精神神経領域、がん領域および再生・細胞医薬分野の重点3領域でグローバルリーダーになることを目指し、積極的に研究開発に取り組むとともに、価値にフォーカスしたベストインクラスの医薬品の開発や、感染症領域の研究開発にも取り組んでまいります。また、医薬品以外のヘルスケア領域でのソリューションを提供することを目的として、フロンティア事業にも取り組んでまいります。また、AIを用いた創薬やDrugOMEなどの積極的なデジタル技術の活用および日米各グループ会社の連携強化を通じたシナジー効果の発揮により、研究開発の生産性向上にも取り組んでまいります。

2033年の目指す姿



※ベストインクラス：既存薬はあるが、その既存薬に対して明確な優位性を持つ新薬のこと

(ア)精神神経領域

先端技術を取り入れながら築いた自社独自の創薬技術プラットフォームを基盤に、競争力のある創薬研究を推進しています。精神疾患領域（統合失調症、うつ、神経疾患周辺症状など）においては、神経回路病態に基づく創薬によりアンメット・メディカル・ニーズを満たす治療の最適化を目指し、神経疾患領域（認知症、パーキンソン病、希少疾患など）においては、分子病態メカニズムに基づく創薬により神経変性疾患の根治療法を目指しています。また、自社製品の臨床試験の情報から得られた知見をトランスレーショナル研究に活用し、ゲノム情報やイメージング画像などのビッグデータから適切な創薬ターゲットやバイオマーカーを選定することで、研究開発の確度の向上を図ってまいります。

開発段階では、日米が一体となったグローバル臨床開発体制のもと、戦略的な開発計画を策定し、効率的に臨床開発を推進して、早期に承認取得することを目指しています。

SEP-363856について、米国での統合失調症を対象としたフェーズ3試験ならびに日本および中国での統合失調症を対象としたフェーズ2 / 3試験を推進し、加えて、他の疾患を対象とした臨床試験の開始に向けて検討を進めてまいります。また、SEP-4199について、国際共同フェーズ2試験の結果を踏まえて、双極型障害うつを対象としたフェーズ3試験を開始します。さらには、エクセンティア・リミテッドとの共同研究を通じて、AIを活用して創製した、強迫性障害を対象としたフェーズ1試験を実施中のDSP-1181や、治療抵抗性うつを対象としたフェーズ1試験を実施中のSEP-378614などの初期開発品についても、積極的に取り組んでまいります。

(イ)がん領域

当社グループは、これまでの研究開発活動を通じて、様々な知見を得るとともに、創薬力を強化し、特長を有する複数の開発パイプラインを創出してまいりました。これらを生かし、引き続きアンメット・メディカル・ニーズの高いがん領域の研究開発に注力してまいります。

創薬においては、自社が有する新規技術を用いたモダリティ展開やアカデミアとの共同研究などの取組を通じて競争力を高め、革新的な新薬の創出を目指してまいります。

開発段階では、当社の特長を有する開発パイプラインについて、短期、小規模の試験により最適な対象がん種および製品価値を見極め、成功確度の向上と早期の承認取得を目指してまいります。

膠芽腫を対象とした併用での国際共同フェーズ3試験を実施中のがんペプチドワクチンであるアデグラモチド酢酸塩 / ネラチモチドリフルオロ酢酸塩（開発コード：DSP-7888）のほか、急性骨髄性白血病を対象として外部研究機関主導治験によるフェーズ1 / 2試験を実施中のdubermatinib（開発コード：TP-0903）に加えて、初期開発品の臨床開発を進めてまいります。

(ウ)再生・細胞医薬分野

オープンイノベーションを基軸に、高度な工業化・生産技術と最先端のサイエンスを追求する当社独自の成長モデルにより早期事業化を目指し、複数の研究開発プロジェクトを推進してまいります。神経領域および眼疾患領域に関するプロジェクトを着実に推進するとともに、立体臓器の再生を含む次世代の再生医療の取組も視野に入れ、グローバル（日本、米国およびアジア）での展開を目指し、まずは日本および米国を中心に次期中期経営計画（以下「次期中計」）の期間（2023年度から2027年度まで）での収益貢献を目指してまいります。

小児先天性無胸腺症を対象として2021年4月に再申請を行ったRVT-802について、2021年度中の承認取得に向けて取り組んでまいります。iPS細胞由来では、パーキンソン病を対象として京都大学にて医師主導治験実施中の先駆け審査指定制度の指定品目である「非自己iPS細胞由来ドパミン神経前駆細胞」について、2021年度中に7例すべての治験予定の患者さんへの細胞移植が完了する予定であり、当社グループは、京都大学と連携して実用化に向けて取り組むとともに、米国での2022年度の企業治験開始を目指した準備を進めてまいります。また、加齢黄斑変性について、2021年度中の企業治験開始を目指し、網膜色素変性、脊髄損傷および腎不全の研究開発プロジェクトについても提携先とともに積極的に推進してまいります。さらには、次世代技術を取り入れたパイプラインの拡充にも取り組んでまいります。

(エ)感染症領域

薬剤耐性菌感染症治療薬、マラリアワクチンおよびユニバーサルインフルエンザワクチンの共同研究を推進するなど、グローバルヘルスに貢献するため、引き続き研究開発に積極的に取り組み、次期中計の期間中の実用化を目指してまいります。

(オ)その他の領域

米国における「ラツータ」の独占販売期間終了後の成長に向けて、価値にフォーカスしたベストインクラスの医薬品の開発などを推進してまいります。米国において、子宮筋腫を対象とした承認申請を行ったレルゴリクス配合剤について、着実な承認取得に向けて取り組む（2021年5月承認取得済）とともに、子宮内膜症を対象とした承認申請に向けて準備を進めてまいります。また、rodatristat ethylについて、肺動脈性肺高血圧症（PAH）を対象としたフェーズ2試験を進めてまいります。

日本においては、イメグリミン塩酸塩の2型糖尿病を対象とした承認取得に向けて取り組んでまいります。（2021年6月承認取得済）

(カ)フロンティア事業

株式会社Save Medicalとの2型糖尿病管理指導用モバイルアプリケーション（開発コード：SMC-01）の共同開発を推進するなど、自社医薬事業とシナジーが見込める領域として、メンタルレジリエンス（精神神経疾患の兆候を早期に把握することによる悪化の未然防止）およびアクティブエイジング（高齢者の健康の意識レベルからの改善および維持・向上）にフォーカスし、核となる技術（情報系、工学系等）やネットワーク（アライアンス、ベンチャー投資等）などの事業基盤の構築を進めることにより、次期中計の期間に成長エンジンとして確立することを目指し、日本、米国および中国を中心に様々な展開の可能性を追求してまいります。

各地域セグメントにおける事業活動

日本においては、薬価中間年改定の開始などの薬剤費抑制策により厳しさを増す市場環境に対応すべく、より一層の効率的な事業運営を推進してまいります。精神神経領域では、2020年6月に統合失調症および双極性障害におけるうつ症状の改善を適応症として上市した「ラツダ」の市場浸透に努めてまいります。糖尿病領域では、2型糖尿病治療剤「トルリシティ」、「エクア」および「エクメット」の販売拡大に努めるとともに、2021年度に上市を計画しているイメグリミン塩酸塩の販売準備活動を進めてまいります。

北米セグメントでは、ポスト・ラツダを見据えた成長路線の確立を目指し、サノビオン・ファーマシューティカルズ・インク（以下「サノビオン社」）およびスミトバントグループにおいて事業活動を進めてまいります。サノビオン社では、当社グループの収益の柱である「ラツダ」のさらなる収益拡大、また、2020年9月に上市したパーキンソン病に伴うオフ症状治療剤「キンモビ」に注力してまいります。スミトバントグループでは、マイオバント・サイエンシズ・リミテッド（以下「マイオバント社」）が2021年1月に上市した進行性前立腺がん治療剤「オルゴピクス」（一般名：レルゴリクス）および2021年度に上市を計画している子宮筋腫を対象としたレルゴリクス配合剤「マイフェンブリー」について、ファイザー・インク（以下「ファイザー社」）とのコ・プロモーションにより速やかな市場浸透および販売拡大に注力してまいります。ユーロバント・サイエンシズ・リミテッド（以下「ユーロバント社」）では、2021年4月に上市した過活動膀胱治療剤「ジェムテサ」（一般名：ビベグロン）の市場浸透に努めてまいります。マイオバント社およびユーロバント社の販売に際しては、サノビオン社が有するコマーシャル機能を有効活用するなど、効率的な販売に努めてまいります。

当社グループは、中国を第3の柱として基盤強化に取り組むとともに、アジアを成長市場として捉えて足場固めを推進してまいります。中国セグメントでは、薬剤費抑制策が進んではいるものの、さらなる成長に向けて、カルバペネム系抗生物質製剤「メロペン」、非定型抗精神病薬「ロナセン」および「ラツダ」の販売拡大に努めてまいります。東南アジアでは、自社パイプラインに適した国での事業拡大を進めるとともに、提携企業との連携による「メロペン」および「ラツダ」の販売拡大に努めてまいります。

柔軟で効率的な組織基盤の構築

当社グループは、「変革の時」に対応し、「ちゃんとやりきる力」を強化するため、「粘り強く精緻に物事を進める文化」を維持しつつ、環境変化を好機と捉えて潮流を読み、自ら変革して柔軟に動く文化の醸成および人材の育成を推進してまいります。

また、事業環境の変化に対応していくため、基盤強化を進めるとともに、Digital Innovationの利用拡大などデジタル革新を推進してまいります。さらに、新型コロナウイルス感染症の影響によりテレワークを余儀なくされるなかでの業務効率の向上など、これを機に働き方改革の加速に取り組んでまいります。

株主還元

当社は、株主への還元について、安定的な配当に加えて、業績向上に連動した増配を行うことを基本方針としており、「中期経営計画2022」で掲げているとおり、2018年度から2022年度までの5年間における平均の配当性向20%以上を目指してまいります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

2 【事業等のリスク】

当社グループの財政状態、経営成績およびキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）に重要な影響を及ぼす可能性のある主なリスクには以下のようなものがあります。当社は、これらのリスクが発生する可能性を認識した上で、発生防止または最小化に努めるとともに、発生した場合の的確な対応に努めていく方針です。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末において当社グループが判断したものであります。また、すべてのリスクを網羅したのではなく、現時点では予見できない又は重要と見なされていないリスクの影響を将来的に受ける可能性があります。

(1) 新製品の研究開発に関わるリスク

当社グループは、独創性の高い国際的に通用する有用な新製品の開発に取り組んでおります。しかしながら、新薬開発の難度が高まる中、開発が今後計画どおりに進み承認・発売に至るとは限らず、また、有効性や安全性の観点から開発が遅延し、または開発を中止しなければならない事態も起こり得ます。大型化を期待している研究開発品目においてそのような事態が発生した場合には、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。

当社グループでは研究開発リスクも踏まえつつ、精神神経領域、がん領域および再生・細胞医薬分野を重点3領域として研究開発に注力し、当該領域におけるパイプラインの充実化を進めております。また、グローバルで運営する開発体制とすることにより、戦略的な開発計画を策定し、効率的な臨床開発を推進しております。当社では、開発ステージの移行時期にあわせて計画修正の是非等を確認する会議体などを通じて適宜研究開発方針を見直し、適切にポートフォリオを管理しております。

(2) 連結売上収益における比率の高い特定製品に関するリスク

当社グループの収益の柱である、「ラツダ」（ルラシドン塩酸塩）の当連結会計年度の北米での売上収益は、当社連結売上収益の40%を占めております。「ラツダ」の有力な競合品の出現（これには先発医薬品メーカーによる競合品の上市のほか、後発医薬品メーカーによる「ラツダ」の競合品の発売が含まれますが、これらに限りません。）または原材料調達を含むサプライチェーンへの影響その他の予期せぬ事情等により、売上収益が減少した場合には、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。

当社グループでは、中期経営計画2022のもと、成長エンジンの確立に取り組んでおります。精神神経領域、がん領域および再生・細胞医薬分野の重点3領域を中心とする研究開発への注力に加え、戦略的投資によって早期の収益に貢献することが期待できる後期開発品目の獲得を含むパイプラインの充実化を図っております。また、自社医薬事業とのシナジーが見込める領域を中心に、社会に新しい価値を提供するヘルスケアソリューションの事業化に向けたフロンティア事業の立ち上げにも取り組んでおります。地域戦略においては、主力市場である日本および北米に加え、中国を第3の柱として事業基盤の強化に取り組んでおります。

(3) 知的財産権に関わるリスク

当社グループは研究開発において種々の知的財産権を保有しておりますが、当社グループの技術を十分な範囲で権利化できない場合、競合他社が当社グループの知的財産権を回避した場合、または当社が厳格に管理しているノウハウなどの営業秘密が予期せぬ事態により外部に流出した場合には、競争上の優位性を確保できない可能性があります。また、当社グループの事業は多くの知的財産権によって保護されていますが、保有する知的財産権が第三者に侵害された場合のほか、知的財産権の有効性や帰属を巡る係争が発生した場合には、競争上の優位性を十分に保持できない可能性があります。これらのリスクが顕在化した場合には、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。他方、当社グループは、事業活動に必要な知的財産権について適法に使用する権限を有していると認識しておりますが、当該認識の範囲外で第三者の知的財産権を侵害する可能性があります。

当社グループでは、主となる物質特許のみならず、用途、製法、製剤などの関連特許を含めたパテントポートフォリオを構築し、製品および開発品の総合的な保護を図っております。また、再生・細胞医薬分野の事業化を推進するため、同分野における当社グループの技術を権利化するにあたっての課題を検討し、権利化のための方策を講じております。

(4) 医療制度改革について

国内においては、急速に進展する少子高齢化等により医療保険財政が悪化する中、先発医薬品の価格抑制や後発医薬品の使用促進などの医療費抑制策が図られ、さらなる医療制度改革の論議が続けられております。また、医療用医薬品の最大市場である米国においても、連邦・州政府および世論を通じたブランド薬の薬価引き下げ圧力が年々高まっており、薬価抑制を企図した制度改革が決定・導入される可能性があります。さらには、中国においても政府による医薬品の集中購買制度の拡大をはじめとした医薬品費用抑制を企図する医療制度変更が推進されています。これら各国の医療制度改革の方向性によっては当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。当社グループは、医薬品会社として各国制度を遵守し、制度に従って適切に対応を行います。

(5) 副作用に関わるリスク

医薬品は開発段階において十分に安全性の試験を実施し、世界各国の所轄官庁の厳しい審査を受けて承認されておりますが、市販後に新たな副作用が見つかることも少なくありません。当社グループが販売する医薬品について市販後に予期せぬ副作用が発生した場合は、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。当社グループでは、国内外で収集された安全性情報をデータベースで一元管理して評価し、医薬品の安全性確保および適正使用のために必要な対策を立案し、タイムリーな安全対策の実施につなげております。このような活動は、「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」や「医薬品、医薬部外品、化粧品、医療機器及び再生医療等製品の製造販売後安全管理の基準に関する省令」を遵守した医薬品安全性監視活動として実践しております。

(6) 品質に関わるリスク

当社グループは、厳格な品質管理のもと製品の製造および委託製造を行っておりますが、重大な品質問題が発生した場合には、製品回収、行政処分、社会的信用の毀損等により、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。当社製品のグローバルな製造及び流通については、医薬品等の製造管理及び品質管理の基準(GMP)や医薬品規制調和国際会議(ICH)ガイドライン等の薬事関連法規に準拠しており、厚生労働省、米国食品医薬品局(FDA)や欧州医薬品庁(EMA)などの所管当局の厳しい査察を受け、許可を得ております。また、これら製造所に対しては当社グループにて定期的な監査を行い、重大な品質問題や法令違反がないことを確認しております。さらにグローバル品の製造所に対しては海外提携企業からの監査も受けており、グローバルレベルの厳しい品質基準もクリアする高い設備設計水準や品質保証体制を整えております。

(7) 主要な事業活動の前提となる事項について

当社グループの主な事業は医療用医薬品事業であり、国内においては、「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」等の薬事に関する法令に基づき、その研究開発および製造販売等を行うにあたり、「第一種医薬品製造販売業」、「第二種医薬品製造販売業」(いずれも有効期間5年)等の許可等を取得しております。また、海外においても医療用医薬品事業を行うにあたっては、当該国の薬事関連法規等の規制を受け、必要に応じて許可等を取得しております。これらの許可等については、各法令で定める手続きを適切に実施しなければ効力を失います。また各法令に違反した場合、許可等の取消し、または期間を定めてその業務の全部もしくは一部の停止等を命ぜられることがある旨が定められております。当社グループは、現時点において、許可等の取消し等の事由となる事実はないものと認識しておりますが、将来、当該許可等の取消し等を命ぜられた場合には、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。

当社グループは、コンプライアンスの推進を全ての事業活動の土台と位置付け、法令および企業倫理の遵守に努めております。当社では、「コンプライアンス行動基準」を制定し、事業活動における具体的な行動の規範としております。また、当社および国内外におけるグループ会社のコンプライアンスに関する事項を統括するコンプライアンス担当執行役員を設置しております。コンプライアンス担当執行役員は、当社のコンプライアンス委員会に加えて、国内グループ会社コンプライアンス委員会および海外グループ会社コンプライアンス委員会の委員長を務めるとともに、各委員会の活動状況を取締役に報告しております。

(8) 訴訟に関わるリスク

当社グループの事業活動に関連して、医薬品の副作用、製造物責任、公正取引等に関連し、訴訟を提起される可能性があります。これらの訴訟およびその他の訴訟には性質上不確実性があり、その動向によっては、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。

(9) 工場の閉鎖または操業停止に関わるリスク

当社グループの工場が、技術上の問題、使用原材料の供給停止、火災、地震、その他の災害、感染症拡大等により閉鎖または操業停止となり、製品の供給が遅滞もしくは休止した場合、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。当社グループの工場では、事業継続計画（BCP）に基づいて緊急時対応手順をマニュアルとして整備し、対応しています。

(10) 非金融資産の減損損失リスク

当社グループは、持続的成長のために、企業買収や開発品の導入等を行っておりますが、これに伴い、のれんや仕掛研究開発等の無形資産を計上しております。開発の中止や当初想定した利益の実現が見込めない等、期待する将来利益の低下により、買収および導入等から見込まれる回収可能価額が、のれんや無形資産の帳簿価額を下回ると想定される場合、減損損失が発生し、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。当社グループは、定期的にこれらののれんや無形資産の減損テストを通じて評価額を把握し、適切に処理しております。

(11) 金融資産に関わるリスク

当社グループは、他社株式等の金融資産を保有しております。これら保有する金融資産の市場価額または公正価値が帳簿価額を下回った場合、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。当社は、企業提携、重要な取引先との取引関係の構築・維持その他事業上の必要性のある場合を除き、新たに他社の株式を保有しないこととしております。また、定期的にこれらの金融資産の減損テストを行い、評価額変動の把握および必要な処理を行っております。

(12) 金融市況および為替変動による影響について

金利動向によっては借入金等の支払利息が増加するほか、金融市況の悪化によっては退職給付制度債務が増加するなど、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。当社グループでは、金利リスクを回避する目的で固定・変動金利を組み合わせた資金調達最適化を図っております。また、為替相場の変動によっては、外貨建て金融資産および連結子会社業績等の円換算において、重要な影響を受ける可能性があります。当社グループでは、為替リスクを回避する目的で為替予約を行っております。

(13) 親会社との取引について

当社と親会社である住友化学株式会社との間で、研究所および工場の土地賃借、これらの事業所等で使用する用役や主に原薬を製造する際に使用する原料の購入契約を締結しております。当該契約等は、一般的な市場価格を参考に双方協議のうえ合理的に価格が決定され、当事者からの申し出がない限り1年ごとに自動更新されるものであります。このほか、親会社から出向者の受入を行っており、また、資金効率向上等の観点から親会社への短期貸付を実施しております。今後も当該取引等を継続していく方針ではありますが、同社との契約・取引内容等に変化が生じた場合には、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。

当社が親会社と行う重要な取引等については、当社の企業価値の向上の観点からその公正性および合理性を確保するために、独立社外取締役が出席する取締役会において承認を得ることとするなど、重要性に応じて適切に監督しております。

(14) 海外事業展開、大規模災害・感染症等に関するリスク

当社グループは、北米、中国を中心にグローバルな事業活動を展開しておりますが、各国の規制・制度変更や外交関係の悪化、政情不安等のリスクが内在しており、このようなリスクに直面した場合、当社グループの事業計画が達成できず、経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。また、大規模災害や感染症の大流行に直面した場合、当社グループの事業計画が達成できず、経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。当社では、事業活動に影響を及ぼすリスクに対応するため「リスクマネジメント規則」を制定し、社長がリスクマネジメントを統括することを明確にするとともに、リスクごとにリスクマネジメントを推進する体制を整備しております。大規模災害発生・感染症の大流行に際しては、直ちに対策本部を設置して全社的な対応体制を構築するとともに、医薬品企業の使命として製品供給を第一に考え、生産・供給体制を整備いたします。

(15) 情報管理に関するリスク

当社グループは、各種情報システムを使用しているため、システムの障害やコンピューターウイルス等により、業務が阻害される可能性があります。また、個人情報を含め多くの機密情報を保有していますが、これらが社外に漏洩した場合には、損害賠償、行政処分、社会的信用の毀損等により、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。当社では記録・情報の取扱いおよびITセキュリティに関する社内ルールを制定し、継続的に社員教育を実施し、適切な運用に努めております。

(16) 環境保全に関するリスク

当社グループは、研究開発および製品製造のために種々の化学物質を使用しており、重大な環境問題が発生した場合には、操業停止、行政処分、社会的信用の毀損等により、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。また、将来の環境関連法規制等の強化、環境負荷低減の追加的な義務等による環境保全に関連する費用が増加した場合、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。さらには、地球規模で気候変動が課題となる中、大型台風や集中豪雨等の水リスクが顕在化することにより国内外事業所および調達先での操業に影響した場合や、炭素税導入などの規制強化によって原材料・用役コストが増加した場合にも、当社グループの経営成績等に重要な影響を及ぼす可能性があります。

当社グループは、種々の環境関連法規制等を遵守して事業活動を行っており、国内工場および蘇州工場（中国）では環境マネジメントシステムに関する国際規格であるISO14001認証を取得しております。また、グリーン製品開発、グリーン設備設計およびグリーン物流ガイドラインを運用し、製品のライフサイクルを通じた環境保全の取組を継続しております。気候変動および水に関するリスクと機会については、気候関連財務情報開示タスクフォース（TCFD；Task Force on Climate-related Financial Disclosures）の提言に沿った情報開示に向けて取り組んでおります。

なお、上記以外にもさまざまなリスクがあり、ここに記載されたものが当社グループのすべてのリスクではありません。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」）の状況の概要並びに経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

また、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末において当社グループが判断したものであります。

(1) 重要な会計方針および見積り

当社グループの連結財務諸表は、IFRSに準拠して作成しております。

連結財務諸表で採用する重要な会計方針は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 連結財務諸表注記 3 . 重要な会計方針」に記載しております。

連結財務諸表の作成にあたっては、過去の実績や状況に応じ合理的だと考えられる様々な要因に基づき、見積り及び判断を行っておりますが、実際の結果は、見積り特有の不確実性があるために、これらの見積りと異なる場合があります。

当社グループの財政状態又は経営成績等に重要な影響を及ぼす会計上の見積りおよび判断は、以下のとおりであります。

・のれん及び無形資産

のれん及び無形資産の減損テストにおける使用価値は、将来キャッシュ・フローの見積額を資金生成単位ごとに設定した加重平均資本コスト等を割引率として用い、現在価値に割り引いて算定しております。将来キャッシュ・フローの見積りには、対象となる無形資産に関する開発品の上市時期、研究開発活動の成功確率、製品及び開発品の収益予測等の計画等、多くの前提条件が含まれておりますが、これらの前提条件や割引率は、将来発生する事象によっては影響を受ける可能性があります。

・その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産

公正価値の事後的な変動をその他の包括利益に表示する金融商品のうち、非上場株式の一部については、その公正価値を割引キャッシュ・フロー法により算定しております。割引キャッシュ・フロー法に用いる将来キャッシュ・フローの見積りには、非上場会社における開発品の上市時期、研究開発活動の成功確率、収益予測等の計画等、多くの前提条件が含まれておりますが、これらの前提条件や割引率は、将来発生する事象によっては影響を受ける可能性があります。

・引当金

引当金は、期末日における将来の債務の決済時期及び決済に必要と予想されるキャッシュ・フロー等に関する最善の見積りに基づいて算定しております。特に、米国で販売している製品に適用される売上割引引当金の見積りに用いられる将来の販売数量や割引率等は、将来発生する事象によっては影響を受ける可能性があります。

・条件付対価の公正価値

企業結合により生じた条件付対価は、特定の開発品の開発進捗や販売後の売上収益に応じて支払う対価等であり、その公正価値は、それらが達成される可能性や時間的価値を考慮して算定しております。特定の開発品の開発進捗や将来の売上収益の予測等及び割引率等は、将来発生する事象によっては影響を受ける可能性があります。

・新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による影響

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行に伴い、日本を含む各国・地域において情報提供活動の制限や臨床試験の遅延など、当社グループの事業活動に様々な影響が生じております。

当社グループは、製品の安定供給に努めるとともに、患者さん、関係者および従業員の安全を最優先に事業活動を進めてまいりますが、今後もこの状況が続けば、事業活動がさらなる影響を受ける可能性があり、その場合は、連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

(2) 経営成績

当連結会計年度の世界経済は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行により経済活動が大きく抑制されたことを受け、景気は大幅に落ち込み、全体として厳しい状況で推移しました。わが国経済についても、新型コロナウイルス感染症の影響により個人消費や輸出が大きく減少するなど、厳しい状況で推移し、依然として先行きは不透明な状況が続いています。

医薬品業界においては、日本において薬価中間年改定の対象範囲が拡大されるなど先発医薬品の価格抑制や後発医薬品の使用促進が一段と進むなか、研究開発費は益々高騰し、競争は激化しています。一方で、デジタル創薬の取組強化や予防・未病領域の事業強化などが進展しています。

このような状況のもと、当社グループは、2018年度を起点とする5か年の「中期経営計画2022」に基づき、事業活動を進めてまいりました。当連結会計年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、当社グループが事業を展開する各国・地域において、情報提供活動の制限や臨床試験の遅延が生じるなど、事業活動に様々な影響が生じました。これに対して、当社グループは、原材料の確保から製品の製造および販売に至る各段階の活動が停滞しないよう細心の注意を払い、医薬品を患者さんのもとに確実に届けてまいりました。また、オンライン面談やデジタルツールを活用した情報提供活動等を行うなど、医療関係者、取引先、従業員等の安全を最優先に事業活動を進めてまいりました。

日本においては、「トルリシティ」、「エクア」および「エクメット」、パーキンソン病治療剤「トレリーフ」などの主力製品の売上拡大に努めるとともに、当連結会計年度に販売を開始した「ラツダ」などの新製品の早期の市場浸透を図るべく、情報提供活動に注力しました。

北米においては、サノビオン社が、グローバル戦略品である「ラツダ」の一層の売上拡大に取り組むとともに、他の主力製品や新製品の売上拡大に向けた事業活動を行いました。

スミトバント社においては、その子会社であるマイオバント社が、レルゴリクスについて、2020年12月に、ファイザー社との間で、がん領域および婦人科領域における北米での共同開発および共同販売に関する契約を締結しました。マイオバント社は、2021年1月に、「オルゴビクス」を米国において発売し、上記契約に基づきファイザー社とのコ・プロモーションを開始しました。

同じくスミトバント社の子会社であるユーロバント社が、2020年12月に「ジェムテサ」の米国での承認を取得しました。また、スミトバント社は、2021年3月にユーロバント社を完全子会社としました。

中国においては、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、「メロベン」の医療機関での使用機会が減少するなど、厳しい環境のなか、住友製薬（蘇州）有限公司が、「ラツダ」等の売上拡大に向けた販売活動に取り組みました。

（業績管理指標として「コア営業利益」を採用）

当社グループでは、IFRSの適用にあたり、会社の経常的な収益性を示す利益指標として、「コア営業利益」を設定し、これを当社独自の業績管理指標として採用しています。

「コア営業利益」は、営業利益から当社グループが定める非経常的な要因による損益（以下「非経常項目」）を除外したものとなります。非経常項目として除かれる主なものは、減損損失、事業構造改善費用、企業買収に係る条件付対価公正価値の変動額などです。

当連結会計年度の当社グループの連結業績は、以下のとおりです。

（単位：億円）

	前連結会計年度 (2020年3月期)	当連結会計年度 (2021年3月期)	増減	増減率 (%)
売上収益	4,827	5,160	332	6.9
コア営業利益	720	696	24	3.3
営業利益	832	712	120	14.4
税引前当期利益	839	779	61	7.3
当期利益	359	368	9	2.5
親会社の所有者に 帰属する当期利益	408	562	155	38.0

売上収益は、5,160億円（前連結会計年度比6.9%増）となりました。

日本セグメントにおいて「エクア」および「エクメット」の販売が通年で寄与したこと、また、北米セグメントにおいて「ラツーダ」などの売上が拡大したことやレルゴリクス関連の収益認識により、増収となりました。

コア営業利益は、696億円（前連結会計年度比3.3%減）となりました。

増収により売上総利益は増加しましたが、スミトバント社およびその子会社の費用が通期での負担となり、コアベースの販売費及び一般管理費ならびに研究開発費が大きく増加したため、コア営業利益は減益となりました。

営業利益は、712億円（前連結会計年度比14.4%減）となりました。

当連結会計年度は、がん領域におけるナパブカシンの開発中止や事業計画の見直しに伴い、条件付対価公正価値の減少による費用の戻入とそれを上回る無形資産の減損損失を計上しましたが、旧茨木工場の資産売却による固定資産売却益があり、営業利益はコア営業利益に比べ増加しました。前連結会計年度は、条件付対価公正価値の減少による費用の戻入が無形資産の減損損失を上回っていたこともあり、当連結会計年度の営業利益は前連結会計年度と比べ減益となりました。

税引前当期利益は、779億円（前連結会計年度比7.3%減）となりました。

当連結会計年度末の円安による為替差益の計上により、金融収益が金融費用を上回ったことから、税引前当期利益は営業利益に比べ増加しました。

当期利益は、368億円（前連結会計年度比2.5%増）となりました。

前連結会計年度は米国における繰延税金資産の取崩しがありましたが、当連結会計年度にはそのような要因がないことから法人所得税が減少し、当期利益は増益となりました。

親会社の所有者に帰属する当期利益は、562億円（前連結会計年度比38.0%増）となりました。

スミトバント社傘下の子会社の損失を通期にわたって計上したことにより、当期利益から非支配持分に帰属する損失を控除した親会社の所有者に帰属する当期利益は、大幅な増益となりました。

なお、親会社の所有者に帰属する当期利益の売上収益に対する比率は10.9%となりました。

（セグメント業績指標として「コアセグメント利益」を採用）

セグメント別の業績では、各セグメントの経常的な収益性を示す利益指標として、「コアセグメント利益」を設定し、当社独自のセグメント業績指標として採用しています。

「コアセグメント利益」は、「コア営業利益」から、グローバルに管理しているため各セグメントに配分できない研究開発費、事業譲渡損益などを除外したセグメント別の利益となります。

セグメント別の経営成績は次のとおりです。

<日本>

売上収益は、1,525億円（前連結会計年度比9.2%増）となりました。

「エクア」および「エクメット」の売上高が通年で計上されたことに加え、「トルリシティ」の伸長や新製品「ラツェダ」の販売による増収が、長期収載品などの販売減少や薬価改定の影響を上回り、増収となりました。

コアセグメント利益は、243億円（前連結会計年度比6.1%増）となりました。

増収による売上総利益の増加に加え、新型コロナウイルス感染症の影響により、販売関連費用などの販売費及び一般管理費が減少したことから、増益となりました。

<北米>

売上収益は、2,815億円（前連結会計年度比7.3%増）となりました。

「ラツェダ」や、抗てんかん剤「アプティオム」が引き続き売上を伸ばしたことに加え、レルゴリクスとの共同開発および共同販売に関する契約などに伴う収入の一部を売上収益に計上したことから、増収となりました。

コアセグメント利益は、1,169億円（前連結会計年度比0.5%減）となりました。

増収により売上総利益は増加しましたが、スミトバント社およびその子会社の費用が通期での負担となるなど、販売費及び一般管理費が増加したため、減益となりました。

<中国>

売上収益は、278億円（前連結会計年度比2.7%減）となりました。

「メロペン」の売上減少の影響が大きく、減収となりました。

コアセグメント利益は、132億円（前連結会計年度比8.1%減）となりました。

減収による売上総利益の減少などにより、減益となりました。

<海外その他>

売上収益は、172億円（前連結会計年度比16.5%増）となりました。

東南アジアにおける「メロペン」の販売が減少しましたが、その他の輸出が増加し、増収となりました。

コアセグメント利益は、87億円（前連結会計年度比35.9%増）となりました。

増収により売上総利益が増加したことなどから、増益となりました。

上記報告セグメントのほか、当社グループは、食品素材・食品添加物および化学製品材料、動物用医薬品などの販売を行っており、これらの売上収益は369億円（前連結会計年度比1.3%減）、コアセグメント利益は36億円（前連結会計年度比11.6%増）となりました。

(3) 生産、受注及び販売の実績

生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額（百万円）	前期比（％）
日本	92,651	6.8
北米	236,170	37.1
中国	33,482	20.4
海外その他	10,536	24.0
その他	12	75.5
合計	372,851	25.2

- (注) 1 金額は販売価格により換算したものであります。
 2 セグメント間取引については相殺消去しております。
 3 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。
 4 当連結会計年度において、北米セグメントにおける生産実績が著しく減少しました。これは、「ラツェグ」等の在庫調整によるものであります。

仕入実績

当連結会計年度における仕入実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額（百万円）	前期比（％）
日本	59,437	36.0
北米	7,813	226.4
中国	-	-
海外その他	-	-
その他	28,976	0.8
合計	96,226	27.8

- (注) 1 金額は仕入価格によっております。
 2 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。
 3 当連結会計年度において、日本セグメントにおける仕入実績が著しく増加しました。これは、「トルリシディ」や、「エクア」および「エクメット」の売上高の増加等によるものであります。

受注状況

当社グループの生産は見込生産で、受注生産は行っておりません。

販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額（百万円）	前期比（％）
日本	152,497	9.2
北米	281,493	7.3
中国	27,831	2.7
海外その他	17,233	16.5
その他	36,898	1.3
合計	515,952	6.9

- (注) 1 セグメント間取引については相殺消去しております。
 2 主な相手先別の販売実績および総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額（百万円）	割合（％）	金額（百万円）	割合（％）
マッケソン社（米国）	87,812	18.2	95,732	18.6
カーディナル社（米国）	75,502	15.6	82,143	15.9
アメリカソースバーゲン社（米国）	65,110	13.5	71,767	13.9

- 3 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(4) 財政状態

資産については、非流動資産では、無形資産が償却や減損により減少したことなどから、前連結会計年度末に比べ441

億円減少しました。

流動資産は、棚卸資産や現金及び現金同等物などの増加により、前連結会計年度末に比べ957億円増加しました。

これらの結果、資産合計は前連結会計年度末に比べ516億円増加し、1兆3,081億円となりました。

負債については、連結子会社における開発および販売提携契約の締結により、その他の非流動負債に含まれる前受収益が増加したことに加え、引当金などが増加しました。また、長期借入の実施や劣後特約付社債の発行による資金調達を行い、短期借入金の返済を行った結果、非流動負債の社債及び借入金が増加し、流動負債の借入金が増加しました。

これらの結果、負債合計は前連結会計年度末に比べ393億円増加し、6,599億円となりました。

資本については、親会社の所有者に帰属する持分は、利益剰余金の増加等により、前連結会計年度末に比べ479億円増加し、5,806億円となりました。非支配持分は、スミトバント社傘下の子会社の業績が損失となったことに加え、当連結会計年度においてユーロバント社を完全子会社化したことにより、前連結会計年度末に比べ356億円減少しました。

これらの結果、資本合計は前連結会計年度末に比べ123億円増加し、6,482億円となりました。

なお、当連結会計年度末の親会社所有者帰属持分比率は44.4%となりました。

(5) キャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フローは、法人所得税の支払額が増加しましたが、引当金の増加などのキャッシュの増加要因や連結子会社における開発および販売提携契約の締結による契約一時金の受領などにより、前連結会計年度に比べ895億円収入が増加し、1,356億円の収入となりました。

投資活動によるキャッシュ・フローは、当社旧茨木工場の譲渡により有形固定資産の売却による収入が増加しました。前連結会計年度には、ロイバント社株式の取得など、投資の取得による支出や、スミトバント社およびその傘下の子会社の支配獲得による支出があったため、前連結会計年度に比べ3,216億円支出が減少し、89億円の収入となりました。

財務活動によるキャッシュ・フローは、前連結会計年度には、ロイバント社との戦略的提携の対価の支払いのため短期借入による資金調達を実施しました。一方、当連結会計年度には、長期借入の実施や劣後特約付社債の発行による資金調達を行い、短期借入金の返済を実施したことや、ユーロバント社の完全子会社化により、非支配持分からの子会社持分取得による支出が増加したことなどから、前連結会計年度に比べ2,883億円収入が減少し、572億円の支出となりました。

上記の結果、当連結会計年度末における現金及び現金同等物は1,937億円となり、前連結会計年度末に比べ920億円増加しました。

当社グループの資本の財源および資金の流動性は、以下のとおりです。

当社グループは、営業活動によるキャッシュ・フローのほか、銀行借入などにより、必要資金を調達し、買収で取得した開発品への先行投資などを行っております。

当社グループの財務活動の方針は、自己資金に加えて、必要に応じて借入によるレバレッジの活用などにより必要資金を確保することにあります。

当連結会計年度においては、財務の健全性維持を考慮した劣後特約付社債の発行による1,200億円の資金調達を行うとともに、金融機関から1,250億円の長期借入を実施し、前連結会計年度にロイバント社との戦略的提携に係る資金として調達した短期借入金（ブリッジローン）2,700億円の借換えを実施しました。

当社グループでは、現金及び現金同等物に短期貸付金を加えた金額を運用資金と定義しております。当連結会計年度末の運用資金は2,214億円であり、流動比率（流動資産/流動負債）は165.3%であります。

4 【経営上の重要な契約等】

(1) 技術導入

契約会社名	相手先	国名	技術の内容	対価の支払	契約期間
大日本住友製薬(株)(当社)	セルヴィエ社	フランス	グリクラジドに関する技術	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	1974.3～1999.5 以後1年間ずつ自動更新
大日本住友製薬(株)(当社)	アルミラル社	スペイン	エバスチンに関する技術	一定料率のロイヤルティ	1988.1～2012.12 以後5年間ずつ自動更新
大日本住友製薬(株)(当社)	テバ社	イスラエル	エチドロン酸 ニナト リウムに関する技術	一定料率のロイヤルティ	1989.1～2000.12 以後自動更新
大日本住友製薬(株)(当社)	ギリアド社	アメリカ	アムホテリシンBに関する技術	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	1996.9～ 発売から10年間又は特許満了日の長い方 以後1年間ずつ自動延長
大日本住友製薬(株)(当社)	武田ファーマシューティカルズ・アメリカ社 (注)1	アメリカ	アガルシダーゼアルファに関する技術	契約一時金	1998.7～ 発売から15年間、6カ月前までの協議により延長可能
大日本住友製薬(株)(当社)	メルク・サンテ社	フランス	グルコファージに関する技術	契約一時金	2003.3～ 当社が当該製品の販売を継続する限り有効
大日本住友製薬(株)(当社)	ノボ ノルディスク社	デンマーク	レバグリニドに関する技術	契約一時金	2004.3～ 発売から25年間又は当社が商標の使用を中止するまでの短い方。ただし契約満了後も当社は販売継続できる
大日本住友製薬(株)(当社)	プリストル・マイヤーズ スクイブ(株)	日本	イルベサルタンに関する技術	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	2006.7～ 発売から15年間又は特許満了日の長い方
大日本住友製薬(株)(当社)	ニューロクライン社	アメリカ	インディプロンに関する技術	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	2007.10～ 発売から15年間又は特許満了日の長い方
大日本住友製薬(株)(当社)	ピーティーシーセラピューティクス社	アメリカ	EPI-589に関する技術 (注)2	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	2013.3～ 発売から10年間又は独占期間のどちらか長い方 協議により延長可能
大日本住友製薬(株)(当社)	ボクセル社	フランス	イメグリミンに関する技術	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	2017.10～ 国毎に、発売から10年間又は特許満了日の長い方
サノピオン社	ビアル・ポルテラ・アンド・シーエー社	ポルトガル	エスリカルバゼピンに関する技術	契約一時金	2007.12～ 国毎に、発売から10年間、特許満了日、データ独占期間のうちいずれか長い方
サノピオン・シーエヌエス・ディベロップメント・カナダ社	アクエスティブ社	アメリカ	APL-130277に関する製剤技術	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	2016.4～2024.12 以後契約会社が終結を通知するまで
スミトモダイニッポンファーマ・オンコロジー社	サノフィ社	フランス	アルボシジブに関する技術	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	2013.4～ ロイヤルティ支払期間満了まで
マイオバント社	武田薬品工業(株)	日本	レルゴリクス及びMVT-602に関する技術	マイオバント社 株式 一定料率のロイヤルティ	2016.4～ ロイヤルティ支払期間満了まで
ユーロバント社	メルク社	アメリカ	ビベグロンに関する技術	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	2017.3～ 特許満了日まで

(注)1 当連結会計年度において、シャイアー社より武田ファーマシューティカルズ・アメリカ社に業務移管されております。

2 当連結会計年度において、EPI-743に関する権利を返還しました。

(2) 技術導出

契約会社名	相手先	国名	技術の内容	対価の受取	契約期間
大日本住友製薬(株)(当社)	エーザイ(株)	日本	ゾニサミドに関する技術	契約一時金	1997.10~2024.12 以後2年間ずつ自動更新
大日本住友製薬(株)(当社)	アンジェリーニ社	イタリア	ルラシドンに関する技術	中間製品の供給	2017.11~ 発売から16年間 以後2年間ずつ自動更新
サノピオン・ヨーロッパ社					
サノピオン社	エーザイ(株)	日本	エスゾピクロンに関する技術	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	2007.7~ 販売承認から15年間又は薬価 収載後15年間の長い方
マイオバント社	ゲデオンリヒター社	ハンガリー	レルゴリクスに関する技術	契約一時金 一定料率のロイヤルティ	2020.3~ 相手方と合意した期間の満了まで

(3) 販売契約等

契約会社名	相手先	国名	契約内容	契約期間
大日本住友製薬(株)(当社)	ヤンセンファーマ(株)	日本	ハロマンズに関する販売提携	2002.7~ 当社が終結を通知するまで
大日本住友製薬(株)(当社)	マイランEPD(同)	日本	リズムックに関する販売提携	2002.12~2012.11 以後1年間ずつ自動更新
大日本住友製薬(株)(当社)	塩野義製薬(株)	日本	アイミクス配合剤に関する並行販売	2012.6~ 発売から10年間 以後1年間ずつ自動更新
大日本住友製薬(株)(当社)	鳥居薬品(株)	日本	レミッチに関するプロモーション提携	2015.3~ 特許満了日まで
大日本住友製薬(株)(当社)	日本イーライリリー(株)	日本	トルリシティに関する販売提携	2015.7~ 相手方と合意した期間の満了まで
	イーライリリー社	アメリカ		
大日本住友製薬(株)(当社)	ヴィアトリス製薬(株) (注1)	日本	イフェクサーに関するプロモーション提携	2018.3~ 相手方と合意した期間の満了まで
大日本住友製薬(株)(当社)	ノバルティスファーマ(株)	日本	エクア、エクメットに関するプロモーション及び販売提携	2019.5~ 相手方と合意した期間の満了まで
マイオバント社	ファイザー社	アメリカ	がん領域および婦人科領域におけるアメリカおよびカナダでのレルゴリクスの共同開発および共同販売(注2)	2020.12~ 開発および販売の双方が終了するまで

(注) 1 当連結会計年度において、ファイザー(株)アップジョン事業部門は同社より分離・独立し、ヴィアトリス製薬(株)に社名変更しております。

2 当該契約には、がん領域におけるアメリカ、カナダと一部のアジアを除く地域でのレルゴリクスの販売に関する独占的なオプション権の許諾が含まれております。

以下の契約については、契約終了の合意もしくは契約期間満了に伴い、当連結会計年度において終了しました。

技術導出

契約会社名	相手先	国名	技術の内容	対価の受取	契約期間
大日本住友製薬(株)(当社)	セルジーン社	アメリカ	塩酸アムルピシンに関する技術	契約一時金	2005.6～ 発売から10年間又はジェネリック品が市場シェアの20%を超えた四半期の第一日目の長い方

販売契約等

契約会社名	相手先	国名	契約内容	契約期間
DSファーマア ニマルヘルス(株)	日本ヒルズ・コ ルゲート(株)	日本	プリスクリプション・ダイエットに関する 販売提携	2018.1～2020.12

(4) 公募ハイブリッド社債(公募劣後特約付社債)の発行

当社は、2019年10月にロイバント社と戦略的提携に関する契約を締結し、2019年12月に2,700億円の資金の借入を行ったうえで、本戦略的提携の対価として総額約30億米ドル(約3,300億円)を支払いました。

今般、本戦略的提携のために調達した借入金の返済資金の一部に充当することを目的として、2020年9月10日に総額1,200億円の公募形式によるハイブリッド社債(劣後特約付社債)を発行しました。

詳細は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 連結財務諸表注記 22. 社債及び借入金」に記載しております。

5 【研究開発活動】

当社グループは、精神神経領域、がん領域および再生・細胞医薬分野を研究重点領域として、自社研究に加え、技術導入、ベンチャー企業やアカデミアとの共同研究など、あらゆる方法で最先端の技術を取り入れて、研究開発活動に取り組んでおり、優れた医薬品の継続的な創製を目指しています。また、感染症領域にも取り組み、グローバルヘルスへの貢献を目指しています。さらに、医薬品以外のヘルスケア領域において、社会課題の解決のための新たなソリューションを提供することを目的として、フロンティア事業の立ち上げを目指しています。

当連結会計年度における主な開発の進捗状況は、次のとおりです。

(1) 精神神経領域

「キンモビ」（一般名：アボモルヒネ塩酸塩水和物）

米国において、成人のパーキンソン病に伴うオフ症状の改善を適応症とした承認を2020年5月に取得し、同年9月に発売しました。

「ロナセン」（一般名：プロナンセリン）

日本において、統合失調症における小児の用法・用量を追加する一部変更承認を2021年3月に取得し、本剤は日本で初めての統合失調症の小児適応を持つ非定型抗精神病薬となりました。

SEP-363856

日本および中国において、統合失調症を対象とした国際共同フェーズ2 / 3試験を開始しました。

(2) がん領域

「オルゴピクス」（一般名：レルゴリクス）

米国において、成人の進行性前立腺がんを適応症とした承認を2020年12月に取得しました。また、欧州において、2021年3月に進行性前立腺がんを対象とした承認申請を行いました。

ナパブカシン（開発コード：BBI608）

米国、日本等において、結腸直腸がんを対象とした国際共同フェーズ3試験を実施していましたが、同試験の解析結果において主要評価項目を達成しませんでした。この結果を受けて、実施中の臨床試験を順次中止しました。

alvocidib（開発コード：DSP-2033）

米国において、急性骨髄性白血病（AML）を対象としたフェーズ2試験等を実施していましたが、競合状況およびこれまでに得られた知見を踏まえ、これらの試験を中止することにしました。

(3) 再生・細胞医薬分野

RVT-802

デューク大学と連携して開発中のRVT-802について、米国において、小児先天性無胸腺症を対象とした再申請の準備を行いました。

他家iPS細胞由来ドパミン神経前駆細胞

京都大学において実施されているパーキンソン病を対象とした医師主導治験の4例目から、当社が製造したドパミン神経前駆細胞が移植されています。

他家iPS細胞由来網膜シート

神戸市立神戸アイセンター病院において網膜色素変性に対する臨床研究が開始され、予定されていた全2例に対して、当社が製造した網膜シートが移植されました。

(4) 感染症領域

薬剤耐性菌感染症治療薬

北里研究所との共同研究を推進しました。なお、本共同研究は、日本医療研究開発機構（AMED）の医療研究開発革新基盤創成事業（CiCLE）に係る研究開発課題として採択されており、AMEDからの委託研究開発費を活用しています。

マラリアワクチン

愛媛大学とのマラリア発病阻止ワクチンの共同研究ならびに愛媛大学および米国PATHとのマラリア伝搬阻止ワクチンおよびマラリア感染阻止ワクチンの共同研究を推進しました。なお、これら3つのプロジェクトについては、それぞれグローバルヘルス技術振興基金（GHIT Fund）の助成案件に選定されています。

ユニバーサルインフルエンザワクチン

医薬基盤・健康・栄養研究所との共同研究を推進しました。

(5) その他の領域

「ジェムテサ」（一般名：ピベグロン）

米国において、成人の切迫性尿失禁、尿意切迫感および頻尿の症状を伴う過活動膀胱（OAB）を適応症とした承認を2020年12月に取得しました。

レルゴリクス配合剤

米国において、2020年5月に子宮筋腫を対象とした承認申請を行いました。また、子宮内膜症を対象とした2本のフェーズ3試験において良好な解析結果を得ました。

イメグリミン塩酸塩（開発コード：PXL008）

日本において、2020年7月に2型糖尿病を対象とした承認申請を行いました。

(6) フロンティア事業

2020年6月に、サノビオン社とBehaVR, Inc.（ビヘイビア社）との間で、社交不安障害を緩和するVR機器のコンテンツに関する共同研究開発契約を締結しました。

2020年7月に、損害保険ジャパン株式会社および株式会社Aikomiとの間で、認知症・介護関連のデジタル機器の研究開発および事業化に向けた連携を開始しました。

2020年8月に、株式会社Save Medicalとの間で、2型糖尿病管理指導用モバイルアプリケーション（開発コード：SMC-01）の共同開発契約を締結し、日本において、フェーズ3試験を開始しました。

2020年10月に、ドロブリッジ・ヘルス・インクとの間で、生活習慣病を対象とした自動採血・保存機器に関する共同研究開発契約を締結しました。

このような研究開発活動の結果、当連結会計年度の研究開発費の総額は1,327億円（前連結会計年度比15.3%増）となりました。なお、当該金額は当連結会計年度に計上した減損損失356億円を含んでいることから、これを除いたコアベースの研究開発費は971億円（前連結会計年度比4.8%増）となりました。また、当社グループは、研究開発費をグローバルに管理しているため、セグメントに配分していません。

当社グループにおける開発状況は以下のとおりであります。

1. 精神神経領域

(2021年5月12日現在)

製品/コード名 (一般名)	予定適応症	地域	開発段階
SEP-363856	統合失調症	米国	フェーズ3
		日本・中国	フェーズ2/3 (国際共同試験)
	パーキンソン病に伴う精神病症状	米国	フェーズ2
ラソーダ (ルラシドン塩酸塩)	(新効能) 双極 型障害うつ	中国	フェーズ3
	(新用法: 小児) 統合失調症	日本	フェーズ3
EPI-589	パーキンソン病	米国	フェーズ2
	筋萎縮性側索硬化症 (ALS)	米国	フェーズ2
		日本	フェーズ1
SEP-4199	双極 型障害うつ	米国・日本	フェーズ2 (国際共同試験)
DSP-6745	パーキンソン病に伴う精神病症状	米国	フェーズ1
SEP-378608	双極性障害	米国	フェーズ1
DSP-3905	神経障害性疼痛	米国	フェーズ1
SEP-378614	治療抵抗性うつ	米国	フェーズ1
SEP-380135	アルツハイマー病に伴うアジテーション	米国	フェーズ1
DSP-1181	強迫性障害	日本	フェーズ1
DSP-0038	アルツハイマー病に伴う精神病症状	米国	フェーズ1

2. がん領域

(2021年5月12日現在)

製品/コード名 (一般名)	予定適応症	地域	開発段階
レルゴリクス	前立腺がん	欧州	申請 (2021/3)
DSP-7888 (アデグラモチド酢酸塩/ ネラチモチドトリフルオロ 酢酸塩)	膠芽腫	米国	フェーズ3 (国際共同試験)
		日本	フェーズ2 (注) (国際共同試験)
	固形がん	米国	フェーズ1/2
TP-0903 (dubermatinib)	急性骨髄性白血病 (AML)	米国	フェーズ1/2 (外部研究機関主導 治験)
DSP-0509	固形がん	米国	フェーズ1/2
TP-0184	骨髄異形成症候群に伴う貧血	米国	フェーズ1/2
TP-1287	固形がん	米国	フェーズ1
TP-3654	骨髄線維症	米国	フェーズ1
TP-1454	固形がん	米国	フェーズ1
DSP-0390	固形がん	米国	フェーズ1

(注) DSP-7888は、2021年5月に、日本において膠芽腫を対象とした国際共同フェーズ3試験を開始しました。

3. 再生・細胞医薬分野

(2021年5月12日現在)

製品/コード名 (一般名)	予定適応症	地域	開発段階
RVT-802	小児先天性無胸腺症	米国	申請(2019/4)、 審査結果通知(CRL) 受領(2019/12)、 再申請(2021/4)
他家iPS細胞由来ドパミン神経前 駆細胞	パーキンソン病	日本	フェーズ1/2 (医師主導試験)
HLCR011 (他家iPS細胞由来網膜色素 上皮)	加齢黄斑変性	日本	治験開始に向けて準備 中

4. その他の領域

(2021年5月12日現在)

製品/コード名 (一般名)	予定適応症	地域	開発段階
レルゴリクス	子宮筋腫(注)1	欧州	申請(2020/3)
		米国	申請(2020/5)
	子宮内膜症	米国	フェーズ3 (国際共同試験)
PXL008 (イメグリミン塩酸塩)	2型糖尿病(注)2	日本	申請(2020/7)
ジェムテサ(ビベグロン)	(新効能)前立腺肥大症を伴う過活動 膀胱	米国	フェーズ3
rodatristat ethyl	肺動脈性肺高血圧症(PAH)	米国	フェーズ2
MVT-602	不妊症	ドイツ	フェーズ2
URO-902	過活動膀胱	米国	フェーズ2

(注)1 レルゴリクスの子宮筋腫の適応症について、米国では2021年5月に承認を取得しました(製品名「マイフェンブリー」)。また、欧州では2021年5月に欧州医薬品庁(EMA)の欧州医薬品評価委員会(CHMP)から承認勧告を受領しました(製品名「ライエクオ」)。

2 PXL008(イメグリミン塩酸塩)については、日本で2021年6月に承認を取得しました(製品名「ツイミーグ」)。

5. フロンティア事業

(2021年5月12日現在)

製品/コード名 (一般名)	予定適応症	地域	開発段階
SMC-01 (2型糖尿病管理指導用モバイル アプリケーション)	2型糖尿病	日本	フェーズ3 (株)Save Medicalと の共同開発)

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社グループは、医薬品事業を中心に生産、研究開発および営業活動において積極的な投資を進めております。

当連結会計年度のソフトウェアを含む設備投資の総額は127億円であり、その主なものは、当社鈴鹿工場における生産設備増強のための投資等です。

なお、当連結会計年度において生産能力に重大な影響を与えるような固定資産の除却、売却などはありません。

また、当社グループでは資産をセグメントに配分していないため、セグメント別の記載を省略しております。

2 【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、以下のとおりであります。

(1) 提出会社

2021年3月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の 内容	帳簿価額(百万円)					従業 員数 (人)
		建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積千㎡)	その他	合計	
鈴鹿工場 (三重県鈴鹿市)	生産設備	5,581	4,224	121 (199)	544	10,470	347
大分工場 (大分県大分市)	生産設備	1,345	1,001	()	223	2,569	160
総合研究所 (大阪府吹田市)	研究設備およ び生産設備	8,196	1,613	415 (49)	814	11,038	206
大阪研究所 (大阪市此花区)	研究設備	6,983	33	()	1,233	8,249	375
大阪本社 (大阪市中央区)	管理販売設備	1,424	8	2,099 (2)	344	3,875	273
東京本社 (東京都中央区)	管理販売設備	462	1	()	1,569	2,032	554
全国15支店 (大阪市中央区他)	販売設備	231		()	1,967	2,198	1,085
神戸物流センター他 1 物流施設 (神戸市須磨区他)	物流設備	474	500	1,433 (10)	1,977	4,384	1

(2) 国内子会社

該当事項はありません。

(3) 在外子会社

2021年3月31日現在

会社名	所在地	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数(人)
			建物及び構築物	機械装置及び運搬具	土地(面積千㎡)	その他	合計	
サノピオン社	米国マサチューセッツ州	管理販売設備	3,488	618	417 (234)	1,767	6,290	1,065
住友制薬(蘇州)有限公司	中国江蘇省蘇州市	生産設備および管理販売設備	646	217	()	317	1,180	754
スミトモダイニツポンファーマオンコロジー社	米国マサチューセッツ州	管理販売設備	771	6	()	3,386	4,163	162
マイオバント・サイエンシズ・インク	米国カリフォルニア州	管理販売設備	32		()	1,585	1,617	405

(注) 1 帳簿価額のうち「その他」には、使用権資産を含んでおります。また建設仮勘定は含まれておりません。

2 上記金額には消費税等は含まれておりません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 当社グループにおける重要な設備の新設の計画は、以下のとおりであります。

新設

会社名 事業所名	所在地	設備の内容	投資予定金額		資金調達 方法	着手および完了予定	
			総額 (百万円)	既支払額 (百万円)		着手	完了
当社 鈴鹿工場	三重県鈴鹿市	生産設備	2,040	923	自己資金	2019年5月	2022年度中
当社 総合研究所	大阪府吹田市	再生・細胞医薬 製造施設	1,100		自己資金	2020年10月	2021年度中
当社 東京本社	東京都中央区	管理販売設備	1,600		自己資金	2021年6月	2022年8月

(注) 上記金額には消費税等は含まれておりません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	1,500,000,000
計	1,500,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2021年3月31日)	提出日現在発行数(株) (2021年6月24日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	397,900,154	397,900,154	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数は100株 であります。
計	397,900,154	397,900,154		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2005年4月1日 から 2006年3月31日	229,716	397,900	8,955	22,400		15,860

(注) 2005年10月1日の住友製薬株式会社との合併(合併比率1:1,290)によるものであります。

なお、これによる資本準備金の増減はありません。

(5) 【所有者別状況】

2021年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)		49	34	272	568	37	21,485	22,445	
所有株式数(単元)		951,658	29,891	2,310,424	456,461	139	228,870	3,977,443	155,854
所有株式数の割合(%)		23.93	0.75	58.09	11.48	0.00	5.75	100	

- (注) 1 自己株式607,255株は「個人その他」に6,072単元および「単元未満株式の状況」に55株含まれております。なお、自己株式607,255株は、株主名簿記載上の株式数であり、2021年3月31日現在の実保有残高606,255株であります。
- 2 「その他の法人」および「単元未満株式の状況」の欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が、それぞれ2単元および50株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2021年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
住友化学株式会社	東京都中央区新川二丁目27番1号	205,634	51.76
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	31,715	7.98
稲畑産業株式会社	大阪市中央区南船場一丁目15番14号	16,782	4.22
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番12号	12,828	3.23
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内一丁目6番6号	7,581	1.91
株式会社SMBC信託銀行(株式会社三井住友銀行退職給付信託口)	東京都港区西新橋一丁目3番1号	7,000	1.76
住友生命保険相互会社	東京都中央区築地七丁目18番24号	5,776	1.45
株式会社日本カストディ銀行(信託口7)	東京都中央区晴海一丁目8番12号	4,145	1.04
大日本住友製薬株式会社従業員持株会	大阪市中央区道修町二丁目6番8号	2,934	0.74
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	東京都渋谷区恵比寿一丁目28番1号	2,661	0.67
計		297,059	74.76

- (注) 株式会社SMBC信託銀行(株式会社三井住友銀行退職給付信託口)7,000千株は、株式会社三井住友銀行が保有していた当社株式を退職給付信託に拠出したものであり、当該拠出後における同行の当社株式保有数は、1,125千株(持株比率0.28%)であります。

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2021年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 606,200		
完全議決権株式(その他)	普通株式 397,138,100	3,971,371	
単元未満株式	普通株式 155,854		1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	397,900,154		
総株主の議決権		3,971,371	

- (注) 1 「完全議決権株式(自己株式等)」の欄は、すべて当社の保有の自己株式であります。
- 2 「完全議決権株式(その他)」の欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が200株および株主名簿上は当社名義となっておりますが、実質的に所有していない株式が1,000株含まれております。但し、「議決権の数」欄には、株主名簿上は当社名義となっておりますが、実質的に所有していない株式に係る議決権の数10個は含まれておりません。
- 3 「単元未満株式」の欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が50株、当社所有の自己株式が55株含まれております。

【自己株式等】

2021年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合(%)
大日本住友製薬株式会社	大阪市中央区道修町 二丁目6番8号	606,200		606,200	0.15
計		606,200		606,200	0.15

- (注) 株主名簿上は当社名義となっておりますが、実質的に所有していない株式が1,000株あります。なお当該株式数は上記「発行済株式」の「完全議決権株式(その他)」の中に含まれております。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号の規定に基づく普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(千円)
当事業年度における取得自己株式	1,217	1,870
当期間における取得自己株式	300	582

(注) 当期間における取得自己株式には、2021年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(千円)	株式数(株)	処分価額の総額(千円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他 (単元未満株式の買増請求による処分)			15	17
保有自己株式数	606,255		606,540	

(注) 1 当期間における取得自己株式の処理状況には、2021年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買増請求による株式数は含めておりません。

2 当期間末の保有自己株式数は、2021年5月31日現在のものです。

3 【配当政策】

当社は、株主の皆様へ常に適切な利益還元を行うことを最も重要な経営方針の一つとして位置付けております。

当社の剰余金の配当は、中間配当および期末配当の年2回を基本的な方針としております。配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

配当方針につきましては、業績に裏付けられた成果を適切に配分することを重視しており、安定的な配当に加えて、業務向上に連動した増配を行うこととしております。また、企業価値のさらなる向上に向け、将来の成長のための積極的な投資を行いつつ、強固な経営基盤の確保と財務内容の充実を図っており、2018年度を起点とする2022年度までの中期経営計画では、5年間平均の配当性向として20%以上を目指しております。

当連結会計年度の業績は、コア営業利益696億円、親会社の所有者に帰属する当期利益562億円を計上しました。

当連結会計年度の期末配当については、配当方針および当連結会計年度の業績を踏まえ、1株につき14円、年間では1株につき28円の配当を行うことといたしました。

内部留保資金につきましては、主として国内外における研究開発・事業開発への投資、経営活動の効率化のための設備投資および借入金返済等の財務体質の強化の資金として活用することとしております。

また、当社は会社法第454条第5項に規定する中間配当をすることができる旨を定款に定めております。

なお、基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2020年10月28日 取締役会決議	5,562	14.00
2021年6月24日 定時株主総会決議	5,562	14.00

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、「コーポレートガバナンスに関する基本方針」を制定し、企業理念および経営理念のより良い実現を目指して、実効性の高いコーポレートガバナンス体制の構築を継続して追求することを重要な経営課題として位置づけています。

企業統治の体制の概要および当該企業統治の体制を採用する理由

当社は、取締役会と独立した立場で取締役の職務執行を監査する目的で監査役会設置会社を選択しています。また、執行役員制度を採用し、経営の監督と業務執行を分離しています。

取締役会は、独立社外取締役4名を含む9名で構成しており（議長：会長）、原則月1回開催し、経営に関する重要な事項について決議および報告を行っています。

監査役会は、社外監査役3名を含む5名で構成しており、原則月1回開催し、監査に関する重要な事項について協議と決議を行うとともに、取締役会付議事項の事前確認等も行っています。

取締役および監査役の候補者の指名、取締役の報酬の決定などにかかる取締役会の機能の客観性・独立性を強化する観点から、取締役会の諮問機関として指名報酬委員会を設置し、必要に応じて開催しています。同委員会は、次の6名の委員で構成し、その過半数である4名を独立社外取締役とし、委員長は独立社外取締役から選定しています。

（指名報酬委員会の構成）

委員長 跡見 裕（社外取締役）
委員 多田 正世（取締役会長）
野村 博（代表取締役社長）
新井 佐恵子（社外取締役）
遠藤 信博（社外取締役）
碓井 稔（社外取締役）

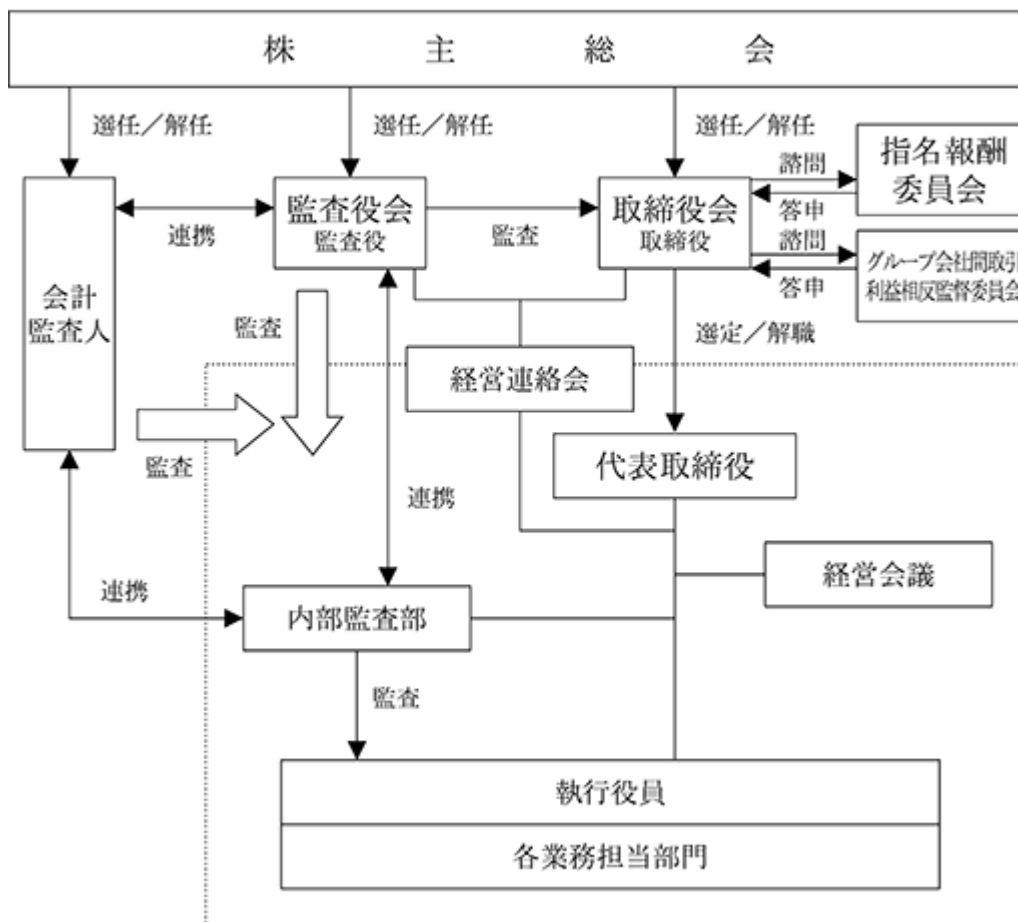
当社の親会社またはその子会社（当社およびその子会社を除く。）（以下「親会社グループ」という。）との重要な取引等について、その公正性および合理性を確保し、当社の少数株主の利益保護に資するため、取締役会の諮問機関としてグループ会社間取引利益相反監督委員会を設置し、必要に応じて開催しています。同委員会は、すべての独立社外取締役で構成し、委員長は委員の互選により選定しています。第201期定時株主総会終結後における同委員会の委員長は、2021年7月以降に開催する同委員会において選定する予定です。

（グループ会社間取引利益相反監督委員会の構成）

委員 跡見 裕（社外取締役）
新井 佐恵子（社外取締役）
遠藤 信博（社外取締役）
碓井 稔（社外取締役）

また、社長の意思決定のための諮問機関として経営会議を原則月2回開催し、取締役会の決定した基本方針に基づき、経営上の重要な事項を審議しています。さらに、業務執行状況および業務執行にかかわる重要事項について社外役員を含む取締役および監査役ならびに執行役員等の間で適切に共有することを目的として経営連絡会を原則月1回開催しています。

(コーポレートガバナンス体制についての模式図)



企業統治に関するその他の事項

(ア) 内部統制システムおよびリスク管理体制の整備の状況

当社は、業務の適正を確保するための体制の整備の基本方針について、取締役会において次のとおり決議し、運用しています。

(a) 当社の取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- ・「行動宣言」に基づくコンプライアンスの実践をより確実なものとするため、「コンプライアンス行動基準」を制定し、企業倫理の浸透を図ります。
- ・コンプライアンスを推進する体制として、コンプライアンス担当執行役員を委員長とするコンプライアンス委員会及びコンプライアンス委員会事務局を設置し、各部門長をコンプライアンス推進者に任命します。
- ・コンプライアンス委員会を定期的を開催し、コンプライアンス推進状況を把握し、その概要を取締役に適切に報告します。
- ・コンプライアンス委員会は、取締役及び使用人に対する教育研修の年度方針を策定し、実施します。
- ・コンプライアンスに関する通報・相談をするための窓口として社内外にコンプライアンス・ホットラインを設置します。当該通報・相談をした者に対して、当該通報・相談をしたことを理由として不利な取扱いをしません。
- ・内部監査を担当する部門を設置して、コンプライアンスの状況の監査を行い、社長及びコンプライアンス担当執行役員に適切に報告します。

(b) 当社の取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

- ・記録・情報の取扱いに関する社則を制定し、取締役の職務の執行に係る情報の適切な保存・管理を行います。

- (c) 当社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
- ・リスクマネジメントに関する当社グループとしての基本的な考え方を定めた「DSP Group Risk Management Policy」を制定し、適切にリスクマネジメントを実施します。
 - ・「リスクマネジメント規則」を制定し、社長がリスクマネジメントを統括することを明確にするとともに、特性に応じて分類されたリスクごとにリスクマネジメントを推進する体制を整備します。各推進体制の運用状況については、定期的に取り締役に報告します。
 - ・当社の経営又は事業活動に重大な支障を与えるおそれのある緊急事態が発生した際の影響を最小限にとどめるため、「緊急時対応規程」を制定し、経営及び事業の継続性を確保します。
- (d) 当社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- ・「取締役会規則」、「職務権限規則」、「組織規則」、「業務分掌規程」等を制定し、職務権限、業務分掌及び意思決定のルールを明確にします。
 - ・執行役員制度を導入し、迅速で効率性の高い経営の実現を図ります。
 - ・電子決裁システムを導入し、意思決定の迅速化及び効率化を図ります。
- (e) 当社並びにその親会社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
- () 子会社の取締役等の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- 子会社は、職務権限、業務分掌及び意思決定のルールを明確にします。
- () 子会社の取締役等の職務の執行に係る事項の当社への報告に関する体制
- 当社は、適正なグループ運営を推進するための基本事項を定めた社則を制定し、その遵守を子会社が誓約することにより、子会社から経営上の重要事項の報告を受けます。
- () 子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
- ・子会社は、その業態やリスクの特性に応じてリスクマネジメントを推進する体制を整備し、適切にリスクマネジメントを実施します。
 - ・当社は、子会社のリスクマネジメント全般を把握し、助言、指導等の必要な対応を行います。
 - ・当社は、当社グループがグループ横断的に取り組むべきリスクについて、必要な推進体制を整備し、当社グループにおけるリスクマネジメントを強化します。
- () 子会社の取締役等及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
- ・子会社は、適切なコンプライアンス推進体制を整備します。
 - ・当社は、子会社が参加するコンプライアンスに関する委員会等を定期的開催し、子会社のコンプライアンスの強化を図ります。
 - ・当社の内部監査を担当する部門は、子会社のコンプライアンスの状況の監査を行い、当社の社長及びコンプライアンス担当執行役員に適切に報告します。
- () その他当社並びにその親会社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
- ・親会社である住友化学株式会社のグループ運営の方針を尊重しつつ、当社の独立性を確保し、自律的な内部統制システムを整備します。
 - ・当社と親会社との取引については、取引の公正性及び合理性を確保し、適切に行います。
- (f) 監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- () 監査役を補助すべき使用人に関する事項、当該使用人の当社の取締役からの独立性に関する事項及び当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
- 監査役を補助し、監査役会事務局を担当するため、業務執行部門の指揮・命令に服さない使用人を配置します。当該使用人の異動及び人事考課は、監査役と協議の上、監査役の意見を尊重して行います。
- () 取締役及び使用人が監査役に報告をするための体制
- 当社の取締役及び使用人から監査役への報告に関する手続等を定め、監査役が必要とする情報を適時適切に提供します。
- () 子会社の取締役、監査役、業務を執行する社員及び使用人又はこれらの者から報告を受けた者が当社の監査役に報告をするための体制
- 子会社の取締役等から監査役への報告に関する手続等を定め、監査役が必要とする情報を適時適切に提供します。
- () 前2号の報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
- 前2号の報告をした者に対して当該報告をしたことを理由として不利な取扱いをしません。

() 監査役の職務の執行について生ずる費用の前払又は償還の手續その他の当該職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項

監査役の職務の執行について生ずる費用又は債務の処理は、監査役の意見を尊重して、適時適切に行います。

() その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

- ・ 監査役と代表取締役との会合、監査役と内部監査を担当する部門との会合、並びに監査役、内部監査を担当する部門及び会計監査人による三者の会合を定期的開催します。
- ・ 監査役から監査役の職務に関する要望があれば、これを尊重し、適時適切に対応します。

(g) 反社会的勢力の排除

反社会的勢力に対しては断固たる行動をとることを周知徹底し、一切の関係遮断に向けた取組を推進します。

(イ) 責任限定契約

当社は、会社法第427条第1項の規定により、賠償責任について、社外取締役4名および社外監査役3名との間に、その職務を行うにつき善意でかつ重大な過失がないときの損害賠償責任を限定する契約（責任限定契約）を締結しています。当該契約に基づく責任の限度額は、1,000万円または法令が規定する額のいずれか高い額としています。

(ウ) 役員等賠償責任保険契約

当社は、会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結しています。当該保険契約の被保険者は、当社および国内子会社（以下「当社等」）のすべての役員および執行役員等の重要な使用人（以下「役員等」）であり、当該保険契約の保険料は当社が全額負担し、被保険者が当社等の役員等としての業務につき行った行為（不作為を含む。）に起因して保険期間中に被保険者に対して損害賠償請求がなされたことにより、被保険者が責任を負う損害賠償金および争訟費用の損害が填補されます。ただし、法令に違反することを被保険者が認識しながら行った行為に起因する場合等一定の免責事由があります。

(エ) 取締役の定数および選任の決議要件

当社は、取締役の定数を3名以上とする旨を定款に定めています。

また、当社の取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨および取締役の選任決議は累積投票によらないものとする旨を定款に定めています。

(オ) 株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

当社は、資本施策の機動的な対応を可能とすることを目的として、会社法第165条第2項に基づき、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款に定めています。

また、当社は、株主へより安定的で適切な配当を実施することを目的として、会社法第454条第5項に基づき、取締役会の決議によって中間配当をすることができる旨を定款に定めています。

(カ) 株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的として、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めています。

(キ) 会社と株主間取引での利益相反の防止

住友化学株式会社は、当社の議決権の51.78%を有する親会社であります。親会社と当社の取引に関しては、市場価格を勘案して双方協議の上、一般的条件と同様に決定しています。また、親会社と当社間における重要な取引につきましては、その決定に際して、取締役会決議を必要としています。さらに、親会社との年間取引金額について、取締役会に報告することによって、株主の利益を害するものでないことを確認しています。また、親会社グループとの重要な取引等については、取締役会の諮問機関として設置した、すべての独立社外取締役によって構成されるグループ会社間取引利益相反監督委員会において、少数株主の利益保護の観点から審議を行うこととしています。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性12名 女性2名 (役員のうち女性の比率14.3%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役会長	多田正世	1945年1月13日	1968年4月 住友化学工業株式会社(現住友化学株式会社)入社 1998年6月 同社取締役 2002年6月 同社常務取締役 2005年1月 旧住友製薬株式会社常務執行役員 2005年6月 同社取締役 兼 常務執行役員 2005年10月 当社取締役 兼 専務執行役員 2007年6月 取締役 兼 副社長執行役員 2008年6月 代表取締役社長 兼 社長執行役員 2018年4月 代表取締役会長 2021年4月 取締役会長(現任)	1年	130
代表取締役社長	野村博	1957年8月31日	1981年4月 住友化学工業株式会社(現住友化学株式会社)入社 2008年1月 当社入社 2008年6月 執行役員 2012年6月 取締役 兼 執行役員 2014年4月 取締役 兼 常務執行役員 2016年4月 取締役 兼 専務執行役員 2017年4月 代表取締役 兼 専務執行役員 2018年4月 代表取締役社長(現任)	1年	53
代表取締役 専務執行役員 営業本部担当 兼 営業本部長 兼 CNS営業部長 兼 Head of Japan Business Unit	小田切 齊	1957年1月4日	1979年4月 稲畑産業株式会社入社 1984年10月 旧住友製薬株式会社入社 2009年6月 ダイニッポンスミトモファーマ アメリカ・インク(現サノビオン社) Senior Vice President 2012年4月 当社執行役員 2016年4月 常務執行役員 2016年6月 取締役 兼 常務執行役員 2019年4月 取締役 兼 専務執行役員 2021年4月 代表取締役 兼 専務執行役員(現任)	1年	37
代表取締役 専務執行役員 チーフサイエンティフィック オフィサー 兼 再生・細胞医 薬事業推進、再生・細胞医薬 神戸センター、再生・細胞医 薬製造プラント担当	木村 徹	1960年8月5日	1989年4月 住友化学工業株式会社(現住友化学株式会社)入社 1992年10月 旧住友製薬株式会社入社 2010年6月 当社研究企画推進部長 2012年4月 事業戦略部長 2013年9月 再生・細胞医薬事業推進室長 2015年4月 執行役員 2016年6月 取締役 兼 執行役員 2019年4月 取締役 兼 常務執行役員 2021年4月 代表取締役 兼 専務執行役員(現任)	1年	32
取締役 常務執行役員 薬事、メディカルインフォ メーション、メディカルア フェアーズ、信頼性保証本 部、技術研究本部、生産本 部担当 兼 信頼性保証本部長 兼 Deputy Head of Japan Business Unit	池田善治	1958年1月5日	1985年4月 旧住友製薬株式会社入社 2009年6月 当社経営企画部長 2010年6月 執行役員 2012年1月 サノビオン社 Executive Vice President 2016年4月 当社常務執行役員 2020年6月 取締役 兼 常務執行役員(現任)	1年	5

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役	跡見 裕	1944年12月5日	2010年4月 2013年6月 2017年6月 2018年4月 2018年6月 2019年6月	杏林大学学長 当社監査役 当社取締役(現任) 杏林大学名誉学長(現任) 公益財団法人日本脾臓病研究財団理事長 三機工業株式会社社外監査役(現任)	1年	-
取締役	新井 佐恵子	1964年2月6日	2002年11月 2018年6月 2018年6月 2019年4月	有限会社グラティア(現有限会社アキュレイ)代表就任(現任) 当社取締役(現任) 東急不動産ホールディングス株式会社社外取締役(現任) 白鷗大学経営学部特任教授(現任)	1年	-
取締役	遠藤 信博	1953年11月8日	2010年4月 2018年6月 2019年6月 2019年6月 2019年6月	日本電気株式会社代表取締役執行役員社長 株式会社日本取引所グループ社外取締役(現任) 当社取締役(現任) 日本電気株式会社取締役会長(現任) 東京海上ホールディングス株式会社社外取締役(現任)	1年	-
取締役	碓井 稔	1955年4月22日	2008年6月 2020年4月 2021年6月 2021年6月	セイコーエプソン株式会社代表取締役社長 同社取締役会長(現任) 当社取締役(現任) 株式会社IHI社外取締役(現任)	1年	-
常勤監査役	大江 善則	1957年11月23日	1982年4月 2010年6月 2010年6月 2014年4月 2014年4月 2017年4月 2017年6月	当社入社 執行役員 事業開発部長 常務執行役員 信頼性保証本部長 特別囑託 常勤監査役(現任)	4年	9
常勤監査役	沓内 敬	1958年6月26日	1981年4月 1984年10月 2009年11月 2010年9月 2011年6月 2012年4月 2018年6月	住友化学工業株式会社(現住友化学株式会社)入社 旧住友製薬株式会社入社 アジア・オセアニア事業統括部長 海外営業部長 海外企画開発部長兼海外営業部長 内部監査部長 常勤監査役(現任)	4年	17
監査役 非常勤	藤井 順輔	1952年12月22日	2015年5月 2016年6月 2017年6月 2020年6月	株式会社日本総合研究所取締役会長 ハウス食品グループ本社株式会社社外監査役 当社監査役(現任) ハウス食品グループ本社株式会社社外取締役(現任)	4年	-
監査役 非常勤	射手矢 好雄	1956年1月9日	1992年1月 2004年4月 2018年6月 2021年1月	森・濱田松本法律事務所パートナー 国立大学法人一橋大学法科大学院特任教授(現任) 当社監査役(現任) アンダーソン・毛利・友常法律事務所パートナー(現任)	4年	-
監査役 非常勤	望月 眞弓	1954年3月10日	2019年4月 2019年4月 2019年4月 2020年4月 2020年10月 2021年6月	慶應義塾大学名誉教授(現任) 同大学薬学部特任教授 国際医学情報センター顧問(現任) 国際医療福祉大学特別顧問(現任) 日本学会議副会長(現任) 当社監査役(現任)	4年	-
計						283

- (注) 1 取締役 跡見裕、新井佐恵子、遠藤信博および碓井稔は、社外取締役であります。
- 2 監査役 藤井順輔、射手矢好雄および望月眞弓は、社外監査役であります。
- 3 所有株式数は、2021年5月31日現在の保有状況であります。
- 4 取締役9名の任期は、2021年6月24日選任後、1年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時までであります。
- 5 常勤監査役 大江善則ならびに監査役 藤井順輔および望月眞弓の任期は、2021年6月24日選任後、4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時までであります。
- 6 常勤監査役 沓内敬および監査役 射手矢好雄の任期は、2018年6月19日選任後、4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時までであります。
- 7 当社では、取締役会の活性化および意思決定の迅速化ならびに業務執行の責任体制の明確化を目的として執行役員制度を導入しております。

執行役員（取締役による兼任を除く）は、以下の11名であります。

常務執行役員	馬場 博之	データデザイン、渉外、法務、知的財産、秘書、IT & デジタル革新推進、フロンティア事業推進担当
常務執行役員	西中 重行	経営企画、ビジネスディベロップメント、海外事業推進担当
常務執行役員	原田 秀幸	リサーチディビジョン担当 兼 シニアリサーチディレクター
執行役員	樋口 敦子	コーポレートガバナンス、コーポレートコミュニケーション、人事担当
執行役員	田口 卓也	営業本部副本部長
執行役員	上月 孝一	開発本部担当 兼 開発本部長 兼 信頼性保証本部副本部長 兼 Deputy Head of Japan Business Unit
執行役員	志水 勇夫	リサーチディレクター
執行役員	佐藤 由美	サノビオン社 Executive Vice President and Chief Corporate Strategy Officer
執行役員	植野 健司	技術研究本部長
執行役員	Antony Loebel	サノビオン社 President and CEO
執行役員	Patricia S. Andrews	スミトモダイニッポンファーマ オンコロジー社 CEO 兼 Global Head of Oncology

社外役員の状況

当社は社外取締役4名、社外監査役3名を選任しています。

<社外取締役>

跡見 裕	<ul style="list-style-type: none"> ・同氏は、医学者としての豊富な経験および専門的知識を有しています。当社グループの持続的成長と企業価値向上に向けて、これらの経験や専門的知識を経営に反映していただくとともに、社外取締役として独立した客観的な立場から経営を監督いただくことを期待して、選任しています。 ・同氏は当社の独立社外取締役であり、当社は、株式会社東京証券取引所に対し、同氏を独立役員として届け出しています。 ・当社と同氏の間には特別な利害関係はありません。 ・同氏が理事長を務めていた公益財団法人日本脳臓病研究財団ならびに名誉学長を務める杏林大学および社外監査役を務める三機工業株式会社と当社との間に重要な取引関係はありません。
新井 佐恵子	<ul style="list-style-type: none"> ・同氏は、複数の企業の経営に携わるなど企業経営者としての豊富な経験および公認会計士としての専門的知識を有しています。当社グループの持続的成長と企業価値向上に向けて、これらの経験や専門的知識を経営に反映していただくとともに、社外取締役として独立した客観的な立場から経営を監督いただくことを期待して、選任しています。 ・同氏は当社の独立社外取締役であり、当社は、株式会社東京証券取引所に対し、同氏を独立役員として届け出しています。 ・当社と同氏の間には特別な利害関係はありません。 ・同氏が特任教授を務める白鷗大学、代表を務める有限会社アキュレイ、社外取締役を務める東急不動産ホールディングス株式会社ならびに契約監視委員会委員および情報セキュリティ対策監査実施者選定委員会委員を務める年金積立金管理運用独立行政法人(GPIF)と当社との間に重要な取引関係はありません。
遠藤 信博	<ul style="list-style-type: none"> ・同氏は、ICT事業等をグローバルに展開する企業における長年にわたる経営者としての経歴を通じて培われた幅広い見識と豊富な経験を有しています。当社グループの持続的成長と企業価値向上に向けて、これらの見識や経験を経営に反映していただくとともに、社外取締役として独立した客観的な立場から経営を監督いただくことを期待して、選任しています。 ・同氏は当社の独立社外取締役であり、当社は、株式会社東京証券取引所に対し、同氏を独立役員として届け出しています。 ・当社と同氏の間には特別な利害関係はありません。 ・同氏が取締役会長を務める日本電気株式会社ならびに社外取締役を務める株式会社日本取引所グループおよび東京海上ホールディングス株式会社と当社との間に重要な取引関係はありません。
碓井 稔	<ul style="list-style-type: none"> ・同氏は、情報関連機器等の商品や関連するサービスをグローバルに提供する企業における長年にわたる経営者としての経歴を通じて培われた幅広い見識と豊富な経験を有しています。当社グループの持続的成長と企業価値向上に向けて、これらの見識や経験を経営に反映していただくとともに、社外取締役として独立した客観的な立場から経営を監督いただくことを期待して、選任しています。 ・同氏は当社の独立社外取締役であり、当社は、株式会社東京証券取引所に対し、同氏を独立役員として届け出しています。 ・当社と同氏の間には特別な利害関係はありません。 ・同氏が取締役会長を務めるセイコーエプソン株式会社および社外取締役を務める株式会社IHIと当社との間に重要な取引関係はありません。

< 社外監査役 >

藤井 順輔	<ul style="list-style-type: none"> ・同氏は、都市銀行およびコンサルティング事業等を展開する企業における長年にわたる経営者としての経歴を通じて培われた幅広い見識と豊富な経験を有しています。これらを当社グループの監査に反映していただくため、選任しています。 ・当社は、株式会社東京証券取引所に対し、同氏を独立役員として届け出しています。 ・当社と同氏の間には特別な利害関係はありません。 ・同氏が社外取締役を務めるハウス食品グループ本社株式会社と当社との間に重要な取引関係はありません。
射手矢 好雄	<ul style="list-style-type: none"> ・同氏は、弁護士としての豊富な経験および専門的知識を有しており、それらを当社の監査に生かせるものと判断し、選任しています。 ・当社と同氏の間には特別な利害関係はありません。 ・同氏がパートナーを務めていた森・濱田松本法律事務所ならびにパートナーを務めるアンダーソン・毛利・友常法律事務所および特任教授を務める国立大学法人一橋大学と当社との間に重要な取引関係はありません。
望月 眞弓	<ul style="list-style-type: none"> ・同氏は、薬学者としての豊富な経験および専門的知識を有しています。これらを当社グループの監査に反映していただくため、選任しています。 ・当社と同氏の間には特別な利害関係はありません。 ・同氏が名誉教授を務める慶應義塾大学および副会長を務める日本学術会議と当社との間に重要な取引関係はありません。

当社では、次のとおり社外役員の独立性判断基準を定めており、当該基準を充足する社外取締役および社外監査役を独立性があるものと判断しています。

(社外役員の独立性判断基準)

当社は、次のいずれの事項にも該当しない者について、独立性が認められる者と判断します。ただし、この独立性判断基準を形式的に充足している場合においても、具体的な状況に鑑み、実質的に独立性がないと判断することは妨げられないものとします。

- (ア) 当社を主要な取引先とする者（当社に対して製品またはサービスを提供している者であって、その取引額がその者の直前3事業年度のいずれかの年度における年間連結売上収益または年間連結売上高の2%を超える者をいう。）またはその業務執行者（会社法施行規則第2条第3項第6号に定める業務執行者と同義とする。以下この独立性判断基準において同じ。）
- (イ) 当社の主要な取引先（当社が製品またはサービスを提供している取引先であって、当社の直前3事業年度のいずれかの年度における取引額が年間連結売上収益の2%を超える者をいう。）またはその業務執行者
- (ウ) 当社から役員報酬以外に、その者の直前3事業年度のいずれかの年度において1,000万円以上の金銭その他の財産を得ているコンサルタント、会計専門家または法律専門家（金銭その他の財産を得ている者が法人、組合その他の団体である場合は、当社から1億円以上を得ている団体に所属する者をいう。）
- (エ) 当社からその者の直前3事業年度のいずれかの年度において1,000万円以上の寄付または助成を受けている者（寄付または助成を受けた者が法人、組合その他の団体である場合は、当社から1億円以上の寄付または助成を受けている団体に所属する者をいう。）
- (オ) 過去10年間に於いて次の（a）または（b）に該当していた者
 - （a）当社の親会社の業務執行者（業務執行者でない取締役を含み、社外監査役を独立性の判断の対象とする場合にあっては、監査役を含む。）
 - （b）当社の親会社の子会社（当社およびその子会社を除く。以下同じ。）の業務執行者

(カ) 次の(ア)から(オ)までのいずれかに掲げる者(重要な地位にある者(注1)以外を除く。)の近親者
(注2)

(ア) 上記(ア)から(オ)までに掲げる者

(b) 当社の子会社の業務執行者(社外監査役を独立性の判断の対象とする場合にあっては、業務執行者でない取締役を含む。)、当社の親会社の業務執行者(業務執行者でない取締役を含み、社外監査役を独立性の判断の対象とする場合にあっては、監査役を含む。)または当該親会社の子会社の業務執行者

(c) 過去3年間に於いて当社またはその子会社の業務執行者(社外監査役を独立性の判断の対象とする場合にあっては、業務執行者でない取締役を含む。)であった者

(注) 1 重要な地位にある者とは、取締役(社外取締役を除く。)、執行役員および部門長ならびに監査法人または会計事務所に所属する公認会計士、法律事務所等に所属する弁護士その他同等の重要性を持つと客観的・合理的に判断される者をいう。

2 近親者とは、配偶者および二親等内の親族をいう。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査および会計監査との相互連携並びに内部監査部との関係

社外取締役は、取締役会等において、監査役監査および内部監査の結果について報告を受けるとともに、財務報告に係る内部統制の評価結果や業務の適正を確保するための体制の運用状況についても報告を受けており、また、定期的に会合をもつことにより、社外監査役、常勤監査役、会計監査人および内部監査部と相互に連携を図っています。

社外監査役を含む監査役は、内部監査部と原則月1回会合を開催し、内部監査部より監査体制、監査計画、監査実施状況の報告を聴取するほか、相互に意見交換を行うことにより緊密な連携をとっています。さらに、監査役および監査役会は、期首や四半期決算時に定期的に会計監査人と会合を開催するほか、必要に応じて会合を開催し、積極的に意見・情報交換を行っています。

また、監査役、会計監査人および内部監査部は、定期的に連絡会を開催し情報交換をするなどその連携を図っています。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

監査役については、3名の社外監査役を含めた5名の監査役を選任しています(財務および会計に関する相当程度の知見を有する者1名を含む)。

当事業年度において、監査役会を13回開催しており、1回当たりの平均所要時間は約180分でした。各監査役の出席状況については次のとおりです。

役職名	氏名	出席回数 / 開催回数 (出席率)
常勤監査役	大江 善則	13回 / 13回 (100%)
常勤監査役	沓内 敬	13回 / 13回 (100%)
社外監査役	西川 和人	13回 / 13回 (100%)
社外監査役	藤井 順輔	13回 / 13回 (100%)
社外監査役	射手矢 好雄	13回 / 13回 (100%)

監査役会においては、監査方針、監査計画、監査役職務の分担を決定し、主に、重点監査項目、監査環境の整備状況、内部統制システムの整備・運用状況(リスク管理体制、ガバナンス体制、海外を含む企業集団内部統制等)、会計監査人の監査の相当性および再任適否、競業取引・利益相反取引の状況、不祥事等への対応状況等についての検討または監視・検証を行っています。

監査役会は、当事業年度は、1)財務報告の適正を確保するための内部統制を含めた、当社単体および企業集団の内部統制システムの整備・運用状況について、2)Sumitovant事業の編入を踏まえた中期経営計画の見直しおよび実施状況について、3)北米事業の方向性および体制整備について、4)外部環境変化への対応について、を重点監査項目として取り組みました。

各監査役は、当事業年度の監査方針、監査計画、監査役職務の分担等に従い、代表取締役と定期的に会合を持ち、その他取締役および使用人から積極的な報告を受け、会計監査人との連携、内部監査部門との連携、更に三様監査の連携の機会を定期的に持つなど、監査の実効性を高めるための環境整備に努めています。また、取締

役員その他重要な会議に出席し、取締役による経営判断の適法性・妥当性を確認するとともに、取締役および使用人等から職務の執行状況について報告を受け、必要に応じて説明を求め、また、重要な決裁書類等を閲覧すること等により、内部統制システムの運用状況を監査しています。子会社については、国内外子会社の代表取締役等との面談を行うほか、子会社の監査役とも適宜会合を持ち、情報入手に努めることにより、内部統制システムの運用状況を監査しています。

なお、当事業年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、実査を行うことはできず、会議、調査および監査は、電子メール、電話会議システム、ウェブ会議システム等により実施しました。事前に会議資料を入手し、論点を整理することや会議時間を長く設定すること等により、会議、調査および監査の水準を一定以上に保つことができました。

また、監査役監査の実効性を高め、かつ、監査職務を円滑に遂行するため、監査役の専従スタッフを配置しています。

内部監査の状況

内部監査については、代表取締役社長直轄の内部監査部（2021年3月31日現在10名）を設置しています。

内部監査部では、内部統制の目的を達成するための基本的な要素を、子会社を含めて、公正かつ独立の立場で監査しています。また、内部監査部は、金融商品取引法に基づく財務報告に係る内部統制についての整備状況および運用状況の評価を行っています。

会計監査の状況

（ア）監査法人の名称

有限責任 あずさ監査法人

（イ）継続監査期間

15年間

（ウ）業務を執行した公認会計士

氏名	所属	連続して監査関連業務を行った年数
原 田 大 輔	有限責任 あずさ監査法人	3年
俣 野 広 行	有限責任 あずさ監査法人	1年
立 石 政 人	有限責任 あずさ監査法人	3年

（エ）監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士8名、その他18名が監査業務に携わっております。

（オ）監査法人の選定方針と理由

当社の監査役会による会計監査人の選定につきましては、当社の監査に必要な規模・人的組織・国際的ネットワークを有すること、当社の事業内容および国内外の事業展開を熟知していること、品質管理体制・コンプライアンス体制が整備され重大な監査上の品質問題を発生させていないこと、独立性に疑義を生じさせるような利害関係がないこと等を選定・評価基準としております。

当社は、有限責任 あずさ監査法人が当該基準を満たしており、職務遂行状況等を総合的に勘案した結果、同監査法人を適任と判断し、再任いたしました。

当社監査役会は、会社法第340条に従い会計監査人を解任するほか、別途定める会計監査人の解任または不再任の決定の方針に従い、会計監査人が継続して職務を遂行することに関し、重大な疑義が生じた場合には、会計監査人の解任または不再任に関する議案を決定し、当社取締役会は、当社監査役会の当該決定に基づき、当該議案を株主総会に提出します。

（カ）監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役会は会計監査人の選定・評価基準を策定しており、当該基準に基づき会計監査人に対する評価を行っています。また、独立性に関する事項、その他監査に関する法令および規定の遵守に関する事項、会計監査人の職務の遂行が適正に行われていることを確保するための体制に関するその他の事項等を確認することにより、会計監査人に求められる独立性および専門性についても確認を行うこととしております。

監査報酬の内容等

(ア) 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	101	-	159	3
連結子会社	-	-	-	-
計	101	-	159	3

当社における当連結会計年度の非監査業務の内容は、社債発行に係るコンフォートレター作成業務であります。なお、前連結会計年度においては、該当事項はありません。

(イ) 監査公認会計士等と同一のネットワーク（KPMGグループ）に対する報酬（（ア）を除く）

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	-	284	-	20
連結子会社	228	23	218	19
計	228	307	218	39

当社における非監査業務は、前連結会計年度はロイバント社との戦略的提携に係る財務調査、税務アドバイザリー契約等に基づくものであり、当連結会計年度は、税務アドバイザリー契約等に基づくものであります。

連結子会社における非監査業務は、前連結会計年度、当連結会計年度ともに、税務アドバイザリー契約に基づくものであります。

(ウ) その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

当社の連結子会社であるスミトバント社は、アーンスト・アンド・ヤングの監査を受けており、当連結会計年度における当該監査証明業務に基づく報酬額は58百万円であります。

また、スミトバント社傘下の一部の子会社においてもアーンスト・アンド・ヤングの監査を受けており、当連結会計年度における当該監査証明に基づく報酬額は207百万円、非監査業務に基づく報酬額は21百万円であります。

(エ) 監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬につきましては、会計監査人から監査計画の内容、監査業務の実施方法の説明を受け、当社の事業規模、業務の特性、監査時間等を総合的に勘案し、監査役会の同意を得て決定することとしております。

(オ) 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社の監査役会は、会計監査人の監査計画の内容、職務遂行状況および報酬見積りの算出根拠を検証・確認し、監査報酬の妥当性を総合的に検討した結果、会計監査人の報酬等について合理的な水準であると判断し、会社法第399条第1項に基づき同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)			対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	業績連動型報酬 (賞与)	業績非連動型報酬 (賞与)	
取締役 (社外取締役を除く)	352	304	48		6
監査役 (社外監査役を除く)	51	51			2

社外取締役および 社外監査役	75	72	3	6
-------------------	----	----	---	---

- (注) 1 2005年6月29日開催の第185期定時株主総会の決議による取締役および監査役の報酬等の額は、取締役が年額4億円以内、監査役が年額1億円以内であり、当該決議における役員の員数は、取締役10名、監査役4名です。なお、2021年6月24日開催の第201期定時株主総会の決議により取締役の報酬等の額を年額7億円以内と改定しております。
- 2 取締役9名の報酬等の総額は391百万円、監査役5名の報酬等の総額は87百万円です。
- 3 上記の業績連動型報酬(賞与)には、前事業年度の有価証券報告書記載の支給予定額と確定額の差額1百万円を含んでいます。

提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額

氏名	役員区分	会社区分	連結報酬等の種類別の額(百万円)		連結報酬等の総額(百万円)
			基本報酬	賞与	
多田 正世	取締役	提出会社	94	13	107
野村 博	取締役	提出会社	83	18	101

役員の報酬等の額またはその算定方法の決定に関する方針等

(ア) 取締役の報酬等の決定に関する方針等

当社は、取締役および監査役の候補者の指名、取締役の報酬の決定などにかかる取締役会の機能の客観性・独立性を強化する観点から、取締役会の諮問機関として指名報酬委員会を設置しています。また、取締役報酬制度として、取締役の個人別の報酬等の内容についての決定の方針を次のとおり定めており、当該方針は、指名報酬委員会が取締役会の諮問に基づき審議を行い、その答申を得たうえ、取締役会が決定しています。

(a) 報酬等の体系

取締役(社外取締役を除く。)の報酬は、基本報酬と業績連動型報酬(賞与)で構成し、当社グループの持続的な成長と企業価値の向上に向けたインセンティブとなるよう設定しています。また、基本報酬の一定割合を当社役員持株会に毎月拠出し当社株式を取得しており、取得した株式は在任期間中および退任後1年間は継続して保有することで、中長期的な企業価値向上への貢献意欲を高めるとともに株主との価値共有を進めています。なお、業績連動型報酬(賞与)は、下記(b)の方法により算定し、その報酬等の総額に占める割合は1割前後となります。

社外取締役の報酬は、基本報酬と業績非連動型報酬(賞与)で構成し、監督機能および独立性確保の観点から業績と連動しない設定としています。

基本報酬、業績連動型報酬(賞与)および業績非連動型報酬(賞与)は、代表取締役等の役位に応じた基準額を定めており、報酬等の総額は、株主総会で承認されている年額7億円を超えないものとしています。

(b) 業績連動型報酬(賞与)の支給額の算定方法

取締役(社外取締役を除く。)の業績連動型報酬(賞与)の支給額は、基準額に対し、業績連動要素および個人業績に基づき、基準額の0~200%の範囲で算定しています。

業績連動要素は、当社グループにおける会社の経常的な収益性を示す利益指標として設定し、当社独自の業績管理指標としている「コア営業利益」を指標とし、目標の達成度合いに基づき、指名報酬委員会において評価を行っています。また、個人業績は、各取締役(社外取締役を除く。)の業績目標の達成度合いに基づき、指名報酬委員会において評価を行っています。なお、当事業年度の「コア営業利益」は、前連結会計年度決算発表時に公表した予測値(330億円)を目標とし、その実績は696億円となりました。

(c) 報酬等の決定方法

取締役の個人別の報酬等の内容は、指名報酬委員会が取締役会の諮問に基づき審議を行い、その答申を得たうえ、取締役会が決定しています。また、取締役会が当該報酬等の内容の決定を代表取締役社長に委任することを決定した場合、代表取締役社長は、指名報酬委員会の取締役会への答申を尊重したうえ決定することとしています。

当事業年度に係る当該報酬等の内容については、業務全体を統括し取締役(社外取締役を除く。)全員の職務執行を把握している代表取締役社長野村博が、取締役会から委任を受けて決定しており、指名報酬委員会は、当該報酬等の内容が取締役報酬制度に従ったものであることを確認しています。このことから、取締役会は、当該報酬等の内容の決定が当該方針に沿うものであると判断しています。

(イ) 監査役の報酬等

監査役の報酬は基本報酬のみとし、個人別の報酬等の内容は、監査役会の協議により定めています。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式の区分について、主として株式の価値変動または配当による利益を受けることを目的とみなしているものを純投資目的である投資株式としており、投資先企業との円滑な取引関係の維持・強化などを通じ中長期的な視点で企業価値向上や持続的な成長に資すると判断されるものを純投資目的以外の目的である投資株式として区分しております。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

(ア) 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社が定めた「コーポレートガバナンスに関する基本方針」において、政策保有株式に関する方針について、次のとおり定めています。この方針に基づき、毎年取締役会において、当社が保有する個別の政策保有株式について、保有目的、取引状況、含み損益等を評価軸として、保有継続の合理性を確認しています。

- ・当社は、持続的な成長に向けて、企業提携、重要な取引先との取引関係の構築・維持その他事業上の必要性のある場合を除き、他社の株式を保有しません。
- ・当社は、個別の政策保有株式について、その保有目的の合理性および経済的な合理性を取締役会において毎年確認し、保有の合理性が認められない場合は縮減または売却を進めます。

なお、当社は、ロイバント社との戦略的提携の実施に際して、2019年12月に同社の株式（非上場）を取得しました。当事業年度末における当該株式の当社グループの連結財政状態計算書における資本合計に対する割合は19.0%となっています。

(イ) 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	39	118,066
非上場株式以外の株式	26	50,836

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	4	770	新規提携などによる取得
非上場株式以外の株式	3	52	新規上場および取引先持株会による取得

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	2	1
非上場株式以外の株式		

(注) 非上場株式の銘柄数には株式会社ファンペップの新規上場によるものを含んでおります。

(ウ) 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
JCRファーマ株式会社	3,400,000	850,000	取引先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。なお、株式分割により株式数が増加しております。	無
	12,189	8,007		
株式会社メディパ ルホールディング ス	3,243,148	3,239,890	取引先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。なお、当社はメディセオ取引先持株会に入会しており、毎月一定金額を抛出し、同社株式の取得を行っております。	有
	6,888	6,538		
サンバイオ株式会 社	2,820,511	2,820,511	提携先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。なお、同社株式については2021年3月30日の取締役会において売却を決議し、現在、売却を進めています。	無
	5,401	3,272		
小野薬品工業株式 会社	1,665,000	1,665,000	取引先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	有
	4,812	4,139		
株式会社スズケン	924,278	924,278	取引先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	有
	3,998	3,637		
アルフレッサホー ルディングス株式 会社	1,641,120	1,641,120	取引先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	有
	3,501	3,305		
株式会社ヘリオス	1,500,000	1,500,000	提携先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	無
	2,504	2,261		
持田製薬株式会社	541,600	541,600	取引先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	有
	2,323	2,258		
三井住友トラ スト・ホールディ ングス株式会 社	346,989	346,989	競争力のある安定的な資金調達先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	有
	1,339	1,084		
東邦ホールディ ングス株式会 社	578,426	578,426	取引先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	有
	1,174	1,311		
MS&ADイン シュアランスグ ループホールディ ングス株式会 社	304,573	304,573	事業運営上必要な保険の契約先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	有
	990	921		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
株式会社バイタル ケ-エスケ- ホールディングス	1,199,525	1,199,525	取引先として良好な関係を維持・強化して いくことの重要性等に加え、資本コストを勘 案した配当・取引額等の定量的な評価の実 施を通じて、総合的に判断し保有してい ます。	有
	946	1,316		
株式会社三菱UF Jフィナンシ ャル・グル- ブ	1,461,160	1,461,160	競争力のある安定的な資金調達先として良 好な関係を維持・強化していくことの重要 性等に加え、資本コストを勘案した配当・ 取引額等の定量的な評価の実施を通じ て、総合的に判断し保有しています。	有
	865	589		
株式会社滋賀銀行	337,200	337,200	競争力のある安定的な資金調達先として良 好な関係を維持・強化していくことの重要 性等に加え、資本コストを勘案した配当・ 取引額等の定量的な評価の実施を通じ て、総合的に判断し保有しています。	有
	808	866		
大阪瓦斯株式会社	265,800	265,800	取引先として良好な関係を維持・強化して いくことの重要性等に加え、資本コストを 勘案した配当・取引額等の定量的な評価 の実施を通じて、総合的に判断し保有し ています。	有
	573	541		
株式会社三井住友 フィナンシ ャルグル- ブ	125,046	125,046	競争力のある安定的な資金調達先として良 好な関係を維持・強化していくことの重要 性等に加え、資本コストを勘案した配当・ 取引額等の定量的な評価の実施を通じ て、総合的に判断し保有しています。	有
	501	328		
株式会社百十四銀 行	268,612	268,612	競争力のある安定的な資金調達先として良 好な関係を維持・強化していくことの重要 性等に加え、資本コストを勘案した配当・ 取引額等の定量的な評価の実施を通じ て、総合的に判断し保有しています。	有
	454	527		
株式会社ほくやく・竹山ホ- ルディングス	468,300	467,987	取引先として良好な関係を維持・強化して いくことの重要性等に加え、資本コストを 勘案した配当・取引額等の定量的な評価 の実施を通じて、総合的に判断し保有し ています。なお、当社はほくやく取引先持 株会に入会しており、毎月一定額を拠出 し、同社株式の取得を行っております。	有
	354	333		
株式会社三十三 フィナンシ ャルグル- ブ	205,714	205,714	競争力のある安定的な資金調達先として良 好な関係を維持・強化していくことの重要 性等に加え、資本コストを勘案した配当・ 取引額等の定量的な評価の実施を通じ て、総合的に判断し保有しています。	有
	286	307		
株式会社紀陽銀行	172,000	172,000	競争力のある安定的な資金調達先として良 好な関係を維持・強化していくことの重要 性等に加え、資本コストを勘案した配当・ 取引額等の定量的な評価の実施を通じ て、総合的に判断し保有しています。	有
	285	275		
ダイト株式会社	55,000	55,000	取引先として良好な関係を維持・強化して いくことの重要性等に加え、資本コストを 勘案した配当・取引額等の定量的な評価 の実施を通じて、総合的に判断し保有し ています。	無
	198	162		
有機合成薬品工業 株式会社	641,000	641,000	取引先として良好な関係を維持・強化して いくことの重要性等に加え、資本コストを 勘案した配当・取引額等の定量的な評価 の実施を通じて、総合的に判断し保有し ています。	有
	197	160		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
株式会社りそなホールディングス	340,000	340,000	競争力のある安定的な資金調達先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	無
	158	111		
株式会社ファンペップ	95,200		提携先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。なお、同社株式は以前より保有しておりましたが、2020年12月に上場したことにより、当事業年度より特定投資株式として追加しています。	無
	45			
イワキ株式会社	55,144	55,144	取引先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	有
	36	24		
広栄化学株式会社	4,000	4,000	取引先として良好な関係を維持・強化していくことの重要性等に加え、資本コストを勘案した配当・取引額等の定量的な評価の実施を通じて、総合的に判断し保有しています。	無
	12	6		

(注) 定量的な保有効果については相手先との機密情報に当たるとの判断から記載しませんが、各銘柄について十分な定量的効果があると判断しております。

みなし保有株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
株式会社三井住友フィナンシャルグループ	731,500	731,500	同社株式を退職給付信託に拠出しており、当社は議決権行使の指図権限を保持していません。	有
	2,931	1,919		
株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ	2,729,000	2,729,000	同社株式を退職給付信託に拠出しており、当社は議決権行使の指図権限を保持していません。	有
	1,615	1,100		

(注) 貸借対照表計上額の上位銘柄を算定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算しておりません。

第5 【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」）第93条の規定により、国際会計基準（以下「IFRS」）に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」）に基づいて作成しております。
また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2020年4月1日から2021年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2020年4月1日から2021年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人による監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備について

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組み及びIFRSに基づいて連結財務諸表等を適正に作成することができる体制の整備を行っております。その内容は以下のとおりであります。

- (1) 会計基準の変更等に的確に対応することができる体制を整備するために、IFRSに関する十分な知識を有した従業員を配置するとともに、公益財団法人財務会計基準機構等の組織に加入し、セミナー等に参加することによって、専門知識の蓄積に努めております。
- (2) IFRSに基づく適正な連結財務諸表を作成するために、IFRSに準拠したグループ会計処理指針を作成し、これに基づいて会計処理を行っております。グループ会計処理指針は、国際会計基準審議会が公表するプレスリリースや基準書を随時入手し、最新の基準の把握及び当社への影響の検討を行った上で、適時に内容の更新を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	注記 番号	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
売上収益	4, 5	482,732	515,952
売上原価		129,673	137,773
売上総利益		353,059	378,179
販売費及び一般管理費	6	154,348	190,373
研究開発費		115,112	132,682
その他の収益	7	1,404	17,662
その他の費用	8	1,764	1,562
営業利益		83,239	71,224
金融収益	9	3,568	9,213
金融費用	9	2,860	2,586
税引前当期利益		83,947	77,851
法人所得税	10	48,029	41,022
当期利益		35,918	36,829
当期利益の帰属			
親会社の所有者持分		40,753	56,219
非支配持分		4,835	19,390
当期利益		35,918	36,829
1株当たり当期利益(円)			
基本的1株当たり当期利益	11	102.58	141.50

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	注記 番号	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
当期利益		35,918	36,829
その他の包括利益			
純損益に振り替えられることのない項目：			
その他の包括利益を通じて公正価値で 測定する金融資産の変動	12	11,350	7,621
確定給付負債（資産）の純額の再測定	12	46	6,330
純損益にその後に振り替えられる可能性の ある項目：			
在外営業活動体の換算差額	12	7,386	5,367
キャッシュ・フロー・ヘッジ	12	23	102
その他の包括利益合計		3,987	4,178
当期包括利益合計		39,905	41,007
当期包括利益の帰属			
親会社の所有者		45,670	61,008
非支配持分		5,765	20,001
当期包括利益合計		39,905	41,007

(注) 当連結会計年度において、ロイパント社との戦略的提携に伴う企業結合により取得した資産および引き受けた負債について取得対価の配分が完了したため、前連結会計年度の連結包括利益計算書を遡及修正しております。詳細は、「連結財務諸表注記 34 企業結合及び非支配持分の取得」に記載しております。

【連結財政状態計算書】

(単位：百万円)

	注記 番号	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
資産			
非流動資産			
有形固定資産	14,17	65,748	64,966
のれん	15	173,464	176,492
無形資産	16	421,029	383,406
その他の金融資産	18,30	200,923	193,035
未収法人所得税		-	6,726
その他の非流動資産		4,173	3,516
繰延税金資産	10	27,107	20,191
非流動資産合計		892,444	848,332
流動資産			
棚卸資産	19	79,368	92,215
営業債権及びその他の債権	20,30	134,491	135,866
その他の金融資産	18,30	28,717	29,480
未収法人所得税		5,877	194
その他の流動資産		9,624	8,342
現金及び現金同等物	21	101,708	193,698
小計		359,785	459,795
売却目的で保有する資産	13	4,305	-
流動資産合計		364,090	459,795
資産合計		1,256,534	1,308,127

(単位：百万円)

	注記 番号	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
負債及び資本			
負債			
非流動負債			
社債及び借入金	22,30	25,020	263,859
その他の金融負債	17,24,30	41,306	21,404
退職給付に係る負債	27	23,870	15,069
その他の非流動負債	26	7,212	53,046
繰延税金負債	10	26,768	28,424
非流動負債合計		124,176	381,802
流動負債			
借入金	22,30	272,960	9,960
営業債務及びその他の債務	23,30	62,251	64,638
その他の金融負債	17,24,30	13,906	23,341
未払法人所得税		22,637	24,511
引当金	25	84,644	99,851
その他の流動負債	26	40,100	55,846
流動負債合計		496,498	278,147
負債合計		620,674	659,949
資本			
資本金	29	22,400	22,400
資本剰余金	29	17,837	15,855
自己株式	29	677	679
利益剰余金	29	457,330	508,677
その他の資本の構成要素	29	35,780	34,317
親会社の所有者に帰属する持分合計		532,670	580,570
非支配持分		103,190	67,608
資本合計		635,860	648,178
負債及び資本合計		1,256,534	1,308,127

(注) 当連結会計年度において、ロイバント社との戦略的提携に伴う企業結合により取得した資産および引き受けた負債について取得対価の配分が完了したため、前連結会計年度の連結財政状態計算書を遡及修正しております。詳細は、「連結財務諸表注記 34 企業結合及び非支配持分の取得」に記載しております。

【連結持分変動計算書】

(単位：百万円)

	注記 番号	親会社の所有者に帰属する持分					
		資本金	資本剰余金	自己株式	利益剰余金	その他の資本の構成要素	
						その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の変動	確定給付負債(資産)の純額の再測定
2019年4月1日残高		22,400	15,861	674	431,799	32,611	-
当期利益		-	-	-	40,753	-	-
その他の包括利益	12	-	-	-	-	11,350	46
当期包括利益合計		-	-	-	40,753	11,350	46
自己株式の取得	29	-	-	3	-	-	-
配当金	29	-	-	-	13,111	-	-
子会社の取得		-	-	-	-	-	-
非支配持分との取引		-	1,976	-	-	-	-
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替		-	-	-	2,111	2,157	46
所有者との取引額等合計		-	1,976	3	15,222	2,157	46
2020年3月31日残高		22,400	17,837	677	457,330	46,118	-
当期利益		-	-	-	56,219	-	-
その他の包括利益	12	-	-	-	-	7,621	6,330
当期包括利益合計		-	-	-	56,219	7,621	6,330
自己株式の取得	29	-	-	2	-	-	-
配当金	29	-	-	-	11,124	-	-
非支配持分との取引		-	1,982	-	-	-	-
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替		-	-	-	6,252	78	6,330
その他の増減		-	-	-	-	-	-
所有者との取引額等合計		-	1,982	2	4,872	78	6,330
2021年3月31日残高		22,400	15,855	679	508,677	38,575	-

(単位：百万円)

	注記 番号	親会社の所有者に帰属する持分			合計	非支配持分	資本合計
		その他の資本の構成要素					
		在外営業活動体 の換算差額	キャッシュ・フ ロー・ヘッジ	合計			
2019年4月1日残高		3,853	6	28,752	498,138	-	498,138
当期利益		-	-	-	40,753	4,835	35,918
その他の包括利益	12	6,456	23	4,917	4,917	930	3,987
当期包括利益合計		6,456	23	4,917	45,670	5,765	39,905
自己株式の取得	29	-	-	-	3	-	3
配当金	29	-	-	-	13,111	-	13,111
子会社の取得		-	-	-	-	111,568	111,568
非支配持分との取引		-	-	-	1,976	2,613	637
その他の資本の構成要素 から利益剰余金への振替		-	-	2,111	-	-	-
所有者との取引額等合計		-	-	2,111	11,138	108,955	97,817
2020年3月31日残高		10,309	29	35,780	532,670	103,190	635,860
当期利益		-	-	-	56,219	19,390	36,829
その他の包括利益	12	5,978	102	4,789	4,789	611	4,178
当期包括利益合計		5,978	102	4,789	61,008	20,001	41,007
自己株式の取得	29	-	-	-	2	-	2
配当金	29	-	-	-	11,124	-	11,124
非支配持分との取引		-	-	-	1,982	15,630	17,612
その他の資本の構成要素 から利益剰余金への振替		-	-	6,252	-	-	-
その他の増減		-	-	-	-	49	49
所有者との取引額等合計		-	-	6,252	13,108	15,581	28,689
2021年3月31日残高		4,331	73	34,317	580,570	67,608	648,178

(注) 当連結会計年度において、ロイバント社との戦略的提携に伴う企業結合により取得した資産および引き受けた負債について取得対価の配分が完了したため、前連結会計年度の連結持分変動計算書を遡及修正しております。詳細は、「連結財務諸表注記 34 企業結合及び非支配持分の取得」に記載しております。

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	注記 番号	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー			
当期利益		35,918	36,829
減価償却費及び償却費		17,365	22,673
減損損失		35,196	35,720
条件付対価公正価値の変動額		48,474	22,463
有形固定資産売却損益(は益)		77	16,731
受取利息及び配当金		3,564	1,153
支払利息		699	2,436
法人所得税		48,029	41,022
営業債権及びその他の債権の増減額 (は増加)		16,374	185
棚卸資産の増減額(は増加)		14,354	10,039
営業債務及びその他の債務の増減額 (は減少)		15,241	320
前受収益の増減額(は減少)		-	51,067
その他の金融負債の増減額(は減少)		912	12,001
退職給付に係る負債の増減額 (は減少)		338	288
引当金の増減額(は減少)		5,703	13,145
その他		4,601	7,042
小計		69,753	171,702
利息の受取額		2,686	221
配当金の受取額		1,123	942
利息の支払額		1,526	2,229
法人所得税の支払額		25,908	35,035
営業活動によるキャッシュ・フロー		46,128	135,601
投資活動によるキャッシュ・フロー			
有形固定資産の取得による支出		7,722	6,048
有形固定資産の売却による収入		769	21,520
無形資産の取得による支出		5,629	4,758
投資の取得による支出		112,494	9,366
投資の売却及び償還による収入		1,623	8,141
子会社の支配獲得による支出		205,774	-
短期貸付金の純増減額(は増加)		16,520	839
その他		23	225
投資活動によるキャッシュ・フロー		312,684	8,875
財務活動によるキャッシュ・フロー			
短期借入金の純増減額(は減少)	22	270,000	265,000
長期借入れによる収入	22	-	125,000
長期借入金の返済による支出	22	19,623	2,960
社債の発行による収入	22	-	118,927
リース負債の返済による支出	22	4,837	4,727
配当金の支払額		13,106	11,120
非支配持分からの子会社持分取得による支出		1,350	19,300
その他		3	1,965
財務活動によるキャッシュ・フロー		231,081	57,215
現金及び現金同等物の増減額(は減少)		35,475	87,261
現金及び現金同等物の期首残高	21	137,296	101,708
現金及び現金同等物に係る換算差額		113	4,729
現金及び現金同等物の期末残高	21	101,708	193,698

【連結財務諸表注記】

1. 報告企業

大日本住友製薬株式会社（以下「当社」）は日本に所在する企業であります。当社の連結財務諸表は2021年3月31日を期末日とし、当社及び子会社（以下「当社グループ」）並びに関連会社に対する持分により構成されます。当社グループは、医薬品事業を行っており、事業の内容は、事業セグメント（注記4）に記載しております。当社の登記している本社及び主要な事業所の住所は、ホームページ（<https://www.ds-pharma.co.jp/>）で開示しております。

2. 作成の基礎

(1) 連結財務諸表がIFRSに準拠している旨

当社グループの連結財務諸表は、連結財務諸表規則第1条の2に掲げる「指定国際会計基準特定会社」の要件をすべて満たすことから、連結財務諸表規則第93条の規定により、IFRSに準拠して作成しております。

なお、当社グループの連結財務諸表は、2021年6月24日開催の取締役会において承認されております。

(2) 測定の基礎

連結財務諸表は、重要な会計方針（注記3）に記載している金融商品等を除き、取得原価を基礎として作成しております。

(3) 機能通貨及び表示通貨

当社グループの連結財務諸表は当社の機能通貨である日本円を表示通貨としており、百万円未満の端数を四捨五入して表示しております。

(4) 重要な会計上の見積り、判断及び仮定

連結財務諸表の作成において、経営者は、会計方針の適用並びに資産、負債、収益及び費用の報告額に影響を及ぼす見積り、判断及び仮定の設定を行っております。しかし、これらの見積り及び仮定に関する不確実性により、翌連結会計年度において資産又は負債の帳簿価額に重要な修正が求められる結果となる可能性があります。

主な会計上の見積り、判断及び仮定は、以下のとおりであります。

- ・ のれん及び無形資産（注記15,16）
- ・ その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産（注記30）
- ・ 引当金（注記25）
- ・ 条件付対価の公正価値（注記30）

(5) 表示方法の変更

（連結キャッシュ・フロー計算書）

前連結会計年度において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めていた「有形固定資産売却損益（は益）」および「その他の金融負債の増減額（は減少）」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に表示していた5,436百万円は、「有形固定資産売却損益（は益）」77百万円、「その他の金融負債の増減額（は減少）」912百万円、「その他」4,601百万円として組み替えております。

(6) 未適用の公表済み新基準及び解釈指針

連結財務諸表の承認日までに公表されている基準書及び解釈指針の新設又は改訂のうち、当社グループが早期適用していない主なものは、以下のとおりであります。これらの適用による当社グループの連結財務諸表への影響は調査中であり、現時点では見積ることができません。

基準書、解釈指針の新設又は改訂		強制適用時期 (以降開始年度)	当社グループ 適用時期	新設又は改訂の概要
IFRS第7号	金融商品：開示	2021年1月1日	2022年3月期	金利指標改革・フェーズ2 (既存の金利指標を代替的な金利指標に置替える時に生じる財務報告への影響に関する改定)
IFRS第9号	金融商品			

(7) 新基準の早期適用

早期適用した基準書等はありません。

3. 重要な会計方針

当社グループが適用する重要な会計方針は、連結財務諸表に記載されているすべての期間において継続的に適用しております。

(1) 連結の基礎

子会社

子会社とは、当社グループにより支配されている企業をいいます。

支配とは、投資先に対するパワーを有し、投資先への関与により生じるリターンの変動にさらされ、かつ投資先に対するパワーを通じてリターンに影響を及ぼす能力を有している場合をいいます。

当社グループは、子会社に対する支配を獲得した日から当該子会社を連結し、支配を喪失した日に連結の範囲から除外しております。また、決算日が異なる子会社の財務諸表は、連結決算日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表を使用しております。

連結財務諸表の作成にあたり、当社グループ間の債権債務残高及び取引高並びに当社グループ内取引により生じた未実現損益は相殺消去しております。

支配の喪失を伴わない子会社に対する持分の変動があった場合には、資本取引として会計処理しております。非支配持分の調整額と対価の公正価値との差額は、親会社の所有者に帰属する持分として資本に直接認識しております。支配を喪失した場合には、支配の喪失から生じた利得または損失は純損益として認識しております。

関連会社

関連会社とは、当社グループがその財務及び経営方針に対して重要な影響力を有しているものの、支配はしていない企業をいいます。重要な影響力とは、投資先の財務及び営業の方針に対する支配はないが、それらの方針の決定に関与する力をいいます。

当社グループは、関連会社への投資について、持分法を用いて会計処理しております。

なお、持分法適用会社の決算日は、すべて当社と同じ決算日であります。

企業結合

企業結合は、取得法を用いて会計処理しております。

被取得企業における識別可能な資産及び負債は取得日の公正価値で測定しております。

なお、移転された対価には、条件付対価契約から発生したすべての資産又は負債の公正価値が含まれます。

のれんは、移転した対価と被取得企業の非支配持分の金額の合計が、取得時における識別可能な資産及び負債の正味価値を上回った場合に、その超過額として測定しております。また、下回る場合には、直ちに純損益として認識しております。

取得関連費用は発生時に純損益で認識しております。

共同支配

共同支配とは、取決めに対する契約上合意された支配の共有をいい、関連性のある活動に関する意思決定が、支配を共有している当事者の全員一致の合意を必要とする場合にのみ存在します。共同支配の取決めへの投資は、当該取決めの当事者の権利及び義務に応じて、ジョイント・オペレーション（共同支配事業）がジョイント・ベンチャー（共同支配企業）に分類されます。ジョイント・オペレーションとは、取決めに対する共同支配を有する当事者が当該取決めに関する資産に対する権利及び負債に対する義務を有している場合の共同支配の取決めをいい、ジョイント・ベンチャーとは、取決めに対して共同支配を有する当事者が当該取決めの純資産に対する権利を有している場合の共同支配の取決めをいいます。

ジョイント・オペレーションに対する持分を有する場合は、当該ジョイント・オペレーションの資産、負債、収益及び費用の持分をそれぞれの類似する科目に合算しております。

(2) 外貨換算

外貨建取引

外貨建取引は、取引日の為替レート又はそれに近似するレートで機能通貨に換算しております。

決算日における外貨建貨幣性項目は決算日の為替レートで、公正価値で測定される外貨建非貨幣性項目は当該公正価値の測定日の為替レートで、それぞれ機能通貨に換算しております。

当該換算及び決済により生じる換算差額は、純損益として認識しております。ただし、その他の包括利益を通じて測定する金融資産及びヘッジが有効な範囲におけるキャッシュ・フロー・ヘッジから生じる換算差額については、その他の包括利益として認識しております。

在外営業活動体

在外営業活動体の資産及び負債（取得により発生したのれん及び公正価値の調整を含む）は期末日の為替レートで、収益及び費用は、為替レートに著しい変動がある場合を除き、期中の平均為替レートで日本円に換算しております。

在外営業活動体の財務諸表の換算から生じる為替換算差額は、その他の包括利益として認識し、その累積額は、連結財政状態計算書において、その他の資本の構成要素に計上しております。

在外営業活動体が処分された場合には、在外営業活動体の累積換算差額を処分した期の純損益として振り替えております。

(3) 収益

当社グループは、下記の5ステップアプローチに基づき、収益を認識しております。

ステップ1：顧客との契約の識別

ステップ2：契約における履行義務の識別

ステップ3：取引価格の算定

ステップ4：履行義務への取引価格の配分

ステップ5：企業の履行義務の充足による収益の認識

当社グループは、医療用医薬品等の製商品の販売による収益（製商品の販売）並びに技術導出契約等の締結に伴う契約一時金、マイルストーン収入及びロイヤルティ収入による収益（知的財産権収入）を主な収益としており、それぞれの収益認識基準は、以下のとおりであります。

製商品の販売

製商品の販売は、製商品を引渡した時点において顧客が当該製商品に対する支配を獲得することから、履行義務が充足されると判断しており、当該製商品の引渡時点で収益を認識しております。また、収益は、顧客との契約において約束された対価から、返品、値引き及び割戻し等を控除した収益に重大な戻入れが生じない可能性が非常に高い範囲内の金額で算定しております。

知的財産権収入

契約一時金は、技術導出契約等を締結し、開発権及び販売権等を第三者に付与した時点で収益を認識しております。

マイルストーン収入は、契約上定められたマイルストーンが達成された時点で収益を認識しております。

ロイヤルティ収入は、契約相手先の売上収益等を基礎に算定された技術導出契約等における対価であり、契約相手先の売上収益等の発生と履行義務の充足のいずれか遅い時点で収益を認識しております。

なお、当社グループは、履行義務の充足により売上収益を認識した後、通常、1カ月～3カ月で売上債権を回収しております。また、顧客との契約に重大な金融要素は含まれておりません。

(4) 共同開発及び共同販売

当社グループは、当社グループの開発品及び製品について、提携企業との間で共同開発及び共同販売契約を締結しております。

この場合、当社グループは医薬品販売（物品の販売）による収益を売上収益として計上し、関連する当社グループの費用を売上原価、販売費及び一般管理費、研究開発費として計上し、総額で表示しております。また、利益の折半のために当社グループが提携企業に支払う費用は、その性質に応じて、売上原価、販売費及び一般管理費、研究開発費に計上します。

なお、これらの契約のうち、主要なものに関しては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 連結財務諸表注記 35 . 共同開発及び共同販売」に詳細を記載しております。

(5) 法人所得税

法人所得税は、当期法人所得税と繰延法人所得税の合計として表示しており、企業結合に関連するもの及び直接資本の部又はその他の包括利益で認識される項目に係る税金を除き、純損益で認識しております。

当期法人所得税は、期末日時点において施行又は実質的に施行されている法定税率及び税法を適用して、税務当局に納付又は税務当局から還付されると予想される金額で算定しております。

繰延税金資産及び負債は、期末日における資産及び負債の連結財政状態計算書上の帳簿価額と税務基準額との間に生じた一時差異、未使用の繰越欠損金及び繰越税額控除について認識しております。ただし、以下の一時差異に対しては、繰延税金資産又は負債を認識しておりません。

- ・ のれんの当初認識から生じる場合
- ・ 企業結合でない取引で、取引時に会計上の純損益にも課税所得（欠損金）にも影響を与えない取引における資産又は負債の当初認識から生じる場合
- ・ 子会社及び関連会社に対する投資に係る将来減算一時差異については、予測し得る期間内に当該一時差異が解消する可能性が高くない場合又は当該一時差異の使用対象となる課税所得が獲得される可能性が高くない場合
- ・ 子会社及び関連会社に対する投資に係る将来加算一時差異については、一時差異を解消する時期をコントロールでき、予測可能な期間内に一時差異が解消しない可能性が高い場合

繰延税金資産は、将来減算一時差異、未使用の繰越欠損金及び繰越税額控除について、将来それらを使用できる課税所得が獲得される可能性が高い範囲内で認識しております。また、繰延税金負債は、原則としてすべての将来加算一時差異について認識しております。

繰延税金資産及び負債は、期末日における法定税率又は実質的法定税率及び税法に基づいて、資産が実現する期又は負債が決済される期に適用されると予測される税率を用いて算定しております。

繰延税金資産及び負債は、当期税金資産と当期税金負債を相殺する法律上強制力のある権利を有しており、かつ同一の税務当局によって同一の納税主体に課されている場合に相殺しております。

(6) 1株当たり利益

基本的1株当たり当期利益は、親会社の普通株主に帰属する当期利益を、その期間の自己株式を控除した発行済普通株式の加重平均株式数で除して計算しております。

また、逆希薄化効果を有する潜在株式が存在する場合、当該潜在株式は希薄化後1株当たり当期利益の計算に含めておりません。

(7) 有形固定資産

有形固定資産の認識後の測定方法として、原価モデルを採用しております。有形固定資産は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した価額で表示しております。

取得原価には、資産の取得に直接関連する費用、解体、除去及び原状回復費用並びに資産計上の要件を満たす借入費用が含まれております。

土地及び建設仮勘定以外の有形固定資産の減価償却は、各資産の見積耐用年数にわたり、定額法に基づいて計上しております。これらの資産の減価償却は、使用可能となった時点から開始しております。

主な資産の種類別の耐用年数は、以下のとおりであります。

- ・ 建物及び構築物 3～60年
- ・ 機械装置及び運搬具 2～17年
- ・ 工具、器具及び備品 2～20年
- ・ 使用権資産 見積耐用年数又はリース期間のいずれか短い年数

なお、減価償却方法、残存価額及び見積耐用年数は、期末日ごとに見直しを行い、必要に応じて改定しております。

(8) リース

当社グループは、契約が特定された資産の使用を支配する権利を一定期間にわたり対価と交換に移転しているか否かに基づき、契約がリースであるか、又はリースを含んでいるかを判定しております。

契約がリース又はリースを含んでいると判定した場合、リース開始日において、使用権資産及びリース負債を認識しております。

使用権資産

使用権資産は取得原価で当初測定しており、取得原価はリース開始日時点におけるリース負債の当初測定額に取得時直接コスト等を調整した金額で認識しております。

使用権資産の認識後の測定方法として、原価モデルを採用しております。当初認識後は、原資産のリース期間又は見積耐用年数のいずれか短い期間にわたり、定額法に基づいて減価償却を行っております。

また、連結財政状態計算書において、使用権資産は取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した価額で、有形固定資産に含めて表示しております。

リース負債

リース負債は、リース開始日現在で支払われていないリース料の割引現在価値で当初認識しております。通常、当社グループは、追加借入利率を割引率として用いております。当初認識後は、リース負債に係る金利及び支払われたリース料を反映するよう、実効金利法に基づき帳簿価額を増減しております。また、連結財政状態計算書において、リース負債はその他の金融負債に含めて表示しております。

リース料は、リース負債残高に対して一定の利率となるよう金融費用とリース負債の返済部分とに配分しております。金融費用は、連結損益計算書において、使用権資産の減価償却費と区別して表示しております。

なお、短期リース及び少額資産のリースについて、当社グループは基本的に使用権資産及びリース負債として認識せず、リース料総額をリース期間にわたり、定額法に基づいて純損益に計上しております。

(9) のれん

当初認識時におけるのれんの測定については、「(1) 連結の基礎 企業結合」に記載しております。

のれんは、当初認識額から減損損失累計額を控除した価額で表示しております。

のれんは、償却を行わず、資金生成単位又は資金生成単位グループに配分し、年次又は減損の兆候がある場合にはその都度、減損テストを実施しております。なお、のれんの減損損失は純損益として認識され、その後の戻入は行っておりません。

(10) 無形資産

無形資産は、のれん以外の物理的実体のない非貨幣性資産であり、個別に取得した、又は企業結合により取得した特許権、技術、販売権及び仕掛中の研究開発等により構成されております。

個別に取得した無形資産は、当初認識時の取得原価で測定しており、企業結合により取得した無形資産は、取得日の公正価値で測定しております。

無形資産の認識後の測定方法として、原価モデルを採用しております。無形資産は、取得原価から償却累計額及び減損損失累計額を控除した価額で表示しております。

内部発生の研究費用は発生時に費用として認識しております。内部発生の開発費用は、資産として認識するための基準がすべて満たされた場合に限り無形資産として認識しておりますが、臨床試験の費用等、製造販売承認の取得までに発生する内部発生の開発費は、期間の長さや開発に関連する不確実性の要素を伴い資産計上基準を満たさないと考えられるため、発生時に費用として認識しております。

内部利用を目的としたソフトウェアの取得及び開発費用は、将来の経済的便益の流入が期待される場合には無形資産に計上しております。

仕掛中の研究開発として計上された無形資産以外の無形資産は、各資産の見積耐用年数にわたり、定額法に基づいて計上しております。これらの資産の償却は、使用可能となった時点から開始しております。

主な無形資産の種類別の耐用年数は、以下のとおりであります。

- ・ 製品に係る無形資産 3～20年
- ・ ソフトウェア 3～5年

なお、償却方法、残存価額及び見積耐用年数は、期末日ごとに見直しを行い、必要に応じて改定しております。

また、仕掛中の研究開発として計上された無形資産は、未だ使用可能な状態にないため、償却をせず、年次又は減損の兆候がある場合にはその都度、減損テストを実施しております。

仕掛中の研究開発は、規制当局の販売承認が得られた時点で特許権、販売権等の項目に振り替えており、当該資産が使用可能となった時点から償却を開始しております。

(11) 非金融資産の減損

当社グループでは、棚卸資産、退職給付に係る資産及び繰延税金資産を除く、非金融資産の減損の兆候の有無を評価しております。

減損の兆候が存在する場合又は年次で減損テストが要求されている場合は、各資産の回収可能価額の算定を行っております。のれん及び耐用年数を確定できない、又は未だ使用可能ではない無形資産については、年次又は減損の兆候がある場合にはその都度、減損テストを実施しております。

資産又は資金生成単位の回収可能価額は、処分コスト控除後の公正価値と使用価値とのうち、いずれが高い方の金額で測定しております。使用価値の算定において、見積将来キャッシュ・フローは、貨幣の時間的価値及び当該資産に固有のリスクを反映した税引前の割引率を用いて、現在価値に割り引いております。資産又は資金生成単位の回収可能価額が帳簿価額より低い場合にのみ、当該資産の帳簿価額をその回収可能価額まで減額し、純損益として認識しております。

資金生成単位については、他の資産又は資産グループからのキャッシュ・イン・フローから概ね独立したキャッシュ・イン・フローを生成するものとして識別する資産グループの最小単位としております。

資金生成単位に関連して認識した減損損失は、まずその単位に配分されたのれんの帳簿価額を減額するように配分し、次に資金生成単位内のその他の資産の帳簿価額を比例的に減額します。

のれんに関連する減損損失は戻入れておりません。

のれん以外の資産については、過去に認識した減損損失は、期末日ごとに、過年度に計上した減損損失の戻入の兆候の有無を評価しております。回収可能価額の決定に使用した見積りが増減した場合、減損損失を戻入しております。

減損損失は、過年度において減損損失を認識しなかった場合の帳簿価額から必要な減価償却費及び償却費を控除した後の帳簿価額を超えない金額を上限として戻入しております。

(12) 金融商品

金融資産

() 当初認識及び測定

当社グループは、金融資産を取引日基準にて当初認識し、当初認識時に償却原価で測定する金融資産と公正価値で測定する金融資産に分類しております。金融資産は、次の条件がともに満たされる場合は、償却原価で測定する金融資産に分類し、それ以外は、公正価値で測定する金融資産に分類しております。

- ・ 企業のビジネスモデルの目的が契約上のキャッシュ・フローを回収するために金融資産を保有することであること
- ・ 金融資産の契約条件が、特定された日に元本及び利息の支払いのみによるキャッシュ・フローを生じさせること

() 事後測定

金融資産の当初認識後の測定は、以下のとおりであります。

(a) 償却原価で測定する金融資産

償却原価で測定する金融資産は、実効金利法により測定しております。

(b) 純損益を通じて公正価値で測定する金融資産

純損益を通じて公正価値で測定する金融資産は、公正価値で測定し、その事後的な変動を純損益として認識しております。

(c) その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産

公正価値で測定する金融資産のうち、売買目的ではない資本性金融商品への投資は、当初認識時に、その公正価値の事後的な変動をその他の包括利益に表示するという取消不能な選択を行うことが認められており、当社グループでは金融商品ごとに当該指定を行っております。

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産は、公正価値で測定し、その事後的な変動をその他の包括利益として認識しております。その他の包括利益として認識した金額は、認識を中止した場合、もしくは公正価値が著しく減少した場合にその累計額を利益剰余金に振り替えており、純損益には振り替えておりません。なお、配当については純損益として認識しております。

() 認識の中止

金融資産は、以下のいずれかの要件を満たす場合に認識を中止しております。

- ・ 当該金融資産からのキャッシュ・フローに対する契約上の権利が消滅した場合
- ・ 当該資産を譲渡し、当該資産の所有に係るリスクと経済価値のほとんどすべてを移転している場合

() 減損

償却原価で測定する金融資産については、将来発生すると見込まれる予想信用損失に対して貸倒引当金を認識し、その金額を控除して表示しております。当社グループは当該金融資産について、当初認識以降、信用リスクが著しく増加しているか否かを評価しており、この評価には、期日経過情報のほか、当社グループが合理的に利用可能かつ裏付け可能な情報を考慮しております。

当初認識以降、信用リスクが著しく増加していると評価された償却原価で測定する金融資産については、個々に全期間の予想信用損失を見積っております。そうでないものについては、報告日後12カ月の予想信用損失を見積っております。

また、償却原価で測定する金融資産のうち、営業債権等については、類似する債権ごとに全期間の予想信用損失を見積っております。

金融負債

() 当初認識及び測定

当社グループは、金融負債については、契約の当事者となった時点で当初認識し、以下のとおり分類しております。

(a) 純損益を通じて公正価値で測定する金融負債

純損益を通じて公正価値で測定することを指定した金融負債

(b) 償却原価で測定する金融負債

純損益を通じて公正価値で測定する金融負債以外のもの

金融負債は、当初認識時点において公正価値で測定しておりますが、償却原価で測定する金融負債については、直接取引費用を控除した金額で測定しております。

() 事後測定

金融負債の当初認識後の測定は、以下のとおりであります。

(a) 純損益を通じて公正価値で測定する金融負債

純損益を通じて公正価値で測定する金融負債は、公正価値で測定し、その事後的な変動を純損益として認識しております。

(b) 償却原価で測定する金融負債

償却原価で測定する金融負債は、実効金利法により測定しております。

() 認識の中止

金融負債は、契約中に特定された債務が履行、免責、取消又は失効となった時にのみ、金融負債の認識の中止を行っております。

デリバティブ

当社グループは、外貨のリスク・エクスポージャーをヘッジする目的でデリバティブを保有しております。これらに用いられるデリバティブは為替予約であります。なお、当社グループでは、投機を目的としたデリバティブは保有しておりません。デリバティブは公正価値で当初認識し、関連する取引費用は発生時の費用として認識しております。ヘッジ会計が適用されないデリバティブについては、当初認識後は公正価値で測定し、公正価値の変動額は純損益に認識しております。

ヘッジ会計

一部のデリバティブをキャッシュ・フロー・ヘッジのヘッジ手段として指定し、かつその要件を満たすデリバティブの公正価値の変動の有効部分はその他の包括利益で認識し、その他の包括利益累計額に累積しております。

当初のヘッジ指定時点において、当社グループは、リスク管理目的、ヘッジ取引を実行する際の戦略及びヘッジ関係の有効性の評価方法を含む、ヘッジ手段とヘッジ対象の関係を正式に文書化しております。当社グループは、ヘッジ手段がヘッジ対象期間において関連するヘッジ対象の公正価値やキャッシュ・フローの変動に対して相殺効果を有すると予想することが可能であるか否かについて、ヘッジ関係の開始時とともに、その後も継続的に評価を実施しております。

その他の資本の構成要素は、ヘッジ対象のキャッシュ・フローが純損益に影響を与えるのと同じ期間に、ヘッジ対象に関連する連結損益計算書の項目で純損益に振り替えております。ヘッジ対象である予定取引が非金融資産又は非金融負債の認識を生じさせるものである場合には、以前にその他の資本の構成要素で認識したその他の包括利益累計額を振り替え、非金融資産又は非金融負債の当初認識時の取得原価の測定に含めております。また、デリバティブの公正価値の変動のうち、非有効部分は即時に純損益で認識しております。

当社グループがヘッジ指定を取消した場合、ヘッジ手段が失効、売却、終結又は行使された場合並びにヘッジがヘッジの有効性の要件を満たさなくなった場合には、ヘッジ会計を中止しております。

(13) 棚卸資産

棚卸資産は主として、商品及び製品、仕掛品、原材料及び貯蔵品から構成されております。

棚卸資産は、取得原価と正味実現可能価額のうち、いずれか低い金額で測定しております。取得原価は総平均法に基づいて算定しており、購入原価、加工費及びその他関連する製造費用が含まれております。製品及び仕掛品については、予定操業度に基づく製造間接費の適切な配賦額を含めております。正味実現可能価額は、通常の事業の過程における見積売価から、完成までに要する見積原価及び販売に要する見積費用を控除した額であります。

(14) 現金及び現金同等物

現金及び現金同等物は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3カ月以内に償還期限の到来する短期投資から構成されております。

(15) 従業員給付

退職後給付

当社グループは、従業員の退職後給付制度として、確定給付制度及び確定拠出制度を採用しております。

() 確定給付制度

確定給付制度の退職給付に係る債務の現在価値及び関連する当期勤務費用並びに過去勤務費用は、予測単位積増方式を用いて制度ごとに算定しております。割引率は、将来の毎年度の給付支払見込日までの期間をもとに割引期間を設定し、割引期間に対応した期末日の優良社債の市場利回りを参照して決定しております。確定給付制度に係る負債又は資産は、確定給付債務の現在価値から、制度資産の公正価値を控除して算定しております。勤務費用及び確定給付負債又は資産の純額に係る利息純額は、純損益の退職給付費用として認識しております。確定給付負債又は資産の純額の再測定は、発生した期間においてその他の包括利益に計上しており、ただちに利益剰余金に振り替えております。

() 確定拠出制度

確定拠出制度の退職後給付に係る費用は、従業員が役務を提供した期間において、純損益の退職給付費用として認識しております。

その他の長期従業員給付

退職後給付以外の長期従業員給付に対する債務は、従業員が当連結会計年度までに提供した役務の対価として獲得した将来給付額を現在価値に割引くことによって算定しております。

短期従業員給付

短期従業員給付については、割引計算は行わず、従業員から関連する役務が提供された時点において費用として計上しております。

なお、賞与については、従業員から過去に提供された労働の結果として支払うべき現在の法的又は推定的債務を負っており、負債として認識しております。

(16) 株式報酬

当社グループは、一部の子会社において持分決済型の株式報酬制度を導入しております。

持分決済型の株式報酬は、受領するサービスを付与日における資本性金融資産の公正価値で測定し、付与日から権利確定期間にわたり費用として認識し、同額を資本の増加として認識しております。

(17) 引当金

引当金は、過去の事象の結果として、現在の法的又は推定的債務を有し、その債務を決済するために経済的便益を有する資源の流出の可能性が高く、その資源の流出の金額について信頼できる見積りができる場合に認識しております。

貨幣の時間的価値の影響が重要な場合には、当該引当金は負債の決済に必要と予想される支出額の現在価値で測定しております。なお、現在価値は、原則として貨幣の時間的価値とその債務に特有のリスクを反映した税引前の割引率を用いて計算しております。

(18) 政府補助金

政府補助金は、当社グループが補助金を受領し、その補助金に付帯する諸条件を遵守することが合理的に確かである場合に、公正価値で測定し、認識しております。

資産に関する補助金は、当該補助金の金額を資産の取得原価から控除し、償却資産の耐用年数にわたって、減価償却費の減額として純損益に認識しております。また、収益に関する補助金は、補助金で補償することを意図している関連コストを費用として認識する期間にわたって、定期的に純損益に認識しております。

(19) 株主資本

普通株式

当社が発行した普通株式は、発行価額を資本金及び資本剰余金に計上し、直接発行費用は、税効果控除後の金額を資本剰余金から控除しております。

自己株式

自己株式を取得した場合は、取得原価で認識し、資本から控除して表示しております。また、その取得に直接起因する取引費用は、資本剰余金から控除しております。自己株式を売却した場合には、帳簿価額と売却価額の差額を資本剰余金に計上しております。

4. 事業セグメント

当社グループでは、会社の経常的な収益性を示す利益指標として、「コア営業利益」を設定し、これを当社独自の業績管理指標として採用しております。

「コア営業利益」は、営業利益から当社グループが定める非経常的な要因による損益（以下「非経常項目」）を除外したものとなります。非経常項目として除かれる主なものは、減損損失、事業構造改善費用、企業買収に係る条件付対価公正価値の変動額等です。

(1) 報告セグメント

当社グループは、主として医療用医薬品の製造、仕入及び販売を行っており、日本、北米、中国等マーケットごとに医薬品事業の業績管理を行っているため、日本、北米、中国、海外その他の4つを報告セグメントとしております。

なお、当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成要素のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

(2) セグメント収益及び業績

当社グループの報告セグメントごとの売上収益、利益又は損失及びその他の項目は、以下のとおりであります。

報告セグメントの会計方針は、重要な会計方針（注記3）における記載と同じであります。

なお、当社グループでは、各セグメントの経常的な収益性を示す利益指標として、「コアセグメント利益」を設定し、当社独自のセグメント業績指標として採用しております。

「コアセグメント利益」は、「コア営業利益」から、グローバルに管理しているため各セグメントに配分できない研究開発費、事業譲渡損益等を除外したセグメント別の利益となります。

なお、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析」における報告セグメントに含まれない「その他」の区分に係るコアセグメント利益の金額及び前連結会計年度比増減については、セグメント間取引として消去された利益を含めて記載しております。

前連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント					その他 (注)	合計
	医薬品事業						
	日本	北米	中国	海外 その他	計		
外部顧客への売上収益	139,675	262,295	28,607	14,786	445,363	37,369	482,732
セグメント間の内部売上 収益	76	-	-	-	76	53	129
合計	139,751	262,295	28,607	14,786	445,439	37,422	482,861
セグメント利益 (コアセグメント利益)	22,898	117,514	14,408	6,396	161,216	3,202	164,418
その他の項目							
減価償却費及び償却費	5,329	6,830	723	721	13,603	290	13,893
減損損失	-	35,196	-	-	35,196	-	35,196

(注) その他の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、食品素材・食品添加物及び化学製品材料、動物用医薬品等の事業を含んでおります。

当連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント					その他 (注)	合計
	医薬品事業						
	日本	北米	中国	海外 その他	計		
外部顧客への売上収益等	152,497	281,493	27,831	17,233	479,054	36,898	515,952
セグメント間の内部売上 収益	70	-	-	-	70	46	116
合計	152,567	281,493	27,831	17,233	479,124	36,944	516,068
セグメント利益 (コアセグメント利益)	24,284	116,881	13,238	8,693	163,096	3,574	166,670
その他の項目							
減価償却費及び償却費	5,710	11,363	838	910	18,821	304	19,125
減損損失	128	35,592	-	-	35,720	-	35,720

(注) その他の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、食品素材・食品添加物及び化学製品材料、動物用医薬品等の事業を含んでおります。

(3) 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容(差異調整に関する事項)

調整額に関する事項は、以下のとおりであります。

(単位:百万円)

売上収益	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
報告セグメント計	445,439	479,124
「その他」の区分の売上収益	37,422	36,944
セグメント間取引消去	129	116
連結財務諸表の売上収益	482,732	515,952

(単位：百万円)

利益	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)		当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	
	報告セグメント計	161,216	163,096	
「その他」の区分の利益	3,202	3,574		
セグメント間取引消去	19	22		
研究開発費(注)	92,607	97,082		
事業譲渡益等	157	-		
その他	5	27		
コア営業利益	71,982	69,583		
条件付対価公正価値の変動額	48,474	22,463		
減損損失	35,196	35,720		
その他の収益	1,252	17,689		
その他の費用	1,764	1,562		
その他	1,509	1,229		
連結財務諸表の営業利益	83,239	71,224		

(注) 当社グループは、研究開発費をグローバルに管理しているため、セグメントに配分していません。なお、連結損益計算書における研究開発費との差額は、コア営業利益の算定から除外される減損損失及び研究開発関連費用であります。

(単位：百万円)

その他の項目	報告セグメント計		その他		調整額		連結財務諸表計上額	
	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度
減価償却費及び償却費	13,603	18,821	290	304	3,472	3,548	17,365	22,673

(4) 売上収益の内訳

外部顧客への売上収益等の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)		当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	
	物品の販売	474,543	503,788	
知的財産権収入	3,665	7,924		
その他	4,524	4,240		
合計	482,732	515,952		

(5) 製品及びサービスごとの情報

製品及びサービスごとの外部顧客への売上収益等の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
医薬品	445,363	479,054
その他	37,369	36,898
合計	482,732	515,952

(6) 地域別情報

当社グループの地域別収益は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
日本	180,678	192,608
北米	261,630	280,437
うち、米国	256,427	275,594
その他	40,424	42,907
合計	482,732	515,952

当社グループの所在地域別に分析した非流動資産（金融資産、繰延税金資産及び退職給付に係る資産を除く）の帳簿価額の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
日本	67,263	65,979
北米	594,629	566,701
うち、米国	593,065	565,215
その他	2,522	2,426
合計	664,414	635,106

(注) 当連結会計年度において、ロイバント社との戦略的提携に伴う企業結合により取得した資産および引き受けた負債について取得対価の配分が完了したため、前連結会計年度の非流動資産の地域別内訳を遡及修正しております。詳細は、「連結財務諸表注記 34 企業結合及び非支配持分の取得」に記載しております。

(7) 主要な顧客に関する情報

売上収益が当社グループの全体の売上収益の10%以上の相手先は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	関連する報告セグメント	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
マッケソン社	北米	87,812	95,732
カーディナル社	北米	75,502	82,143
アメリソースバーゲン社	北米	65,110	71,767

5. 売上収益

(1) 収益の分解と報告セグメントの関連

当社グループは、売上収益を財又はサービスの種類別に分解しております。分解した売上収益と報告セグメントとの関連は、以下のとおりであります。

前連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント					その他 (注)	合計	うち顧客 との契約 から認識 した収益	うちその 他の源泉 から認識 した収益
	医薬品事業								
	日本	北米	中国	海外 その他	計				
製商品の販売	135,215	261,080	28,389	12,490	437,174	37,369	474,543	474,543	-
知的財産権収入	154	1,215	-	2,296	3,665	-	3,665	3,665	-
その他	4,306	-	218	-	4,524	-	4,524	4,524	-
合計	139,675	262,295	28,607	14,786	445,363	37,369	482,732	482,732	-

(注) その他の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、食品素材・食品添加物及び化学製品材料、動物用医薬品等の事業を含んでおります。

当連結会計年度（自 2020年4月1日 至 2021年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント					その他 (注1)	合計	うち顧客 との契約 から認識 した収益	うちその 他の源泉 から認識 した収益 (注2)
	医薬品事業								
	日本	北米	中国	海外 その他	計				
製商品の販売	150,255	274,015	27,596	15,024	466,890	36,898	503,788	503,788	-
知的財産権収入	791	4,924	-	2,209	7,924	-	7,924	7,924	-
その他	1,451	2,554	235	-	4,240	-	4,240	1,868	2,372
合計	152,497	281,493	27,831	17,233	479,054	36,898	515,952	513,580	2,372

(注) 1 その他の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、食品素材・食品添加物及び化学製品材料、動物用医薬品等の事業を含んでおります。

2 その他の源泉から認識した収益は、相手先が顧客とはみなされない場合の共同パートナーとの契約等から生じる売上収益です。詳細は、「連結財務諸表注記35 共同開発及び共同販売」に記載しております。

(2) 契約残高

顧客との契約から生じた契約残高は、以下のとおりです。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
顧客との契約から生じた債権		
売掛金及び受取手形	128,478	127,260
契約資産	970	1,310
契約負債	4,352	2,011

顧客との契約から生じた債権及び契約資産は、営業債権及びその他の債権に含まれており、契約負債は、その他の負債に含まれております。

契約資産は、一部の導出契約に含まれる開発マイルストーンに係る変動対価であります。当該変動対価は、対価の獲得についてその不確実性が解消され、認識する収益に重大な戻入れが生じない範囲内で収益として認識しております。

契約負債は、履行義務が充足されていない一部の導出契約に係る契約一時金の対価であります。当該対価は、導出契約における履行義務を充足した時点で収益として認識しております。

当連結会計年度において認識した収益のうち、期首現在の契約負債残高に含まれていたものは2,539百万円、前連結会計年度において認識した収益のうち、期首現在の契約負債残高に含まれていたものはありません。また、当連結会計年度及び前連結会計年度において過去の期間に充足（又は部分的に充足）した履行義務から認識した重要な収益の額はありません。

(3) 残存履行義務に配分した取引価格

当社グループにおいては、収益認識の予想期間が1年を超える取引がないため、残存履行義務に関する情報の記載を省略しております。また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(4) 顧客との契約の獲得又は履行のためのコストから認識した資産

当社グループにおいては、資産として認識しなければならない契約を獲得するための増分コスト及び履行にかかるコストはありません。

6. 販売費及び一般管理費

販売費及び一般管理費の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
給料及び賞与	65,753	77,437
退職給付費用	5,160	5,125
広告宣伝費及び販売促進費	37,745	37,362
減価償却費及び償却費	11,272	16,707
減損損失	12,102	151
条件付対価公正価値の変動額(注)	48,474	22,463
その他	70,790	76,054
合計	154,348	190,373

(注) 条件付対価は、企業買収時に取り決められた特定のマイルストーン達成に応じて発生する旧株主に対する将来の支出であります。詳細は、金融商品(注記30)に記載しております。

7. その他の収益

その他の収益の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
有形固定資産売却益(注)	317	16,925
その他	1,087	737
合計	1,404	17,662

(注) 当連結会計年度における有形固定資産売却益には、旧茨木工場の売却益16,725百万円が含まれております。

8. その他の費用

その他の費用の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
寄付金	772	1,072
その他	992	490
合計	1,764	1,562

9. 金融収益及び金融費用

(1) 金融収益

金融収益の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
受取利息		
償却原価で測定する金融資産	2,441	211
受取配当金		
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	1,123	942
為替差益(純額)	-	8,037
その他	4	23
合計	3,568	9,213

(2) 金融費用

金融費用の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
支払利息		
償却原価で測定する金融負債	699	2,436
為替差損(純額)	1,134	-
その他	1,027	150
合計	2,860	2,586

10. 繰延税金及び法人所得税

(1) 繰延税金

連結財政状態計算書に計上されている繰延税金資産及び繰延税金負債

連結財政状態計算書に計上されている繰延税金資産及び繰延税金負債は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
繰延税金資産	27,107	20,191
繰延税金負債	26,768	28,424
純額	339	8,233

当連結会計年度において、ロイバント社との戦略的提携に伴う企業結合により取得した資産および引き受けた負債について取得対価の配分が完了したため、前連結会計年度の繰延税金負債の残高を遡及修正しております。詳細は、「連結財務諸表注記 34 企業結合及び非支配持分の取得」に記載しております。

繰延税金資産及び繰延税金負債の内訳及び増減内容

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別内訳及び増減内容は、以下のとおりであります。

(ア) 前連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

(単位：百万円)

	2019年4月1日 残高	純損益を 通じて認識	その他の 包括利益 において認識	その他 (注)	2020年3月31日 残高
委託研究費	12,206	2,860	-	-	9,346
棚卸資産	17,099	5,574	-	17	22,656
有形固定資産	1,931	74	-	25	1,832
無形資産	16,863	5,014	-	37,166	49,015
その他の金融資産	13,059	33	4,974	283	17,783
未払費用及び引当金等	12,760	6,503	-	195	6,062
退職後給付	8,079	220	22	3	8,274
繰越欠損金	18,598	12,271	-	10,396	16,723
税額控除	7,022	6,673	-	145	204
在外子会社の未分配利益	624	286	-	-	910
その他	3,570	470	-	150	2,950
合計	50,719	18,362	4,996	27,022	339

(注) その他は、主に在外営業活動体の換算差額、及び企業結合による影響が含まれております。

(イ) 当連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

(単位:百万円)

	2020年4月1日 残高	純損益を 通じて認識	その他の 包括利益 において認識	その他 (注)	2021年3月31日 残高
委託研究費	9,346	3,781	-	-	5,565
棚卸資産	22,656	51	-	31	22,676
有形固定資産	1,832	135	-	67	2,034
無形資産	49,015	7,578	-	518	41,955
その他の金融資産	17,783	1	3,122	3,402	18,064
未払費用及び引当金等	6,062	1,306	-	4	4,760
退職後給付	8,274	45	2,776	4	5,539
繰越欠損金	16,723	5,765	-	41	10,999
税額控除	204	-	-	4	208
在外子会社の未分配利益	910	70	-	-	980
その他	2,950	1,949	-	16	985
合計	339	5,063	346	3,855	8,233

(注) その他は、主に在外営業活動体の換算差額、及びその他の包括利益を通じて測定する金融資産を期中に売却したことによる影響が含まれています。

未認識の繰延税金資産

繰延税金資産を認識していない繰越欠損金、繰越税額控除及び将来減算一時差異は、以下のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
繰越欠損金	20,617	36,407
繰越税額控除	11,968	18,512
将来減算一時差異	17,457	20,430

未認識の繰延税金資産と繰越期限

(ア) 繰延税金資産を認識していない繰越欠損金の金額と繰越期限

繰延税金資産を認識していない繰越欠損金の金額と繰越期限は、以下のとおりであります。

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
1年目	-	-
2年目	-	-
3年目	-	-
4年目	-	-
5年目以降	20,617	36,407
合計	20,617	36,407

(イ) 繰延税金資産を認識していない繰越税額控除の金額と繰越期限

繰延税金資産を認識していない繰越税額控除の金額と繰越期限は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
1年目	-	-
2年目	-	-
3年目	-	-
4年目	-	-
5年目以降	11,968	18,512
合計	11,968	18,512

繰延税金資産の回収可能性

当連結会計年度末の繰延税金資産の金額は、69,252百万円であります。この繰延税金資産の回収可能性は将来の課税所得と将来加算一時差異に依存しており、その範囲内で繰延税金資産を認識しております。

未認識の繰延税金負債

前連結会計年度及び当連結会計年度において、繰延税金負債を認識していない子会社等の投資に係る将来加算一時差異はありません。

(2) 法人所得税

法人所得税

法人所得税の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
当期法人所得税(注1)	29,667	35,959
繰延法人所得税		
一時差異等の発生及び解消	4,978	5,063
繰延税金資産の回収可能性の評価(注2)	23,340	-
小計	18,362	5,063
合計	48,029	41,022

(注)1 米国において、「Coronavirus Aid, Relief, and Economic Security Act (CARES Act)」が2020年3月27日に成立したことに伴い、前連結会計年度及び当連結会計年度に影響を与える主な税制規定は以下のとおりです。

(繰越欠損金の繰戻し容認)

2018年1月1日以降、2020年12月31日以前に開始する課税年度に生じる繰越欠損金に関して5年間の繰り戻しを認める。

これらの結果、繰越欠損金の繰戻しによる影響額が、前連結会計年度において4,040百万円(益)、当連結会計年度において2,344百万円(益)、当期法人所得税に含まれております。

2 前連結会計年度において、当社の一部の子会社の繰延税金資産の回収可能性について見直しを行ったことによるものです。

適用税率の調整

法定実効税率と実際負担税率との差異について、原因となった主要な項目の内訳は、以下のとおりであります。

当社グループは、主に法人税、住民税及び事業税を課されており、これらを基礎として計算した法定実効税率は、前連結会計年度、当連結会計年度ともに30.6%であります。ただし、海外子会社についてはその所在地における法人税等が課されております。

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.6%	1.3%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.1%	0.1%
試験研究費等の税額控除	10.2%	7.6%
未認識の繰延税金資産の変動	41.9%	11.3%
子会社の適用税率との差異	14.1%	28.5%
子会社の未分配利益に係る税効果増減	0.3%	0.1%
条件付対価公正価値の変動額による影響	15.5%	8.2%
CARES Actによる影響	4.8%	3.0%
その他	0.7%	0.2%
実際負担税率	57.2%	52.7%

11. 1 株当たり利益

基本的1株当たり当期利益の算定上の基礎及び基本的1株当たり当期利益は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
基本的1株当たり当期利益の算定上の基礎		
親会社の所有者に帰属する当期利益(百万円)	40,753	56,219
親会社の普通株主に帰属しない当期利益(百万円)	-	-
基本的1株当たり当期利益の計算に使用する 当期利益(百万円)	40,753	56,219
発行済普通株式の加重平均株式数(千株)	397,295	397,294
1株当たり当期利益		
基本的1株当たり当期利益(円)	102.58	141.50

(注) 希薄化後1株当たり当期利益については、潜在株式が逆希薄化効果を持つため記載しておりません。当該潜在株式は、一部の子会社が発行するストック・オプション等であります。詳細は、株式報酬(注記28)に記載しております。

12. その他の包括利益

その他の包括利益の増減は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
その他の包括利益を通じての公正価値で測定する 金融資産の変動		
当期発生額	16,336	10,797
税効果額	4,986	3,176
その他の包括利益を通じての公正価値で測定 する金融資産の変動	11,350	7,621
確定給付負債（資産）の純額の再測定		
当期発生額	68	9,106
税効果額	22	2,776
確定給付負債（資産）の純額の再測定	46	6,330
在外営業活動体の換算差額		
当期発生額	7,386	5,367
在外営業活動体の換算差額	7,386	5,367
キャッシュ・フロー・ヘッジ		
当期発生額	35	156
税効果額	12	54
キャッシュ・フロー・ヘッジ	23	102
合計	3,987	4,178

13. 売却目的で保有する資産

継続的な使用ではなく、主に売却により回収が見込まれる非流動資産又は処分グループのうち、現状で直ちに売却することが可能であり、かつ、売却の可能性が非常に高い場合に売却目的保有に分類しております。売却目的保有に分類した非流動資産又は処分グループは、帳簿価額と売却コスト控除後の公正価値のいずれか低い金額で測定しております。

売却目的保有に分類した資産又は処分グループに分類後の有形固定資産又は無形資産については、減価償却又は償却を中止し、売却目的で保有する資産及び負債は、財政状態計算書上において流動項目として他の資産及び負債と区分して表示しております。

売却目的で保有する資産の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
売却目的で保有する資産		
有形固定資産	4,305	-
合計	4,305	-

前連結会計年度末において、当社が保有する旧茨木工場に係る有形固定資産を売却目的で保有する非流動資産に分類しております。当該資産については、当連結会計年度において売却が完了しております。

14.有形固定資産

(1) 取得原価、減価償却累計額及び減損損失累計額の増減並びに帳簿価額

有形固定資産の取得原価、減価償却累計額及び減損損失累計額の増減並びに帳簿価額は、以下のとおりであります。

取得原価

(単位：百万円)

	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具、器具 及び備品	土地	建設仮勘定	使用権資産	合計
2019年3月31日残高	95,984	83,575	30,387	5,089	1,992	-	217,027
会計方針の変更	-	2,820	-	-	-	14,775	11,955
2019年4月1日残高	95,984	80,755	30,387	5,089	1,992	14,775	228,982
取得	224	142	290	-	5,251	2,414	8,321
企業結合による 取得	198	166	428	-	-	2,505	3,297
建設仮勘定からの 振替	1,486	2,358	1,488	-	5,332	-	-
売却又は処分	275	5,215	1,830	-	-	1,226	8,546
売却目的で保有 する資産への振替	16,932	17,291	1,835	250	-	-	36,308
為替換算差額	284	140	147	8	11	227	817
その他	7	3	2	-	21	-	33
2020年3月31日残高	80,408	60,778	28,783	4,831	1,921	18,241	194,962
取得	773	487	466	-	4,600	4,136	10,462
建設仮勘定からの 振替	1,079	2,444	1,701	-	5,224	-	-
売却又は処分	6,988	8,154	1,655	-	27	1,691	18,515
為替換算差額	313	185	177	7	12	237	931
その他	147	31	2	-	127	68	55
2021年3月31日残高	75,438	55,771	29,474	4,838	1,409	20,855	187,785

減価償却累計額及び減損損失累計額

(単位：百万円)

	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具、器具 及び備品	土地	建設仮勘定	使用権資産	合計
2019年4月1日残高	59,111	72,889	25,451	64	27	-	157,542
減価償却費	2,764	1,791	1,956	-	-	3,989	10,500
減損損失	-	597	31	-	-	-	628
売却又は処分	243	4,751	1,755	-	-	543	7,292
売却目的で保有 する資産への振替	12,877	17,291	1,835	-	-	-	32,003
為替換算差額	124	101	107	-	-	17	349
その他	19	565	73	-	-	661	188
2020年3月31日残高	48,650	52,569	23,814	64	27	4,090	129,214
減価償却費	2,413	1,947	2,050	-	-	4,224	10,634
減損損失	-	-	-	-	128	-	128
売却又は処分	6,971	8,074	1,623	-	27	1,162	17,857
為替換算差額	176	145	142	-	-	27	490
その他	1	211	-	-	-	-	210
2021年3月31日残高	44,267	46,798	24,383	64	128	7,179	122,819

帳簿価額

(単位：百万円)

	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	工具、器具 及び備品	土地	建設仮勘定	使用権資産	合計
2019年4月1日残高	36,873	7,866	4,936	5,025	1,965	14,775	71,440
2020年3月31日残高	31,758	8,209	4,969	4,767	1,894	14,151	65,748
2021年3月31日残高	31,171	8,973	5,091	4,774	1,281	13,676	64,966

- (注) 1 有形固定資産として資産化した借入費用はありません。
 2 有形固定資産の取得に関するコミットメントについては、資本的支出コミットメント(注記31)に記載しております。
 3 建設中の有形固定資産は、建設仮勘定として表示しております。

(2) 減損損失

当社グループは、前連結会計年度628百万円、当連結会計年度128百万円の減損損失を認識し、連結損益計算書の売上原価に計上しております。

前連結会計年度に認識した減損損失628百万円は、連結損益計算書の売上原価に計上しております。当該減損損失は、医薬品事業の北米セグメントにおいて、機械装置及び運搬具並びに工具、器具及び備品について、収益性の低下により帳簿価額を使用価値である回収可能価額まで減額したものであります。

当連結会計年度に認識した減損損失128百万円は、連結損益計算書の売上原価に計上しております。当該減損損失は、医薬品事業の日本セグメントにおいて、収益性が低下した建設仮勘定について、減損損失を認識しております。回収可能価額は使用価値により測定しておりますが、収益性が見込めなくなったため、帳簿価額全額を減額しております。

15. のれん

(1) 取得原価、減損損失累計額の増減及び帳簿価額

のれんの取得原価、減損損失累計額の増減及び帳簿価額は、以下のとおりであります。

取得原価

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
期首残高	99,348	173,464
企業結合による取得(注) 為替換算差額	76,681 2,565	- 3,028
期末残高	173,464	176,492

- (注) 前連結会計年度末において暫定的な会計処理を行っておりました当社とRoivant Sciences Ltd.との間の戦略的提携に伴い取得したSumitovant Biopharma Ltd.に係る企業結合の会計処理について、当連結会計年度において確定したため、前連結会計年度における企業結合による取得について遡及修正しております。

減損損失累計額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
期首残高	-	-
減損損失 為替換算差額	- -	- -
期末残高	-	-

帳簿価額

(単位：百万円)

2019年4月1日残高	99,348
2020年3月31日残高	173,464
2021年3月31日残高	176,492

(2) 重要なのれん

連結財政状態計算書に計上されている主なのれんは、当社グループによるSumitovant Biopharma Ltd.、Sepracor Inc. (現：Sunovion Pharmaceuticals Inc.) 及びTolero Pharmaceuticals, Inc. (現：Sumitomo Dainippon Pharma Oncology, Inc.) の買収により発生したものであり、帳簿価額は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
Sumitovant Biopharma Ltd. (注)	76,075	77,403
Sepracor Inc.	68,512	69,708
Tolero Pharmaceuticals, Inc.	21,516	21,892

(注) 前連結会計年度末において暫定的な会計処理を行っておりました当社とRoivant Sciences Ltd.との間の戦略的提携に伴い取得したSumitovant Biopharma Ltd.に係る企業結合の会計処理について、当連結会計年度において確定したため、前連結会計年度におけるSumitovant Biopharma Ltd.ののれんについて遡及修正しております。

(3) のれんの減損テスト

当社グループは、原則として内部報告目的で管理されている地域別事業セグメントを減損テストで用いる資金生成単位としておりますが、一部の事業セグメントにおいては、事業セグメントに複数の資金生成単位を含んでおります。医薬品事業の北米セグメントは、「がん領域以外」と「がん領域」の2つの独立した資金生成単位より構成されております。前連結会計年度及び当連結会計年度において、当社グループが認識しているのれんは全て医薬品事業の北米セグメントに帰属しておりますが、のれんの減損テストは、上記の2つの独立した資金生成単位別に実施しております。

医薬品事業の北米セグメントに帰属するのれんを2つの独立した資金生成単位に配分した帳簿価額は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
北米(がん領域以外)(注)	149,643	152,255
北米(がん領域)	23,821	24,237
合計	173,464	176,492

(注) 前連結会計年度末において暫定的な会計処理を行っておりました当社とRoivant Sciences Ltd.との間の戦略的提携に伴い取得したSumitovant Biopharma Ltd.に係る企業結合の会計処理について、当連結会計年度において確定したため、前連結会計年度における北米(がん領域以外)ののれんについて遡及修正しております。

のれんの減損損失は、回収可能価額が帳簿価額を下回っている場合に認識され、当該のれんの帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は、経営会議で承認された事業計画を基礎として測定した使用価値に基づき算定しております。使用価値の算定には、対象となる無形資産に関する開発品の上市時期、研究開発活動の成功確率、製品及び開発品の販売価格等を含む収益の予測計画等の仮定を用いており、過去の経験及び外部からの情報に基づいた将来キャッシュ・フローの見積額を現在価値に割り引いて算定しております。

前連結会計年度及び当連結会計年度における減損テストの結果、資金生成単位の回収可能価額は帳簿価額を上回っているため、減損損失は計上しておりません。

のれんの減損テストには、資金生成単位ごとに設定した加重平均資本コスト等を割引率として用いており、減損テストに使用した税引前の割引率は、前連結会計年度は13.8%～20.0%、当連結会計年度は13.5%～17.0%であります。

なお、使用価値は当該資金生成単位の帳簿価額を十分に上回っており、使用価値の算定に用いた主要な仮定が合理的な範囲で変動があった場合にも、減損が発生する可能性は低いと判断しております。

16. 無形資産

(1) 取得原価、償却累計額及び減損損失累計額の増減並びに帳簿価額

無形資産の取得原価、償却累計額及び減損損失累計額の増減並びに帳簿価額は、以下のとおりであります。

取得原価

(単位：百万円)

	製品に係る無形資産	ソフトウェア	その他	合計
2019年4月1日残高	217,102	15,954	248	233,304
個別取得	3,043	2,661	-	5,704
企業結合による取得(注)	289,878	997	-	290,875
売却又は処分	3,856	2,242	-	6,098
為替換算差額	6,333	185	2	6,520
2020年3月31日残高	499,834	17,185	246	517,265
個別取得	2,469	2,199	2	4,670
売却又は処分	-	86	11	97
為替換算差額	8,770	212	2	8,984
その他	7	58	-	51
2021年3月31日残高	511,066	19,568	239	530,873

(注) 前連結会計年度末において暫定的な会計処理を行ってございました当社とRoivant Sciences Ltd. との間の戦略的提携に伴い取得したSumitovant Biopharma Ltd.に係る企業結合の会計処理について、当連結会計年度において確定したため、前連結会計年度における企業結合による取得について遡及修正しております。

償却累計額及び減損損失累計額

(単位：百万円)

	製品に係る無形資産	ソフトウェア	その他	合計
2019年4月1日残高	51,655	10,085	174	61,914
償却費	4,438	2,417	10	6,865
減損損失	34,568	-	-	34,568
売却又は処分	3,848	2,134	-	5,982
為替換算差額	1,010	124	1	1,135
その他	-	6	-	6
2020年3月31日残高	85,803	10,250	183	96,236
償却費	9,551	2,481	8	12,040
減損損失	35,592	-	-	35,592
売却又は処分	-	79	11	90
為替換算差額	3,532	153	1	3,686
その他	-	3	-	3
2021年3月31日残高	134,478	12,808	181	147,467

帳簿価額

(単位：百万円)

	製品に係る無形資産	ソフトウェア	その他	合計
2019年4月1日残高	165,447	5,869	74	171,390
2020年3月31日残高	414,031	6,935	63	421,029
2021年3月31日残高	376,588	6,760	58	383,406

(注) 1 無形資産の償却費は、連結損益計算書において、売上原価、販売費及び一般管理費並びに研究開発費に計上しております。

2 自己創設無形資産はありません。

3 無形資産として資産化した借入費用はありません。

4 製品に係る無形資産のうち、研究開発の段階にあり、未だ規制当局の販売承認が得られていないものは、使用可能な状態にないため、将来の経済的便益が流入する期間が予見可能でないと判断し、耐用年数を確定できない無形資産に分類しております。当該無形資産の帳簿価額は、前連結会計年度末405,492百万円及び当連結会計年度末165,928百万円であります。

(2) 重要な無形資産

連結財政状態計算書に計上されている重要な無形資産は、以下のとおりであります。

			帳簿価額（単位：百万円）		残存償却期間
			前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
Myovant Sciences Ltd.	レルゴリクス (注)	仕掛研究開発	193,246	133,184	-
	オルゴピクス	特許権	-	62,335	17年
Urovant Sciences Ltd.	ビベグロン (注)	仕掛研究開発	89,986	-	-
	ジェムテサ	特許権	-	91,336	15年
Cynapsus Therapeutics Inc.	APL-130277 (ア ポモルヒネ塩酸 塩水和物)	仕掛研究開発	54,068	-	-
	キンモビ	特許権	-	51,328	11年
Tolero Pharmaceuticals, Inc.	DSP-2033 (alvocidib)	仕掛研究開発	8,705	-	-
Tolero Pharmaceuticals, Inc.	TP-0903	仕掛研究開発	16,539	16,828	-
Boston Biomedical, Inc.	BBI608 (ナパブ カシン)	仕掛研究開発	27,638	-	-

(注) 前連結会計年度末において暫定的な会計処理を行っておりました当社とRoivant Sciences Ltd.との間の戦略的提携に伴い取得したSumitovant Biopharma Ltd.に係る企業結合の会計処理について、当連結会計年度において確定したため、前連結会計年度における重要な無形資産について遡及修正しております。

主に当社グループによるMyovant Sciences Ltd.、Urovant Sciences Ltd.、Cynapsus Therapeutics Inc. (現：Sunovion CNS Development Canada ULC)、Tolero Pharmaceuticals, Inc. (現：Sumitomo Dainippon Pharma Oncology, Inc.) 及びBoston Biomedical, Inc. (現：Sumitomo Dainippon Pharma Oncology, Inc.) の買収により取得した製品に係る無形資産であります。研究開発の状況は、「第2 事業の状況 5 研究開発活動」に記載しております。

なお、進行中の研究開発資産である仕掛研究開発は、未だ規制当局の販売承認が得られておらず、使用可能な状態にないため、将来の経済的便益が流入する期間が予見可能でないと判断し、耐用年数を確定できない無形資産に分類しております。また、研究開発プロセスに内在する不確実性のため、製品化に至らず減損損失が発生するリスクや、市場環境の変動等に伴う収益性の低下により減損損失が発生するリスクがあります。

(3) 減損損失

無形資産は、概ね独立したキャッシュ・インフローを生み出す最小の資金生成単位でグルーピングを行っております。なお、製品に係る無形資産については、製品及び開発品ごとの個別資産を資金生成単位としております。

無形資産の減損損失は、回収可能価額が帳簿価額を下回っている場合に認識され、当該無形資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は、使用価値に基づき算定しております。使用価値は、過去の経験及び外部からの情報に基づいた将来キャッシュ・フローの見積額を現在価値に割り引いて算定しております。

無形資産の減損テストには、資金生成単位ごとに設定した加重平均資本コスト等を割引率として用いており、減損テストに使用した税引前の割引率は、前連結会計年度は6.0%～19.0%、当連結会計年度は6.0%～17.0%であります。

減損テストの結果、前連結会計年度において34,568百万円の減損損失を認識し、連結損益計算書の販売費及び一般管理費並びに研究開発費にそれぞれ12,102百万円、22,466百万円計上しております。

当該減損損失は、医薬品事業の北米セグメントにおける製品に係る特許権の減損損失12,102百万円並びに血液がんを対象として開発中のサイクリン依存性キナーゼ（CDK）9阻害剤alvocidib（開発コード：DSP-2033）に係る仕掛研究開発の減損損失17,394百万円、抗がん剤amcasertib（開発コード：BB1503）に係る仕掛研究開発の減損損失1,739百万円及び北米での慢性脳梗塞を対象とした再生細胞薬SB623に係る仕掛研究開発の減損損失3,333百万円であります。

製品に係る特許権及びalvocidibに係る仕掛研究開発は、想定されていた収益性の低下により、それぞれ帳簿価額を回収可能価額4,270百万円及び8,705百万円まで減額しております。amcasertibに係る仕掛研究開発は、開発中止により収益性が見込めなくなったため、帳簿価額全額を減額しております。また、SB623に係る仕掛研究開発は、共同開発及びライセンス契約の解消により、北米の本剤に関する権利を返還したことから、収益性が見込めなくなったため、帳簿価額全額を減額しております。なお、回収可能価額は使用価値により測定しており、税引前の割引率は11.0%～19.0%を採用しております。

当連結会計年度において認識した減損損失35,592百万円は、連結損益計算書の販売費及び一般管理費並びに研究開発費にそれぞれ151百万円、35,441百万円計上しております。

当該減損損失は、主に医薬品事業の北米セグメントにおける結腸直腸がんを対象とした国際共同フェーズ3試験を実施していたナパブカシン（開発コード：BB1608）に係る仕掛研究開発の減損損失26,952百万円及び血液がんを対象として開発していたサイクリン依存性キナーゼ（CDK）9阻害剤alvocidib（開発コード：DSP-2033）に係る仕掛研究開発の減損損失8,489百万円であります。

これらの仕掛研究開発は、開発中止により収益性が見込めなくなったため、帳簿価額全額を減額しております。

なお、上記を除く仕掛研究開発については、使用価値は当該資産の帳簿価額を十分に上回っており、使用価値の算定に用いた主要な仮定が合理的な範囲で変動があった場合にも、減損が発生する可能性は低いと判断しております。

17. リース

当社グループは主に、事務所及び倉庫等をリース契約により使用しております。一部の契約には、満期後もリースを更新する選択権が付されております。また、エスカレーション条項及びリース契約によって課される重要な制限はありません。

借手としてのリース

(1) 純損益に認識された金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
減価償却費	3,989	4,224
リース負債に係る金利費用	261	320
短期リースに係る費用	232	298
少額資産のリースに係る費用	716	790
リース負債の測定に含めていない変動リース料	74	48
使用権資産のサブリース収入	646	688

(2) 使用権資産

有形固定資産に含まれる使用権資産の取得原価、減価償却累計額及び減損損失累計額の増減並びに帳簿価額は、以下のとおりであります。

取得原価

(単位：百万円)

	建物 及び構築物	機械装置 及び運搬具	土地	合計
2019年4月1日残高	10,862	3,913	-	14,775
取得	567	1,847	-	2,414
企業結合による増加	2,505	-	-	2,505
売却又は処分	72	1,154	-	1,226
為替換算差額	181	46	-	227
2020年3月31日残高	13,681	4,560	-	18,241
取得	2,966	1,165	5	4,136
売却又は処分	570	1,121	-	1,691
為替換算差額	212	25	-	237
その他	68	-	-	68
2021年3月31日残高	16,221	4,629	5	20,855

(注) なお、2019年4月1日残高には、それまで有形固定資産の取得原価に含めて計上していた使用権資産に係る金額及び同日よりIFRS第16号を適用したことによる影響が、建物及び構築物10,862百万円、機械装置及び運搬具1,093百万円含まれております。

減価償却累計額及び減損損失累計額

(単位：百万円)

	建物 及び構築物	機械装置 及び運搬具	土地	合計
2019年4月1日残高	-	661	-	661
減価償却費	2,888	1,101	-	3,989
売却又は処分	-	543	-	543
為替換算差額	4	13	-	17
2020年3月31日残高	2,884	1,206	-	4,090
減価償却費	3,178	1,045	1	4,224
売却又は処分	533	629	-	1,162
為替換算差額	14	13	-	27
2021年3月31日残高	5,543	1,635	1	7,179

(注) なお、2019年4月1日残高には、それまで有形固定資産の減価償却累計額及び減損損失累計額に含めて計上していた使用権資産に係る金額が含まれております。

帳簿価額

(単位：百万円)

	建物 及び構築物	機械装置 及び運搬具	土地	合計
2019年4月1日残高	10,862	3,252	-	14,114
2020年3月31日残高	10,797	3,354	-	14,151
2021年3月31日残高	10,678	2,994	4	13,676

(3) リース負債

リース負債の契約上の満期は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
契約上の割引前キャッシュ・フロー		
1年以内	6,137	6,059
1年超5年以内	9,021	9,360
5年超	3,704	2,307
割引前リース負債 残高	18,862	17,726
リース負債 残高	17,279	16,861
リース負債(非流動)	11,493	10,961
リース負債(流動)	5,786	5,900

(4) 連結キャッシュ・フロー計算書で認識された金額

リースに係るキャッシュ・アウトフローは、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
リース負債の返済による支出	4,837	4,727
リース負債に係る金利費用の支払い	245	322
その他	1,022	1,136
合計	6,104	6,185

18. その他の金融資産

(1) 内訳

その他の金融資産の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
償却原価で測定する金融資産		
貸付金	25,923	27,690
その他	2,551	2,603
純損益を通じて測定する金融資産		
株式等	-	32
その他の包括利益を通じて 公正価値で測定する金融資産		
株式等	199,165	190,923
債券	2,001	1,155
デリバティブ資産	-	112
合計	229,640	222,515
その他の金融資産(非流動)	200,923	193,035
その他の金融資産(流動)	28,717	29,480
合計	229,640	222,515

(2) その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産

公正価値の内訳

主要な銘柄の公正価値は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
Roivant Sciences Ltd.	142,650	123,110
JCRファーマ株式会社	8,007	12,189
株式会社メディパルホールディングス	6,538	6,888
サンバイオ株式会社	3,272	5,401
小野薬品工業株式会社	4,139	4,812
株式会社スズケン	3,637	3,998
アルフレッサホールディングス株式会社	3,305	3,501
株式会社ヘリオス	2,261	2,504
持田製薬株式会社	2,258	2,323
株式会社フォレストホールディングス	1,894	1,874
その他	21,204	24,323
合計	199,165	190,923

その他

連結会計年度末に保有しているその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の受取配当金は、前連結会計年度1,123百万円、当連結会計年度942百万円であります。

期中に処分したその他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産であるその他の金融資産は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
売却日時点の公正価値	1,608	173
累積利得・損失()	1,288	42
受取配当金	-	-

これらは事業戦略の見直し等により売却したものであり、売却時点において税引後の累積利得をその他の資本の構成要素から利益剰余金へ振り替えており、その金額は前連結会計年度913百万円、当連結会計年度28百万円であります。

また、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産のうち、取得原価に比べ公正価値の著しい下落が一時的でないものについて、税引後の累積損失をその他の資本の構成要素から利益剰余金へ振り替えており、その金額は前連結会計年度 3,070百万円、当連結会計年度 38百万円であります。

19. 棚卸資産

棚卸資産の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
商品及び製品	64,683	76,775
仕掛品	2,284	3,982
原材料及び貯蔵品	12,401	11,458
合計	79,368	92,215

なお、原材料及び貯蔵品には、連結会計年度末から12カ月を超えて使用されるものを含んでおりますが、正常営業循環期間内で保有しているものであるため、棚卸資産に含めております。

また、売上原価として純損益に計上された棚卸資産の評価減の金額は、前連結会計年度2,985百万円、当連結会計年度1,362百万円であります。

20. 営業債権及びその他の債権

(1) 内訳

営業債権及びその他の債権の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
償却原価で測定する金融資産		
売掛金及び受取手形	128,478	127,260
未収入金	5,123	7,297
契約資産	970	1,310
貸倒引当金	80	1
合計	134,491	135,866
営業債権及びその他の債権（非流動）	-	-
営業債権及びその他の債権（流動）	134,491	135,866
合計	134,491	135,866

(2) 信用リスク及び市場リスク並びに減損損失

当社グループの信用リスク及び為替リスクに対するエクスポージャー並びに営業債権及びその他の債権に関連する減損損失は、金融商品（注記30）に記載しております。

21. 現金及び現金同等物

現金及び現金同等物の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
償却原価で測定する金融資産		
現金及び預金	88,513	158,520
短期投資（現金同等物）	13,195	35,178
合計	101,708	193,698

22. 社債及び借入金

(1) 内訳

社債及び借入金の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)	平均利率	償還及び返済期限
社債(1年内償還予定の社債を除く)	-	118,993	1.47%	2050年9月
長期借入金(1年内返済予定の長期借入金を除く)	25,020	144,866	0.25%	2022年6月～ 2025年12月
1年内返済予定の長期借入金	2,960	4,960	0.16%	-
短期借入金	270,000	5,000	0.36%	-
合計	297,980	273,819	-	-
社債及び借入金(非流動)	25,020	263,859	-	-
借入金(流動)	272,960	9,960	-	-
合計	297,980	273,819	-	-

(注) 平均利率については、当連結会計年度末残高に対する加重平均利率を記載しております。

(2) 社債の発行条件

社債の発行条件の要約は、下記のとおりであります。

(単位：百万円)

会社名	銘柄	発行 年月日	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)	利率 (%)	担保	償還期限
大日本住友製薬株式会社	第1回利払繰延条項・期限前償還条項付無担保社債(劣後特約付)	2020年 9月10日	-	60,000	1.39 (注1)	なし	2050年 9月9日 (注3)
大日本住友製薬株式会社	第2回利払繰延条項・期限前償還条項付無担保社債(劣後特約付)	2020年 9月10日	-	60,000	1.55 (注2)	なし	2050年 9月9日 (注4)
合計	-	-	-	120,000	-	-	-

- (注) 1 2020年9月10日の翌日から2027年9月10日までは固定利率、2027年9月10日の翌日以降は変動利率であります(2027年9月10日の翌日に金利のステップアップが発生)。
 2 2020年9月10日の翌日から2030年9月10日までは固定利率、2030年9月10日の翌日以降は変動利率であります(2030年9月10日の翌日に金利のステップアップが発生)。
 3 2027年9月10日および2027年9月10日以降の各利払日に、または払込期日以降に税制事由もしくは資本性変更事由が生じ、かつ継続している場合に、当社の裁量で期限前償還が可能な特約条項が付されております。
 4 2030年9月10日および2030年9月10日以降の各利払日に、または払込期日以降に税制事由もしくは資本性変更事由が生じ、かつ継続している場合に、当社の裁量で期限前償還が可能な特約条項が付されております。

なお、上記の社債は償却原価で測定する金融負債に分類しており、直接取引費用を控除した金額で測定しております。

(3) 財務活動から生じるキャッシュ・フローの変動を伴う負債の変動

財務活動から生じるキャッシュ・フローの変動を伴う負債の増減は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	短期借入金	長期借入金	社債	リース負債	合計
2019年4月1日残高	-	30,940	-	2,043	32,983
財務活動によるキャッシュ・フロー	270,000	19,623	-	4,837	245,540
その他の変動					
会計方針の変更	-	-	-	15,315	15,315
使用権資産取得による増加	-	-	-	2,407	2,407
企業結合による増加	-	16,742	-	2,659	19,401
利息費用	336	54	-	261	651
利息の支払額	330	951	-	245	1,526
為替換算差額	2	149	-	224	375
その他	-	967	-	84	883
2020年3月31日残高	270,004	27,980	-	17,295	315,279
財務活動によるキャッシュ・フロー	265,000	122,040	118,927	4,727	28,760
その他の変動					
使用権資産取得による増加	-	-	-	4,089	4,089
利息費用	813	213	1,043	320	2,389
利息の支払額	811	213	883	322	2,229
為替換算差額	5	-	-	164	159
その他	-	194	-	56	138
2021年3月31日残高	5,001	149,826	119,087	16,875	290,789

(注) 上記金額は、未払利息を含んで記載しております。

23. 営業債務及びその他の債務

営業債務及びその他の債務の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
償却原価で測定する金融負債		
買掛金及び支払手形	25,640	26,076
未払金	36,611	38,562
合計	62,251	64,638
営業債務及びその他の債務(非流動)	-	-
営業債務及びその他の債務(流動)	62,251	64,638
合計	62,251	64,638

24. その他の金融負債

その他の金融負債の内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
償却原価で測定する金融負債		
預り金	3,906	3,566
その他(注)	2,754	15,410
純損益を通じて公正価値で測定する金融負債		
条件付対価	31,228	8,337
その他	-	571
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融負債		
デリバティブ負債	45	-
リース負債	17,279	16,861
合計	55,212	44,745
その他の金融負債(非流動)	41,306	21,404
その他の金融負債(流動)	13,906	23,341
合計	55,212	44,745

(注) 償却原価で測定する金融負債のその他には、当連結会計年度において、ファイザー社とのがん領域及び婦人科領域における北米でのレルゴリクス共同開発及び共同販売に関する契約に基づき受領した一時金が含まれております。詳細は、「連結財務諸表注記35 共同開発及び共同販売」に記載しております。

25. 引当金

(1) 増減明細

引当金の増減明細は、以下のとおりであります。

当連結会計年度（自 2020年4月1日 至 2021年3月31日）

（単位：百万円）

	返品調整引当金	売上割戻引当金	合計
期首残高	9,120	75,524	84,644
期中増加額	2,410	89,449	91,859
期中減少額（目的使用）	2,520	75,516	78,036
期中減少額（戻入）	531	147	678
為替換算差額	131	1,931	2,062
期末残高	8,610	91,241	99,851
引当金（非流動）	-	-	-
引当金（流動）	8,610	91,241	99,851
合計	8,610	91,241	99,851

(2) 引当金の内容

引当金は、決算日における将来の債務の決済時期及び決済に必要と予測されるキャッシュ・フロー等に関する最善の見積りに基づいて算定しております。見積りに使用した仮定と異なる結果が生じることにより、翌年度以降の連結財務諸表において引当金の金額に重要な修正を行う可能性があります。

返品調整引当金

返品による損失に備えるため、全製品及び商品の返品予測高を計上しており、期末残高のうち、Sumitomo Dainippon Pharma America, Inc.（以下、SDPA社）で販売している製品に適用される返品調整引当金は、8,598百万円になります。将来において経済的便益の流出が予測される時期は、連結会計年度末日より正常営業循環期間内であると見込んでおります。

売上割戻引当金

公的なプログラムや卸店、その他の契約等に対する売上割戻金の支出に備えて、その見込額を計上しており、期末残高のうち、SDPA社で販売している製品に適用される売上割戻引当金は、90,762百万円になります。米国で販売されている主要品目に適用される様々な保険制度（Medicaid等）に係る売上割戻金は、その決済までの期間が約1年であり確定までに時間を要するものであります。また、売上割戻金の算定の基礎となる売上割戻率は、商流（卸売業者、薬局、病院等）及び適用される保険制度によって異なることから、売上割戻引当金の見積りに当たっては、最終的な商流と適用される保険制度を見積もる必要があり、これらの経営者による判断が売上割戻引当金の見積りに重要な影響を及ぼす可能性があります。将来において経済的便益の流出が予測される時期は、連結会計年度末日より正常営業循環期間内であると見込んでおります。

26. その他の負債

その他の非流動負債及びその他の流動負債の内訳は、以下のとおりです。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
前受収益(注)	-	53,281
未払賞与	21,713	28,448
未払費用	8,477	9,204
その他	17,122	17,959
合計	47,312	108,892
その他の非流動負債	7,212	53,046
その他の流動負債	40,100	55,846
合計	47,312	108,892

(注) 前受収益は、ファイザー社とのがん領域及び婦人科領域における北米でのレルゴリクス共同開発及び共同販売に関する契約に基づき受領した一時金であります。詳細は、「連結財務諸表注記35 共同開発及び共同販売」に記載しております。

27. 従業員給付

(1) 退職後給付制度の概要

当社及び一部の連結子会社は、従業員の退職後給付に充てるため、積立型、非積立型の確定給付制度及び確定拠出制度を採用しております。

積立型制度である確定給付企業年金制度では、職務等級と勤務期間に基づいた一時金又は年金を支給しております。また、一部の確定給付企業年金制度には、退職給付信託が設定されております。

退職一時金制度では、退職後給付として、職務等級と勤務期間に基づいた一時金を支給しております。

(2) 確定給付制度

退職給付に係る負債及び資産の内訳

連結財政状態計算書における確定給付制度に係る負債及び資産は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
確定給付制度債務の現在価値	99,931	99,327
退職給付信託を含む制度資産の公正価値	76,061	84,258
積立不足又は積立超過()	23,870	15,069
退職給付に係る負債	23,870	15,069
退職給付に係る資産	-	-

確定給付制度債務

確定給付制度債務の現在価値の増減は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
期首残高	102,007	99,931
当期勤務費用	3,444	3,057
利息費用	599	628
確定給付負債(資産)の純額の再測定		
人口統計上の仮定の変更	529	68
財務上の仮定の変更	1,362	934
実績による修正	2,591	212
過去勤務費用	-	27
給付支払額	4,933	3,566
為替換算差額	12	15
その他	584	25
期末残高	99,931	99,327

(注) 確定給付制度債務の加重平均支払年数は、前連結会計年度末16.2年、当連結会計年度末14.2年であります。

制度資産

制度資産の公正価値の増減は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
期首残高	78,394	76,061
利息収益	506	371
給付支払額	3,505	2,856
事業主による拠出	2,356	2,365
確定給付負債(資産)の純額の再測定		
制度資産に係る収益	1,690	8,316
その他	-	1
期末残高	76,061	84,258

(注) 当社グループは、翌連結会計年度に2,365百万円の掛金を拠出する予定であります。

制度資産の構成

制度資産の主な分類ごとの内訳は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)			当連結会計年度 (2021年3月31日)		
	活発な市場で の市場価格が あるもの	活発な市場で の市場価格が ないもの	合計	活発な市場で の市場価格が あるもの	活発な市場で の市場価格が ないもの	合計
株式	10,863	-	10,863	22,002	-	22,002
債券	37,002	-	37,002	32,419	-	32,419
生命保険の一般勘定	-	8,965	8,965	-	9,084	9,084
現金及び現金同等物	5,082	-	5,082	3,120	-	3,120
その他	-	14,149	14,149	-	17,633	17,633
合計	52,947	23,114	76,061	57,541	26,717	84,258

(注) 制度資産合計には、確定給付企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度末において6.2%、当連結会計年度末において7.6%含まれております。また、生命保険の一般勘定は、生命保険会社により一定の予定利率と元本が保証されております。

重要な数理計算上の仮定

確定給付制度債務の現在価値の計算に用いた重要な数理計算上の仮定は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
割引率(%)	0.6	0.7

感応度分析

連結会計年度末時点で重要な数理計算上の仮定(割引率)が変動した場合の確定給付制度債務に与える影響は、以下のとおりであります。当該分析は、他のすべての変数が一定であると仮定してしております。当該分析は、連結財政状態計算書において認識されている確定給付制度債務の計算方法と同一の方法に基づいて実施しております。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
割引率が0.5%上昇した場合	6,877	6,615
割引率が0.5%低下した場合	7,217	7,419

制度資産の投資戦略・運用方針

当社の制度資産運用に関する基本方針は、退職金規程及び企業年金基金規約に規定された年金給付及び一時金等の支払いを将来にわたり確実にを行うために、許容されるリスクの範囲内で、必要とされる総合収益を長期的に確保することを目的としております。

目標とする収益率は、将来にわたって健全な確定給付制度を運営・維持するために必要な収益率、具体的には中長期的な運用上の期待リターンが割引率を上回ることを目標としております。その運用目標を達成するため、資産運用の基本方針を定めており、当社グループの状況、当社グループを取り巻く制度や環境変更に応じて変更することができるものとしております。

確定給付制度の将来キャッシュ・フローに与える影響

確定給付型企業年金制度において、将来にわたって財政の均衡を保つことができるように、5年ごとに掛金の額の再計算を行うこととしております。また、企業年金基金の毎事業年度の決算において積立金の額が責任準備金の額から許容繰越不足金を控除した額を下回る場合、掛金の額を再計算することとしております。

(3) 確定拠出制度

確定拠出制度に関して費用として認識した金額は、前連結会計年度2,473百万円、当連結会計年度2,734百万円で

あります。

(4) その他の従業員給付費用

前連結会計年度及び当連結会計年度に発生した従業員給付に係る費用は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
給料	70,150	79,251
従業員賞与	21,748	30,679
退職給付費用	7,050	7,268
その他	13,121	14,241
合計	112,069	131,439

28. 株式報酬

当社の連結子会社であるMyovant Sciences Ltd.は株式報酬制度を採用しており、当該子会社役員又は従業員等に対し、ストック・オプション等を付与しております。

ストック・オプション制度

Myovant Sciences Ltd.が発行するストック・オプションは持分決済型株式報酬であり、主に勤務期間を確定条件としております。

Myovant Sciences Ltd.のストック・オプションに関連する情報は以下のとおりであります。

() 前連結会計年度

	オプション数 (個)	加重平均 行使価格 (単位：米ドル)	加重平均 残存契約年数 (年)
取得日 (2019年12月27日)残高	7,744,257	9.20	8.29
付与	223,500	10.63	
行使	43,549	6.30	
失効	200,906	9.19	
2020年3月31日残高	7,723,302	9.25	8.08
2020年3月31日時点 行使可能残高	3,009,080	8.13	7.30

(注) 1 権利行使時における加重平均株価は、11.97米ドルであります。

2 2020年3月31日時点残高における行使価格の範囲は2.38～26.17米ドルであります。

() 当連結会計年度

	オプション数 (個)	加重平均 行使価格 (単位：米ドル)	加重平均 残存契約年数 (年)
2020年4月1日時点	7,723,302	9.25	8.08
付与	1,985,765	10.88	
行使	905,776	7.41	
失効	509,960	8.32	
2021年3月31日残高	8,293,331	9.90	6.48
2021年3月31日時点 行使可能残高	5,219,403	9.77	5.26

- (注) 1 権利行使時における加重平均株価は、20.82米ドルであります。
2 2021年3月31日時点残高における行使価格の範囲は2.38～26.17米ドルであります。

なお、ストック・オプションの公正価値を評価する目的で、ブラック・ショールズ・モデルが使用されております。期中に付与されたストック・オプションについて、ブラック・ショールズ・モデルに使用された仮定は以下のとおりであります。また、ストック・オプションの1個当たりの予想加重平均公正価値は、7.22米ドルであります。

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
予想加重平均株価(米ドル)	11.42	18.82
予想行使価格(米ドル)	10.63	10.88
予想ボラティリティ	73.0%	75.7%
予想オプション期間	6.2年	6.2年
予想配当	-	-
リスク・フリー・レート	1.2%	0.5%

- (注) 1 予想ボラティリティの見積りは、ストック・オプションの予想残存期間に対応するMyovant Sciences Ltd.及び同社と類似する上場企業である参照企業の過去のボラティリティに基づいております。
2 Myovant Sciences Ltd.の取得日以降に付与したストック・オプションの公正価値測定において使用された仮定を記載しております。

株式報酬費用

連結損益計算書において認識した株式報酬費用は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
販売費及び一般管理費	984	7,338
研究開発費	295	2,299
合計	1,279	9,637

29. 払込資本及びその他の資本

(1) 資本金

授權株式数及び発行済株式数の増減は、以下のとおりであります。

(単位：千株)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
授權株式数	1,500,000	1,500,000
発行済株式数		
期首残高	397,900	397,900
期中増減	-	-
期末残高	397,900	397,900

(注) 当社の発行する株式は、すべて権利内容に何ら制限のない無額面の普通株式であり、全額払込済であります。

(2) 自己株式

自己株式数の増減は、以下のとおりであります。

(単位：千株)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
期首残高	603	605
期中増減	2	1
期末残高	605	606

(注) 保有している自己株式は、すべて普通株式であります。なお、期中における増減は、主に単元未満株式の買取請求による増加又は単元未満株式の買増請求による減少によるものであります。

(3) 剰余金

資本剰余金

資本剰余金は、資本取引から発生した金額のうち、資本金に含まれない金額から構成されております。

利益剰余金

利益剰余金は、当連結会計年度及び過年度に純損益として認識されたもの並びにその他の資本の構成要素から振り替えられたものから構成されております。

(4) その他の資本の構成要素

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の変動

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の公正価値の累積的な純変動額であります。

確定給付負債（資産）の純額の再測定

期首の数理計算上の仮定と実際の結果との差異の影響額、数理計算上の仮定の変更による影響額、利息収益を除く制度資産の公正価値に係る収益等から構成されております。

在外営業活動体の換算差額

外貨建てで作成された在外営業活動体の財務諸表を連結する際に発生した累積的な換算差額であります。

キャッシュ・フロー・ヘッジ

未認識のヘッジ取引に関連するキャッシュ・フロー・ヘッジ手段の公正価値の累積的な純変動額のうち、ヘッジが有効と認められる部分であります。

(5) 配当

配当の総額及び1株当たり配当額

配当の総額及び1株当たり配当額は、以下のとおりであります。

(ア) 前連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

決議日	株式の種類	配当の総額 (単位：百万円)	1株当たり配当額 (単位：円)	基準日	効力発生日
定時株主総会 (2019年6月20日)	普通株式	7,549	19.00	2019年3月31日	2019年6月21日
取締役会 (2019年10月28日)	普通株式	5,562	14.00	2019年9月30日	2019年12月2日

(イ) 当連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

決議日	株式の種類	配当の総額 (単位：百万円)	1株当たり配当額 (単位：円)	基準日	効力発生日
定時株主総会 (2020年6月23日)	普通株式	5,562	14.00	2020年3月31日	2020年6月24日
取締役会 (2020年10月28日)	普通株式	5,562	14.00	2020年9月30日	2020年12月1日

基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるものは、以下のとおりであります。

(ア) 前連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

決議日	株式の種類	配当の総額 (単位：百万円)	1株当たり配当額 (単位：円)	基準日	効力発生日
定時株主総会 (2020年6月23日)	普通株式	5,562	14.00	2020年3月31日	2020年6月24日

(イ) 当連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

決議日	株式の種類	配当の総額 (単位：百万円)	1株当たり配当額 (単位：円)	基準日	効力発生日
定時株主総会 (2021年6月24日)	普通株式	5,562	14.00	2021年3月31日	2021年6月25日

30. 金融商品

(1) 資本管理

当社グループは、企業価値と株主価値の持続的かつ一体的な向上を図るため、製品及び開発品の導入並びに国内事業、北米事業、新規事業等への投資を積極的に行うとともに、株主還元についても重要な経営課題と位置付け、資本管理を行っております。なお、当社グループが適用を受ける重要な資本規制はありません。

(2) 金融リスク管理の概要

リスク管理方針

当社グループは、経営活動を行う過程において、信用リスク、流動性リスク、市場リスク等の財務上のリスクを軽減するために、リスク管理を行っております。デリバティブは、これらのリスクを一部回避するために利用しておりますが、投機目的では行っておりません。

(3) 信用リスク

概要

信用リスクとは、顧客又は金融商品の取引相手が契約上の義務を果たすことができなかつた場合に当社グループが負う財務上の損失リスクであり、主に当社グループの顧客に対する売掛金等の債権から生じます。

売掛金等に係る顧客の信用リスクに関しては、社内ですべての債権管理に関する基準に従い、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、主要な取引先の信用状況を定期的に把握する体制をとることにより、リスク低減を図っております。

信用リスクの最大エクスポージャー

当社グループが保有する金融資産の信用リスクに対する最大エクスポージャーは、連結財政状態計算書に表示

されている帳簿価額であります。

なお、連結会計年度末において、重要な信用リスクが当初認識後に著しく増加した金融資産及び信用減損金融資産はないため、金融商品の信用リスクの区分ごとの帳簿価額の記載は省略しております。

貸倒引当金の増減

当社グループでは、営業債権及びその他の債権等に関する予想信用損失について貸倒引当金を計上しております。

(ア) 営業債権

重大な金融要素を含んでいない営業債権については、類似する債権ごとに全期間の予想信用損失に等しい金額で、貸倒引当金を計上しております。

(イ) その他の債権

信用リスクが著しく増加していると判定されていない資産については、原則として12カ月の予想信用損失と同額を貸倒引当金として計上しており、同種の資産の過去の貸倒実績率に将来の経済状況等の予測を加味した引当率を帳簿価額に乗じて算定しております。信用リスクが著しく増大していると判定された資産及び信用減損金融資産については、全期間の予想信用損失と同額を貸倒引当金として計上しており、取引相手先の財務状況に将来の経済状況の予測を加味した上で個別に算定した回収可能価額と、帳簿価額との間の差額をもって算定しております。

いずれの金融資産についても、債務者からの弁済条件の見直しの要請、債務者の深刻な財政難、債務者の破産等の法的整理の開始等の場合には、信用減損金融資産として取り扱っております。また、金融資産が減損した場合、減損損失を資産の帳簿価額から直接減額せず、貸倒引当金勘定により処理しております。

なお、当社グループが計上する貸倒引当金について、重要性が乏しいため、増減分析は省略しております。

(4) 流動性リスク

概要

流動性リスクとは、当社グループが現金又はその他の金融資産により決済する金融負債に関連する債務を履行する際に、困難に直面するリスクのことです。

当社グループでは、各社が月次に資金繰計画を作成するなどの方法により、流動性リスクを管理しております。

満期分析

金融負債の契約上の期日別残高は以下のとおりであります。なお、利息については将来支払いが見込まれる金額で記載しております。

(ア) 前連結会計年度(2020年3月31日)

(単位：百万円)

	帳簿価額	契約上の キャッ シュ・ フロー	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
借入金	297,980	299,050	273,973	5,000	20,077	-	-	-

(イ) 当連結会計年度(2021年3月31日)

(単位:百万円)

	帳簿価額	契約上の キャッ シュ・ フロー	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
借入金	154,826	156,493	10,333	20,410	323	60,289	65,138	-
社債	118,993	134,256	1,764	1,764	1,764	1,764	1,764	125,436
合計	273,819	290,749	12,097	22,174	2,087	62,053	66,902	125,436

(注) 公募ハイブリッド社債(公募劣後特約付社債)の元本は、契約上の償還期限に基づき「5年超」に含んでおりますが、特約条項により早期に償還する可能性があります。詳細は、「連結財務諸表注記 22 社債及び借入金」に記載しております。

(5) 市場リスク

概要

市場リスクとは、外国為替レート、利子率及び株価等の市場価格の変動に関するリスクであり、当社グループの収益又はその保有する金融商品の価値に影響を及ぼすものであります。当社グループはそれぞれのリスクの内容に応じた軽減策を実施しております。

為替リスク

(ア) 為替リスクに対するエクスポージャー

リスク管理方針に基づいて当社グループの経営陣に提供されている当社グループの為替リスクに対するエクスポージャーに関する定量的データの要約は、以下のとおりであります。

(単位:千米ドル)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
債権	1,569,214	2,171,497
債務	92,659	107,801
連結財政状態計算書のエクスポージャー純額	1,476,555	2,063,696
先物為替予約	-	119,589
エクスポージャー純額	1,476,555	1,944,107

債権の主な内容は、外貨預金、売掛金及び貸付金であります。また、債務の主な内容は、買掛金及び未払金であります。

なお、先物為替予約は、主に一部の輸出取引に伴い計上された売掛金に対して行われたものであります。

(イ) 為替感応度分析

当社グループは主に米ドルの為替リスクに晒されております。

当社グループが決算日現在において保有する金融商品について、円が米ドルに対して5%円安となった場合に、当期利益に与える影響は、前連結会計年度5,577百万円、当連結会計年度7,477百万円であります。

なお、機能通貨建ての金融商品や在外営業活動体の資産及び負債、収益及び費用を円貨に換算する際の影響は含んでおりません。また、その他の変動要因は一定であることを前提としております。

金利リスク

当社グループが保有する有利子負債の一部は変動金利により調達されておりますが、その変動金利部分は当連結会計年度末現在で0.1%に満たず、金利リスクが当社グループの純損益に与える影響は軽微であります。従って、金利感応度分析は、重要性が乏しいため、省略しております。

(6) 金融商品の公正価値

公正価値ヒエラルキーのレベル別分類

公正価値で測定する金融商品について、測定に用いた評価技法へのインプットの観察可能性に応じて算定した公正価値を以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1：活発な市場における同一の資産又は負債の市場価格

レベル2：レベル1に含まれる市場価格以外の、直接又は間接的に観察可能なインプットにより測定した公正価値

レベル3：観察可能な市場データに基づかないインプットにより測定した公正価値

償却原価で測定する金融商品

償却原価で測定する主な金融商品の帳簿価額と公正価値は、以下のとおりであります。なお、帳簿価額が公正価値の合理的な近似値となっている金融商品及び重要性の乏しい金融商品は、以下の表に含めておりません。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)		当連結会計年度 (2021年3月31日)	
	帳簿価額	公正価値	帳簿価額	公正価値
償却原価で測定する金融負債				
社債	-	-	118,993	122,646
借入金	297,980	297,985	154,826	154,849
合計	297,980	297,985	273,819	277,495

償却原価で測定される主な金融商品に係る公正価値の測定方法は、以下のとおりであります。

() 社債

これらの公正価値は、報告日の活発でない市場における同一負債の市場価格に基づき評価しており、公正価値ヒエラルキーはレベル2であります。

() 借入金

これらの公正価値は、元利金の合計額を、同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定しており、公正価値ヒエラルキーはレベル3であります。

連結財政状態計算書において公正価値で測定する金融商品

連結財政状態計算書において公正価値で測定する金融商品の公正価値ヒエラルキーは、以下のとおりであります。

公正価値ヒエラルキーのレベル間の振替は、連結会計年度末において認識しております。なお、前連結会計年度及び当連結会計年度において、レベル間の振替が行われた重要な金融資産及び負債はありません。

(ア) 前連結会計年度(2020年3月31日)

(単位：百万円)

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
株式等	43,514	-	155,651	199,165
債券	1,235	766	-	2,001
合計	44,749	766	155,651	201,166
純損益を通じて公正価値で測定する金融負債				
条件付対価	-	-	31,228	31,228
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融負債				
デリバティブ負債	-	45	-	45
合計	-	45	31,228	31,273

(イ) 当連結会計年度(2021年3月31日)

(単位:百万円)

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産				
株式等	32	-	-	32
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
株式等	52,048	-	138,875	190,923
債券	-	1,155	-	1,155
デリバティブ資産	-	112	-	112
合計	52,080	1,267	138,875	192,222
純損益を通じて公正価値で測定する金融負債				
条件付対価	-	-	8,337	8,337
デリバティブ負債	-	539	-	539
その他	32	-	-	32
合計	32	539	8,337	8,908

公正価値ヒエラルキーのレベル3に分類された金融商品の期首から期末までの変動は、以下のとおりであります。

(ア) 金融資産

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
期首残高	16,942	155,651
購入	112,090	2,689
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の変動	27,640	19,180
売却・決済	668	173
その他	353	112
期末残高	155,651	138,875

(イ) 金融負債

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
期首残高	81,352	31,228
条件付対価公正価値の変動額(注)	48,474	22,463
為替換算差額	1,650	428
期末残高	31,228	8,337

(注) 条件付対価公正価値の変動額は、連結損益計算書において販売費及び一般管理費として認識しております。

公正価値ヒエラルキーレベル3に区分された金融資産は、主に非上場株式で構成されております。公正価値は、割引キャッシュ・フロー法により算定しており、税引前の割引率は14.1%～14.2%を採用しております。割引キャッシュ・フロー法に用いる将来キャッシュ・フローの見積りには、非上場会社における開発品の上市時期、研究開発活動の成功確率、収益予測等の計画等、多くの前提条件が含まれておりますが、これらの前提条件や割引率は、将来発生する事象によっては影響を受ける可能性があります。なお、純資産価値に近似していると考えられる非上場株式等については、主に純資産価値に基づく評価技法により公正価値を算定しております。

公正価値ヒエラルキーレベル3に区分された金融負債は、企業結合により生じた条件付対価であります。条件付対価は、特定の開発品の開発進捗に応じて支払う開発マイルストーンや販売後の売上収益に応じて支払う販売マイルストーン等であり、その公正価値は、それらが達成される可能性や貨幣の時間的価値を考慮して算定しております。

これらの公正価値測定は、当社グループの評価方針及び手続に従って行われており、金融商品の資産性質、特徴及びリスクを最も適切に反映できる評価モデルを決定しております。また、公正価値の変動に影響を与え得る重要な指標の推移を継続的に検証しております。

なお、レベル3に区分された金融商品について、それぞれ合理的と考えられる代替的な仮定に変更した場合に、公正価値の金額に重要な変動はないと考えております。

条件付対価

Elevation Pharmaceuticals, Inc. (現: Sunovion Respiratory Development Inc.、以下「エレベーション社」)及びTolero Pharmaceuticals, Inc. (現: Sumitomo Dainippon Pharma Oncology, Inc.、以下「トレロ社」)の買収においては、旧株主に対して、企業結合後の特定のマイルストーン達成に応じて、条件付対価を追加で支払うことになっております。

エレベーション社の買収においては、取得の対価として、当連結会計年度末までに189百万米ドル(17,800百万円)を支払うとともに、売上収益に応じた販売マイルストーンとして、時間的価値考慮前の金額にて最大210百万米ドル(23,249百万円)を支払う可能性があります。

トレロ社の買収においては、取得の対価として、当連結会計年度末までに195百万米ドル(22,165百万円)を支払うとともに、将来、トレロ社が開発中の化合物の開発マイルストーンとして時間的価値考慮前の金額にて最大430百万米ドル(47,605百万円)を支払う可能性があります。さらに、販売後は売上収益に応じた販売マイルストーンとして、時間的価値考慮前の金額にて最大150百万米ドル(16,607百万円)を支払う可能性があります。

当社グループは、この条件付対価については、時間的価値を考慮し、連結財政状態計算書におけるその他の金融負債として認識しております。

条件付対価の公正価値のヒエラルキーのレベルはレベル3であります。条件付対価の公正価値は、特定の開発品の開発進捗や販売後の売上収益が達成される可能性や時間的価値を考慮して算定しております。特定の開発進捗や将来の売上収益の予測等及び割引率等は、将来発生する事象によっては影響を受ける可能性があります。

条件付対価の公正価値の変動額は連結損益計算書において販売費及び一般管理費として認識しております。

当社グループが条件付対価を支払う可能性があるものの総額は、前連結会計年度末237,206百万円(割引前)、当連結会計年度末87,461百万円(割引前)です。なお、条件付対価に関する期日別支払予定額は、その不確実性により記載しておりません。

なお、Boston Biomedical, Inc. (現: Sumitomo Dainippon Pharma Oncology, Inc.)の買収に係る条件付対価については、結腸直腸がんを対象とした国際共同フェーズ3試験を実施していたナパブカシン(開発コード: BBI608)の開発中止に伴い、当連結会計年度において全額取崩しております。

条件付対価の公正価値に影響を与える重要な仮定が変動した場合に、条件付対価の公正価値に与える影響は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

		前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
売上収益	5%上昇した場合	1,088	111
	5%低下した場合	1,088	111
割引率	0.5%上昇した場合	435	111
	0.5%低下した場合	326	111

31. 資本的支出コミットメント

資産の取得に関するコミットメントは、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
有形固定資産	2,475	4,631
無形資産	73,395	71,765
合計	75,870	76,396

無形資産の取得に関するコミットメントは、主として第三者と締結した技術導入契約等に関する権利の購入によるものであります。これらの契約は、契約締結時に支払う一時金に加え、開発の進捗に応じて開発マイルストーンを支払う場合があります。上記金額は、割引前のものであり、また成功確率の調整は行わず、現在開発中であるすべての品目が成功すると仮定した場合に生じる潜在的なマイルストーン支払額をすべて含んでおります。マイルストンの達成は不確実性が非常に高いため、実際の支払額と大幅に異なる可能性があります。

なお、これらの契約のうち、主要なものに関しては、「第2 事業の状況 4 経営上の重要な契約等」に詳細を記載しております。

32. 子会社及び関連会社等

(1) 主要な子会社及び関連会社

当社の主要な子会社及び関連会社は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」において同様の内容を記載しているため、記載を省略しております。

(2) 重要な非支配持分がある子会社

当社が重要な非支配持分を認識している子会社の要約財務情報等は以下のとおりであります。なお、要約財務情報はグループ内取引を消去する前の金額であります。

Myovant Sciences Ltd.

非支配持分割合及び非支配持分の累積額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
非支配持分割合	47.9%	46.6%
非支配持分の累積額	82,716	67,583

非支配持分に配分された純損益及び非支配持分に支払った配当

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
非支配持分に配分された純損益	3,514	13,141
非支配持分に支払った配当	-	-

要約財務情報

(ア) 要約連結損益計算書及び要約連結包括利益計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
売上収益	-	6,294
当期利益又は損失()	7,336	28,368
当期包括利益又は損失()	7,425	30,028

(イ) 要約連結財政状態計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2020年3月31日)	当連結会計年度 (2021年3月31日)
非流動資産	195,432	197,959
流動資産	9,565	78,011
資産合計	204,997	275,970
非流動負債	31,110	106,276
流動負債	10,004	30,943
負債合計	41,114	137,219
資本合計	163,883	138,751
負債及び資本合計	204,997	275,970

(ウ) 要約連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー	2,090	39,327
投資活動によるキャッシュ・フロー	1,362	977
財務活動によるキャッシュ・フロー	30	25,259
現金及び現金同等物に係る換算差額	-	-
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	698	66,515
現金及び現金同等物の期末残高	8,489	75,004

(注) 前連結会計年度及び当連結会計年度における現金及び現金同等物の増減額には、現地通貨を円換算することにより生じる換算差額が含まれております。

33. 関連当事者

(1) 親会社

住友化学株式会社は、当社グループの親会社であります。

(2) 関連当事者との取引

当社グループと親会社との取引金額及び未決済残高は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

種類	名称	関連当事者関係の内容	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)		当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	
			取引金額	未決済残高	取引金額	未決済残高
親会社	住友化学株式会社	資金の貸付 及び回収	16,520	25,881	879	27,678

当該取引は、独立第三者間取引と同様の一般的な取引条件で行っております。未決済残高は担保が設定されておらず、現金で決済されています。なお、未決済残高に関する貸倒引当金はありません。

(3) 主要な経営幹部に対する報酬

当社グループの主要な経営幹部に対する報酬は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
基本報酬及び賞与	465	478

34. 企業結合及び非支配持分の取得

(取得による企業結合)

当連結会計年度において重要な企業結合はありません。

前連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

(1) 企業結合の概要

Sumitovant Biopharma Ltd.

- () 被取得企業の名称及びその事業の内容
被取得企業の名称: Sumitovant Biopharma Ltd.
事業の内容: 持株会社

- () 取得した議決権付資本持分の割合
100%

Sumitovant Biopharma, Inc.

- () 被取得企業の名称及びその事業の内容
被取得企業の名称: Sumitovant Biopharma, Inc.
事業の内容: グループ会社の管理、事業・販売開発、ヘルスケアプラットフォームの活用推進等

- () 取得した議決権付資本持分の割合
100%

Myovant Sciences Ltd.

- () 被取得企業の名称及びその事業の内容
被取得企業の名称: Myovant Sciences Ltd.
事業の内容: レルゴリクス、MVT-602等の医薬品の研究開発

- () 取得した議決権付資本持分の割合
50%

Urovant Sciences Ltd.

- () 被取得企業の名称及びその事業の内容
被取得企業の名称: Urovant Sciences Ltd.
事業の内容: ビベグロン、URO-902等の医薬品の研究開発

- () 取得した議決権付資本持分の割合
75%

Enzyvant Therapeutics Ltd.

- () 被取得企業の名称及びその事業の内容
被取得企業の名称: Enzyvant Therapeutics Ltd.
事業の内容: RVT-802、RVT-801等の医薬品の研究開発

- () 取得した議決権付資本持分の割合
100%

Altavant Sciences Ltd.

- () 被取得企業の名称及びその事業の内容
被取得企業の名称: Altavant Sciences Ltd.
事業の内容: Rodatristat ethyl等の医薬品の研究開発

- () 取得した議決権付資本持分の割合
100%

Spirovant Sciences Ltd.

- () 被取得企業の名称及びその事業の内容
被取得企業の名称: Spirovant Sciences Ltd.
事業の内容: SPIRO-2101、SPIRO-2102等の医薬品の研究開発

- () 取得した議決権付資本持分の割合
100%

(2) 取得日

2019年12月27日

(3) 被取得企業の支配の獲得方法

現金を対価とする株式取得

(4) 企業結合を行った主な理由

当社とRoivant Sciences Ltd. (以下「ロイバント社」)との間の戦略的提携に伴う株式譲渡等の手続きが2019年12月27日付けで完了しました。

当社は、「中期経営計画2022」において、収益の柱である米国での非定型抗精神病薬「ラツェダ」の独占販売期間終了後も持続的な成長を実現するため、「成長エンジンの確立」と「柔軟で効率的な組織基盤づくり」を基本方針として掲げ、事業基盤の再構築に取り組んでいます。

ロイバント社は、機敏性と起業家精神を重視したバイオファーマ会社である「Vant」を複数設立し、革新的な医薬品とテクノロジーを患者さんに迅速に提供することにより、健康に寄与することを目指しています。各Vantは、独特な手法による人材の採用やテクノロジーの導入を通じて研究開発と販売の効率化に取り組んでいます。

当社は、本戦略的提携により、2022年度までに上市が期待され将来的にブロックバスターとなりうる開発品を含む、多数のパイプラインを獲得することに加え、当社グループ全体のR&D生産性の向上、デジタルトランスフォーメーションの加速を図り、中長期的な成長を目指します。

ロイバント社は本戦略的提携のために設立した新会社Sumitovant Biopharma Ltd.(以下「スミトバント社」)にロイバント社の子会社5社の株式(Myovant Sciences Ltd.(以下「マイオバント社」)、Urovant Sciences Ltd.、Enzyvant Therapeutics Ltd.、Altavant Sciences Ltd.、Spirovant Sciences Ltd.)等を移管し、当社はスミトバント社の全株式を取得しました。

なお、スミトバント社及び傘下の5社にはそれぞれ子会社があり、これらを含め当社の連結子会社となりました。

(5) 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	224,555	百万円
取得原価		224,555	百万円

(6) 取得関連費用

取得関連費用は3,856百万円であり、連結損益計算書上、「販売費及び一般管理費」に含めて表示しております。

(7) 取得資産及び引受負債の公正価値、非支配持分及びのれん

前連結会計年度において、取得した資産および引き受けた負債の公正価値は暫定的な金額となっておりましたが、当連結会計年度において取得対価の配分を完了しました。これに伴い、入手した取得日時時点で存在した事実および状況に関する新たな情報を反映させた結果、暫定的な公正価値を以下の通り修正しております。

(単位：百万円)

科目	暫定的な公正価値	修正額	最終的な公正価値
非流動資産			
無形資産	291,643	768	290,875
その他	3,661	-	3,661
流動資産			
現金及び現金同等物	18,781	-	18,781
その他	6,172	-	6,172
非流動負債	40,840	100	40,740
流動負債	19,307	-	19,307
純資産	260,110	668	259,442
非支配持分(注2)	107,783	3,785	111,568
のれん(注3)	72,228	4,453	76,681

(注) 1 取得対価は、取得日における公正価値を基礎として、取得した資産及び引き受けた負債に配分しております。

2 非支配持分は、支配獲得日における識別可能な被取得企業の純資産の公正価値に、非支配株主に個別に帰属する部分を除き、企業結合後の非支配株主の持分割合で測定しております。

3 のれんの構成要因は、主として今後の事業展開により期待される将来の超過収益力を反映したものであります。また、当該のれんは税務上損金算入不能なものであります。

取得対価の配分が完了した結果、前連結会計年度の連結包括利益計算書、連結財政状態計算書、連結持分変動計算書について遡及修正しております。

(8) 子会社の取得による支出

(単位：百万円)

科目	金額
現金による取得対価	224,555
支配獲得時に被取得企業が保有していた現金及び現金同等物	18,781
子会社の取得による現金支払額	205,774

(9) 連結損益計算書に与える影響

前連結会計年度の連結損益計算書で認識されている取得日以降の被取得企業の収益及び純損益

売上収益	-
当期利益又は当期損失()	16,712百万円

企業結合が前連結会計年度期首に実施されたと仮定した場合の、前連結会計年度の連結損益計算書における収益及び純損益に与える影響額(非監査情報)

売上収益	-
当期利益又は当期損失()	61,053百万円

(非支配持分の取得に伴う親会社の所有持分の変動)

前連結会計年度において、当社グループは、スミトバント社の全株式取得後、マイオバント社との関係強化を図るため、マイオバント社株式の2.0%を追加取得しました。この結果、資本剰余金が1,616百万円増加しております。

当連結会計年度において、当社グループは、マイオバント社との関係強化を図るため、マイオバント社株式の2.1%を追加取得しました。この結果、資本剰余金が919百万円増加しております。また、当社グループは、当社の連結子会社であるユーロバント社に対して、当社グループとして最適なサポートを提供し、同社のビベグロンの価値最大化を実現するために、同社を完全子会社化しました。この結果、資本剰余金が2,248百万円減少しております。なお、同社の完全子会社化に伴い発生した取引コストは494百万円であり、資本剰余金から控除しております。

35. 共同開発及び共同販売

当社グループは、当社グループの開発品及び製品について、提携企業との間で共同開発及び共同販売契約を締結しております。

2020年12月26日、当社の子会社であるマイオバント社とファイザー社は、米国及びカナダにおけるがん領域及び婦人科領域におけるレルゴリクスの共同開発及び共同販売に関する契約を締結しました。また、マイオバント社はファイザー社に対し、がん領域における北米と一部のアジアを除く地域でのレルゴリクスの販売に関する独占的なオプション権を許諾しました。

本契約に基づき、レルゴリクス単剤及びレルゴリクス配合剤(以下「配合剤」)の売上収益はマイオバント社が計上し、利益および開発・販売に要する特定の費用を両社で折半します。

本契約締結の対価として、マイオバント社はファイザー社より、契約一時金として650百万米ドル(67,353百万円)を受領しました。さらに、今後、配合剤の米国承認時マイルストーンとして200百万米ドル(22,142百万円)、レルゴリクスの前立腺がんに係る売上収益と子宮筋腫及び子宮内膜症に係る売上収益のそれぞれが2,500百万ドルに達するまで段階的に支払われる販売マイルストーンを加え、総額で最大4,200百万米ドル(464,982百万円)を受け取る可能性があります。また、ファイザー社ががん領域における北米と一部のアジアを除く地域でのレルゴリクスの販売に関するオプション権を行使した場合、マイオバント社はファイザー社から50百万米ドル(5,536百万円)を受領し、売上収益に対してロイヤリティを受領します。

本提携以降、当社グループは、レルゴリクスの販売に係る売上収益及び売上原価を計上しております。また、当社グループで発生したレルゴリクスの販売費及び一般管理費、研究開発費に加え、利益の折半のために当社グループがファイザー社に支払う費用は、その性質に応じて、売上原価、販売費及び一般管理費、研究開発費に計上します。

本契約に基づき、当社グループは、ファイザー社より、当連結会計年度において契約一時金として650百万米ドル(67,353百万円)を受領しており、このうち504百万米ドル(52,224百万円)についてはその他の負債に計上し、共同開発活動に対する対価として6年間にわたり収益を認識しております。また、146百万米ドル(15,129百万円)については、当社グループが負担する研究開発費の償還分として、その他の金融負債に計上しております。当社グループは、レルゴリクスに係る当社グループが負担する研究開発費が発生する都度、当該その他の金融負債を取り崩しております。

36. 後発事象

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上収益 (百万円)	133,857	261,498	394,762	515,952
税引前四半期 (当期)利益 (百万円)	21,979	43,654	79,725	77,851
親会社の所有者に 帰属する四半期 (当期)利益 (百万円)	18,259	37,297	70,257	56,219
基本的1株当たり 四半期(当期)利益 (円)	45.96	93.88	176.84	141.50

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
基本的1株当たり 四半期利益又は損失 () (円)	45.96	47.92	82.96	35.34

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2020年3月31日)	当事業年度 (2021年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	27,694	34,664
売掛金	1 97,173	1 109,203
商品及び製品	45,716	49,591
仕掛品	1,862	3,470
原材料及び貯蔵品	10,821	10,111
前渡金	219	63
前払費用	149	72
関係会社短期貸付金	1 104,714	1 95,266
未収入金	1 7,572	1 8,280
流動資産合計	295,920	310,720
固定資産		
有形固定資産		
建物	29,777	24,938
構築物	593	531
機械及び装置	6,842	7,369
車両運搬具	16	11
工具、器具及び備品	3,397	3,652
土地	4,607	4,357
建設仮勘定	1,722	1,044
有形固定資産合計	46,954	41,902
無形固定資産		
ソフトウェア	3,421	3,322
販売権	1,785	1,034
その他	730	834
無形固定資産合計	5,936	5,190
投資その他の資産		
投資有価証券	156,017	169,124
関係会社株式	522,688	562,623
関係会社出資金	3,148	3,148
関係会社長期貸付金	1 21,893	1 69,327
長期前払費用	1,702	1,178
前払年金費用	5,248	2,777
繰延税金資産	12,736	5,196
その他	1,409	1,421
貸倒引当金	24	22
投資その他の資産合計	724,817	814,772
固定資産合計	777,707	861,864
資産合計	1,073,627	1,172,584

(単位：百万円)

	前事業年度 (2020年3月31日)	当事業年度 (2021年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	1 19,899	1 21,872
短期借入金	270,000	8,900
1年内返済予定の長期借入金	2,960	4,960
未払金	1 14,632	1 14,898
未払費用	1 953	1 991
未払法人税等	22,069	24,235
前受金	-	8
預り金	255	384
賞与引当金	5,461	5,380
その他	698	1,257
流動負債合計	336,927	82,885
固定負債		
社債	-	120,000
長期借入金	25,020	145,060
長期預り金	3,608	3,365
退職給付引当金	10,846	11,093
その他	63	-
固定負債合計	39,537	279,518
負債合計	376,464	362,403
純資産の部		
株主資本		
資本金	22,400	22,400
資本剰余金		
資本準備金	15,860	15,860
その他資本剰余金	1	1
資本剰余金合計	15,861	15,861
利益剰余金		
利益準備金	5,288	5,288
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	1,321	1,250
別途積立金	275,510	275,510
繰越利益剰余金	357,333	462,779
その他利益剰余金合計	634,164	739,539
利益剰余金合計	639,452	744,827
自己株式	677	679
株主資本合計	677,036	782,409
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	20,127	27,772
評価・換算差額等合計	20,127	27,772
純資産合計	697,163	810,181
負債純資産合計	1,073,627	1,172,584

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2019年 4月 1日 至 2020年 3月 31日)	当事業年度 (自 2020年 4月 1日 至 2021年 3月 31日)
売上高	1 311,994	1 313,890
売上原価	1 77,562	1 91,927
売上総利益	234,432	221,963
返品調整引当金戻入額	2	1
差引売上総利益	234,434	221,964
販売費及び一般管理費	1, 2 96,581	1, 2 94,290
営業利益	137,853	127,674
営業外収益		
受取利息及び配当金	1 5,842	1 6,996
為替差益	-	6,368
その他	1 221	1 562
営業外収益合計	6,063	13,926
営業外費用		
支払利息	1 433	1 1,963
社債発行費	-	1,074
寄付金	687	979
固定資産除却損	463	189
為替差損	783	-
その他	792	1,467
営業外費用合計	3,158	5,672
経常利益	140,758	135,928
特別利益		
固定資産売却益	-	16,906
投資有価証券売却益	1,063	-
特別利益合計	1,063	16,906
特別損失		
投資有価証券評価損	4,422	-
製品回収関連費用	550	-
特別損失合計	4,972	-
税引前当期純利益	136,849	152,834
法人税、住民税及び事業税	32,387	32,164
法人税等調整額	3,691	4,171
法人税等合計	36,078	36,335
当期純利益	100,771	116,499

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本								
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金			利益剰余金 合計
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金			
					固定資産 圧縮積立金	別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	22,400	15,860	1	15,861	5,288	1,392	275,510	269,602	551,792
当期変動額									
剰余金の配当								13,111	13,111
固定資産圧縮積立金の取崩						71		71	-
当期純利益								100,771	100,771
自己株式の取得									
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)									
当期変動額合計	-	-	-	-	-	71	-	87,731	87,660
当期末残高	22,400	15,860	1	15,861	5,288	1,321	275,510	357,333	639,452

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本 合計	その他 有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	674	589,379	29,727	29,727	619,106
当期変動額					
剰余金の配当		13,111			13,111
固定資産圧縮積立金の取崩		-			-
当期純利益		100,771			100,771
自己株式の取得	3	3			3
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			9,600	9,600	9,600
当期変動額合計	3	87,657	9,600	9,600	78,057
当期末残高	677	677,036	20,127	20,127	697,163

当事業年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本								
	資本金	資本剰余金			利益剰余金				
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益剰余金			利益剰余金 合計
					固定資産 圧縮積立金	別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	22,400	15,860	1	15,861	5,288	1,321	275,510	357,333	639,452
当期変動額									
剰余金の配当								11,124	11,124
固定資産圧縮積立金の取崩						71		71	-
当期純利益								116,499	116,499
自己株式の取得									
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)									
当期変動額合計	-	-	-	-	-	71	-	105,446	105,375
当期末残高	22,400	15,860	1	15,861	5,288	1,250	275,510	462,779	744,827

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本 合計	その他 有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	677	677,036	20,127	20,127	697,163
当期変動額					
剰余金の配当		11,124			11,124
固定資産圧縮積立金の取崩		-			-
当期純利益		116,499			116,499
自己株式の取得	2	2			2
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			7,645	7,645	7,645
当期変動額合計	2	105,373	7,645	7,645	113,018
当期末残高	679	782,409	27,772	27,772	810,181

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

(2) その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定しております。）

時価のないもの

移動平均法による原価法

2 たな卸資産の評価基準及び評価方法

通常の販売目的で保有するたな卸資産

総平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定しております。）

3 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定額法により償却しております。なお、耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物	3～60年
機械及び装置並びに 車両運搬具	2～17年
工具、器具及び備品	2～20年

(2) 無形固定資産

定額法により償却しております。なお、償却期間は利用可能期間に基づいております。

4 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売掛金、受取手形等債権の貸倒れによる損失に備えて、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員賞与の支給に備えて、その支給見込額を計上しております。

(3) 返品調整引当金

返品による損失に備えて、全製品・商品の返品予測高に対する売買利益相当額を計上しております。

(4) 売上割戻引当金

卸店に対する売上割戻金の支出に備えて、次の基準により算定した額を計上しております。

卸店の販売実績に基づいて算定する売上割戻金については、期末現在における卸店在庫に割戻率を乗じた額。

売掛金回収額に基づいて算定する売上割戻金については、期末対象売掛金に割戻率を乗じた額。

(5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（14年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（14年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理しております。

5 ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっております。なお、振当処理の要件を満たしている為替予約については振当処理によっております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段

為替予約取引

ヘッジ対象

外貨建金銭債権債務及び外貨建予定取引

(3) ヘッジ方針

社内管理規程に基づき為替リスクを回避する目的で為替予約取引を行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ対象の時価の変動の累計とヘッジ手段の時価の変動の累計を比較することにより、有効性を評価しております。また為替予約取引については、ヘッジ対象とヘッジ手段の重要な条件が同一であるため有効性の評価を省略しております。

6 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(重要な会計上の見積りに関する注記)

会計上の見積りは、財務諸表作成時に入手可能な情報に基づいて合理的な金額を算出しております。当事業年度の財務諸表に計上した金額が会計上の見積りによるもののうち、翌事業年度の財務諸表に重要な影響を及ぼすリスクがある項目は以下のとおりであります。

Sumitomo Dainippon Pharma America, Inc.(以下「SDPA社」) 株式

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

275,519百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

非上場の子会社の株式等、時価を把握することが極めて困難な株式は、当該株式の発行会社の財政状態に超過収益力等を反映した価額を実質価額として算定し、この実質価額が著しく低下したときには、回復可能性が十分な証拠によって裏付けられる場合を除いて、評価損を認識しております。

SDPA社株式の実質価額には、医薬品事業の北米セグメントに帰属するがん領域からの超過収益力等を反映しており、のれん及び無形資産に減損が生じた場合には、超過収益力等を反映した実質価額の算定に影響を及ぼし、翌事業年度の財務諸表において、SDPA社株式の金額に重要な影響を与える可能性があります。

なお、のれん及び無形資産については、「第5 経理の状況 1.連結財務諸表等 連結財務諸表注記 2.作成の基礎 (4) 重要な会計上の見積り、判断及び仮定」に記載しております。

(表示方法の変更)

「会計上の見積りの開示に関する会計基準」(企業会計基準第31号 2020年3月31日)を当事業年度の年度末に係る財務諸表から適用し、財務諸表に重要な会計上の見積りに関する注記を記載しております。

ただし、当該注記においては、当該会計基準第11項ただし書きに定める経過的な取扱いに従って、前事業年度に係る内容については記載しておりません。

(貸借対照表関係)

1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (2020年3月31日)	当事業年度 (2021年3月31日)
短期金銭債権	146,570百万円	154,646百万円
短期金銭債務	6,260百万円	8,564百万円
長期金銭債権	21,893百万円	69,327百万円

2 保証債務

当社従業員の金融機関からの住宅資金借入金に対して債務保証を行っております。

	前事業年度 (2020年3月31日)	当事業年度 (2021年3月31日)
	34百万円	20百万円

(損益計算書関係)

1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当事業年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	168,875百万円	154,710百万円
仕入高	15,303百万円	14,585百万円
その他の営業取引高	10,308百万円	11,407百万円
営業取引以外の取引による取引高	6,094百万円	9,653百万円

2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額

	前事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)	当事業年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
給料	13,110百万円	13,851百万円
賞与引当金繰入額	3,609百万円	3,492百万円
減価償却費	2,711百万円	2,075百万円
研究開発費	36,208百万円	36,100百万円

販売費に属する費用のおおよその割合	35%	35%
一般管理費に属する費用のおおよその割合	65%	65%

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められるため、子会社株式及び関連会社株式の時価を記載しておりません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

区分	前事業年度 (2020年3月31日)	当事業年度 (2021年3月31日)
子会社株式	521,854	562,141
関連会社株式	834	482
計	522,688	562,623

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2020年3月31日)	当事業年度 (2021年3月31日)
繰延税金資産		
賞与引当金否認	1,670百万円	1,645百万円
売上割戻引当金否認	38百万円	22百万円
未払事業税否認	1,328百万円	1,448百万円
退職給付引当金否認	3,317百万円	3,392百万円
投資有価証券評価損否認	3,902百万円	539百万円
前払研究費否認	9,327百万円	5,542百万円
税務上の貯蔵品否認	1,943百万円	2,113百万円
関係会社株式(会社分割に伴う承継会社株式等)	2,149百万円	2,149百万円
その他	6,226百万円	4,721百万円
繰延税金資産小計	29,900百万円	21,571百万円
評価性引当額	5,790百万円	2,467百万円
繰延税金資産合計	24,110百万円	19,104百万円
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	8,782百万円	12,103百万円
前払年金費用否認	1,605百万円	849百万円
固定資産圧縮積立金	582百万円	551百万円
子会社の資本剰余金払戻	405百万円	405百万円
繰延税金負債合計	11,374百万円	13,908百万円
繰延税金資産の純額	12,736百万円	5,196百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2020年3月31日)	当事業年度 (2021年3月31日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.2%	0.1%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.4%	0.8%
試験研究費等の税額控除	4.8%	3.5%
住民税均等割	0.1%	0.1%
評価性引当額増減	1.0%	2.2%
その他	0.3%	0.5%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	26.4%	23.8%

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	29,777	1,033	4,020	1,852	24,938	36,638
	構築物	593	33	46	49	531	2,447
	機械及び装置	6,842	2,192	71	1,594	7,369	42,660
	車両運搬具	16	2	0	7	11	193
	工具、器具及び備品	3,397	1,552	20	1,277	3,652	19,227
	土地	4,607	-	250	-	4,357	-
	建設仮勘定	1,722	5,463	6,141	-	1,044	-
	計	46,954	10,275	10,548	4,779	41,902	101,165
無形固定資産	ソフトウェア	3,421	1,216	-	1,315	3,322	-
	販売権	1,785	-	-	751	1,034	-
	その他	730	1,468	1,336	28	834	-
	計	5,936	2,684	1,336	2,094	5,190	-

(注) 1. 「期末減価償却累計額」欄には、減損損失累計額が含まれております。

2. 当期増加額のうち主なものは次のとおりであります。

鈴鹿工場 新包装設備等

938百万円

(建物 0百万円、機械及び装置 936百万円、車両運搬具 0百万円、
工具、器具及び備品 1百万円)

3. 当期減少額のうち主なものは次のとおりであります。

旧茨木工場 売却

4,124百万円

(建物 3,832百万円、構築物 42百万円、機械及び装置 0百万円、車両運搬具 0百万円、
工具、器具及び備品 0百万円、土地 250百万円)

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	24	-	2	22
賞与引当金	5,461	5,380	5,461	5,380
返品調整引当金	10	10	10	10
売上割戻引当金	124	72	124	72

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し	
取扱場所	大阪市中央区北浜四丁目5番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 (特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	
買取・買増手数料	無料
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告とする。ただし事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。当社の公告掲載URLは次のとおり。 https://www.ds-pharma.co.jp/
株主に対する特典	なし

(注) 当社は当社定款第9条において、単元未満株主の権利について以下のとおり制限する旨を定めております。当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない。

1. 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
2. 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
3. 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当ておよび募集新株予約権の割当てを受ける権利
4. 単元未満株式の買増請求をする権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- | | |
|---|-------------------------|
| (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書
(第200期事業年度 自 2019年4月1日 至 2020年3月31日) | 2020年6月23日
関東財務局長に提出 |
| (2) 内部統制報告書及びその添付書類
(第200期事業年度 自 2019年4月1日 至 2020年3月31日) | 2020年6月23日
関東財務局長に提出 |
| (3) 臨時報告書
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく臨時報告書 | 2020年6月24日
関東財務局長に提出 |
| 企業内容等の開示に関する内閣府令19条第2項第19号(財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に著しい影響を与える事象)の規定に基づく臨時報告書 | 2020年6月26日
関東財務局長に提出 |
| 企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号(代表取締役の異動)の規定に基づく臨時報告書 | 2021年3月1日
関東財務局長に提出 |
| 企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第3号(特定子会社の異動)の規定に基づく臨時報告書 | 2021年3月31日
関東財務局長に提出 |
| (4) 臨時報告書の訂正報告書
2020年6月24日提出の上記(3)の臨時報告書に係る訂正報告書 | 2020年9月29日
関東財務局長に提出 |
| 2020年6月24日提出の上記(3)の臨時報告書に係る訂正報告書 | 2020年10月9日
関東財務局長に提出 |
| (5) 四半期報告書及び確認書
(第201期第1四半期 自 2020年4月1日 至 2020年6月30日) | 2020年8月7日
関東財務局長に提出 |
| (第201期第2四半期 自 2020年7月1日 至 2020年9月30日) | 2020年11月5日
関東財務局長に提出 |
| (第201期第3四半期 自 2020年10月1日 至 2020年12月31日) | 2021年2月4日
関東財務局長に提出 |

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2021年6月24日

大日本住友製薬株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

大阪事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 原 田 大 輔

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 俣 野 広 行

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 立 石 政 人

< 財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている大日本住友製薬株式会社の2020年4月1日から2021年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結財政状態計算書、連結持分変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表注記について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」第93条により規定された国際会計基準に準拠して、大日本住友製薬株式会社及び連結子会社の2021年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

北米がん領域に帰属するのれんの減損テストにおける回収可能価額の見積りの合理性	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>大日本住友製薬株式会社は、連結財務諸表注記「15. のれん」に記載のとおり、医薬品事業の北米セグメントに含まれる資金生成単位であるがん領域（以下「北米がん領域」）に帰属するのれんとして、24,237百万円を連結財政状態計算書に計上している。当該のれんは、連結総資産の1.8%を占めており、大日本住友製薬株式会社グループによる Boston Biomedical, Inc. 及び Tolero Pharmaceuticals, Inc. の支配の獲得により発生したものである。</p> <p>大日本住友製薬株式会社は国際会計基準を適用しており、のれんは、年次又は減損の兆候があると判断される場合にはその都度、減損テストが実施される。減損テストに当たっては、回収可能価額が帳簿価額を下回る場合には、帳簿価額が回収可能価額まで減額され、帳簿価額の減少額は減損損失として認識される。</p> <p>当連結会計年度において大日本住友製薬株式会社は、北米がん領域に帰属するのれんの減損テストにおける回収可能価額として、使用価値を用いている。この使用価値の測定に用いられる将来キャッシュ・フローは、経営者が作成した北米がん領域の事業計画を基礎として見積もられるが、北米がん領域において開発が進められている開発品の上市時期、研究開発活動の成功確率、販売価格等を含む収益の予測計画には高い不確実性を伴うため、これらの経営者による判断が将来キャッシュ・フローの見積りに重要な影響を及ぼす。また、使用価値の測定に用いる割引率の見積りにおける計算手法及びインプットデータの選択には、評価に関する高度な専門知識を必要とする。</p> <p>以上から、当監査法人は、北米がん領域に帰属するのれんの減損テストにおける回収可能価額の見積りの合理性が、当連結会計年度の連結財務諸表監査において特に重要であり、「監査上の主要な検討事項」の一つに該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、北米がん領域に帰属するのれんの減損テストにおける回収可能価額の見積りの合理性を評価するため、北米がん領域を統括する連結子会社である Sumitomo Dainippon Pharma America, Inc.（以下「SDPA社」）の監査人に監査の実施を指示し、以下を含む監査手続の実施結果についての報告を受け、十分かつ適切な監査証拠が入手されているか否かを検証した。</p> <p>(1) 内部統制の評価</p> <p>北米がん領域に帰属するのれんの減損テストにおける使用価値の測定に関連する内部統制の整備及び運用状況の有効性について、特に将来キャッシュ・フローの見積りに関する内部統制に焦点を当ててSDPA社の監査人により評価が実施されていること</p> <p>(2) 使用価値の見積りの合理性の評価</p> <p>将来キャッシュ・フローの見積りの基礎となる北米がん領域の事業計画の作成に当たって採用された主要な仮定やその根拠について経営者及び北米がん領域の責任者に対して質問したほか、主に以下の手続の実施を通じて、SDPA社の監査人によりその合理性の評価が実施されていること</p> <p>将来キャッシュ・フローの見積りに利用された事業計画と経営者によって承認された事業計画との整合性の確認</p> <p>開発品の収益予測の主要な構成要素である開発品の上市時期、研究開発活動の成功確率及び開発品の販売価格と、外部専門機関等から入手した情報との比較</p> <p>前期と当期の会計上の見積りに使用した主要な仮定を比較し、当期の変更理由が当期の状況に照らして合理性が認められるか否かの検討</p> <p>評価の専門家を利用し、割引率について、当該専門家が外部情報等に基づき独自に見積もった割引率との比較による合理性の評価</p>

監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>医薬品事業の北米セグメントに含まれるSDPA社の主要品目に適用される Medicaid制度に係る売上割戻引当金の見積りの合理性</p> <p>大日本住友製薬株式会社の当連結会計年度の連結財政状態計算書において、医薬品事業の北米セグメントに含まれる連結子会社であるSDPA社の売上割戻引当金90,762百万円が計上されており、これは連結総資産の6.9%を占めている。</p> <p>連結財務諸表注記「25. 引当金」に記載のとおり、大日本住友製薬株式会社グループは、公的なプログラム、卸店、及びその他の契約等に対する売上割戻金の支出に備えて、その見込額を売上割戻引当金として計上している。</p> <p>米国で販売されている主要品目に適用される様々な保険制度（Medicaid等）に係る売上割戻金は、収益の調整項目として金額的に重要性が高く、また、その決済までの期間が約1年であり確定までに時間を要する。また、売上割戻金の算定の基礎となる売上割戻率は、商流（卸売業者、薬局、病院等）及び適用される保険制度によって異なることから、売上割戻引当金の見積りに当たっては、最終的な商流と適用される保険制度を見積もる必要があり、これらの経営者による判断が売上割戻引当金の見積りに重要な影響を及ぼす。</p> <p>以上から、当監査法人は、医薬品事業の北米セグメントに含まれるSDPA社の主要品目に適用されるMedicaid制度に係る売上割戻引当金の見積りの合理性が、当連結会計年度の連結財務諸表監査において特に重要であり、「監査上の主要な検討事項」の一つに該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、医薬品事業の北米セグメントに含まれるSDPA社の主要品目に適用されるMedicaid制度に係る売上割戻引当金の見積りの合理性を評価するため、SDPA社の監査人に監査の実施を指示し、以下を含む監査手続の実施結果についての報告を受け、十分かつ適切な監査証拠が入手されているか否かを検証した。</p> <p>(1) 内部統制の評価</p> <p>SDPA社の主要品目に適用されるMedicaid制度を含む売上割戻引当金の算定に関連する内部統制の整備及び運用状況の有効性について、SDPA社の監査人により評価が実施されていること</p> <p>(2) SDPA社の主要品目に適用されるMedicaid制度に係る売上割戻引当金の見積りの合理性の評価</p> <p>主に以下の手続の実施を通じて、SDPA社の監査人によりその合理性の評価が実施されていること</p> <p>過年度に計上した売上割戻引当金と支払実績との比較による見積りの精度の評価</p> <p>主要品目の商流別の販売数量の見積りについて、卸売業者から提供された情報や、外部情報と照らし、その合理性を評価</p> <p>評価の専門家（Government pricing specialist）を利用し、売上割戻率の計算方法が見積り時点の制度に基づいているか否かを検証</p>

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、国際会計基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、国際会計基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価

の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。

- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、国際会計基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないとは判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、大日本住友製薬株式会社の2021年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、大日本住友製薬株式会社が2021年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程

を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。

独立監査人の監査報告書

2021年6月24日

大日本住友製薬株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

大阪事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 原 田 大 輔

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 俣 野 広 行

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 立 石 政 人

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている大日本住友製薬株式会社の2020年4月1日から2021年3月31日までの第201期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、大日本住友製薬株式会社の2021年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

関係会社株式（Sumitomo Dainippon Pharma America, Inc.に対する投資持分）の評価損計上の要否に関する判断の妥当性	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>注記事項（重要な会計上の見積りに関する注記） Sumitomo Dainippon Pharma America, Inc.（以下「SDPA社」）株式に記載のとおり、大日本住友製薬株式会社の貸借対照表に計上されている関係会社株式562,623百万円には、非上場の子会社であるSDPA社に対する投資275,519百万円が含まれており、総資産の23.5%を占めている。</p> <p>非上場の子会社に対する投資等、時価を把握することが極めて困難と認められる株式は、当該株式の発行会社の財政状態の悪化により実質価額が著しく低下したときには、回復可能性が十分な証拠によって裏付けられる場合を除いて、投資について評価損の認識が必要となる。</p> <p>大日本住友製薬株式会社においては、非上場の子会社に対する投資の評価に当たり、SDPA社が営む医薬品事業の北米セグメントに帰属するがん領域（以下「北米がん領域」）からの超過収益力等を反映した価額で実質価額を算定している。連結財務諸表において、北米がん領域ののれんは、年次、又は減損の兆候がある場合にはその都度、減損テストが行われており、このテスト結果は、超過収益力等を反映した実質価額の算定に影響する（連結財務諸表に関する監査上の主要な検討事項「北米がん領域に帰属するのれんの減損テストにおける回収可能価額の見積りの合理性」参照）。減損テストにおける使用価値の測定に用いられる将来キャッシュ・フローは、経営者が作成した北米がん領域の事業計画を基礎として見積もられるが、北米がん領域において開発が進められている開発品の上市時期、研究開発活動の成功確率、販売価格等を含む収益の予測計画には高い不確実性を伴うため、これらの経営者による判断が将来キャッシュ・フローの見積りに重要な影響を及ぼす。また、使用価値の測定に用いる割引率の見積りにおける計算手法及びインプットデータの選択には、評価に関する高度な専門知識を必要とする。</p> <p>以上から、当監査法人は、関係会社株式（SDPA社に対する投資持分）の評価損計上の要否に関する判断の妥当性が、当事業年度の財務諸表監査において特に重要であり、「監査上の主要な検討事項」に該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、関係会社株式（SDPA社に対する投資持分）の評価損計上の要否に関する判断の妥当性について、SDPA社の財政状態にSDPA社が営む北米がん領域の超過収益力等を反映した価額で実質価額が算定され、著しい低下の有無が検討されていることを確認した。また、当該実質価額の算定に重要な影響を与える北米がん領域に帰属するのれんを含む資金生成単位の減損テストにおける回収可能価額の見積りについて、連結財務諸表に関する監査上の主要な検討事項「北米がん領域に帰属するのれんの減損テストにおける回収可能価額の見積りの合理性」に記載の監査上の対応を実施した。</p>

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- (注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。